

川柳塔

令和三年二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一二五号



日川協加盟

No.1125

二月号

第九回 春の川柳塔まつり誌上大会募集

川柳塔社では、日頃句会などにお出掛けになれない方々を含め、結社を越えて広く川柳をお楽しみいただく機会として、第九回誌上大会を企画いたしました。参加要領は左記のとおりです。是非皆様のご参加をお待ち申し上げます。

川柳塔社

課題と選者（各題2句 共選）

課題吟

「波」 野沢省悟（川柳触光社）
平井美智子（川柳塔社）

「飾る」 弘兼秀子（ふあうすと川柳社）
竹治ちかし（川柳塔社）

「自由吟」 芳賀博子（川柳宙）
小島蘭幸（川柳塔社）

投句要領 規定の用紙（コピー可）または、用紙の入手できない場合は便箋などご使用いただいても結構です。

投句料 一〇〇〇円（切手は不可）

投句締切 令和三年二月二十八日（日）消印有効
送付先 〒543-0052

大阪市天王寺区大道一―一四―一七―二〇一
川柳塔社 誌上大会係 宛

賞及び発表

TEL/FAX（〇六）六七七九―三四九〇
各題特選に賞呈 発表は川柳塔誌五月号誌上
川柳塔誌を購読されていない方には発表誌呈

「川柳雑誌」「川柳塔」通巻一〇〇〇号記念出版

『麻生路郎読本』



麻生路郎
読本

A5版

514頁

頒価 三〇〇〇円

（郵送料共）

目次

麻生路郎アルバム

麻生路郎作品「旅人」「旅人その後の作品」

麻生路郎文集・麻生路郎語録

麻生路郎物語（東野大八）

麻生路郎の人と作品

麻生路郎作品「福寿草」

麻生路郎著作解題・麻生路郎年譜

麻生路郎・葎乃作品索引

ご希望の方は左記の事務所までお申し込みください。

〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号

電話 06-6779-3490
花野ビル201号

川柳塔社

振替 〇〇九八〇―四―二九八四七九番

一枚の写真から

小島 蘭 幸

新型コロナウイルスの第三波で、私の住む広島県も昨年の12月から感染爆発が続いています。12月24日のNHKひるまえ川柳も生放送でしたが、電話出演となりました。現在私は郵便局へ行くぐらいで家籠りの日々です。

そんな中、同級生の山内静海君から、「親父の川柳の本が沢山あるんじゃが処分してくれんか」と連絡がありました。私はすぐに取りに行きました。川柳塔は改題第1号から1年分ずつ合本されていて21年分はありました。他にも麻生路郎の「川柳とは何か」をはじめ著名柳人の句集も……。その中に中島生々庵川柳塔社初代主幹を囲んだモノクロ写真がありました。山内静水竹原川柳会会長、森井菁居、三宅不朽、岩本文晴（同人岩本笑子の夫君）、私が写っています。四つ切り判で余白に

老若はなし盃も川柳も

薫 風

の揮毫があります。生々庵主幹は、昭和48年9月2日に開催された、川柳たけはら200号記念第16回近県川柳大会に出席されておられますの、大会終了後に一緒に写したものだと思われれます。今から48年前で私は25歳でした。

この大会は出席者一四〇名、投句者七十七名の盛会でした。生々庵主幹は、竹原大会に出席しての中で「：大阪からの一行と前夜から旅館に泊り、鋭気を養って明日に備え、朝早く一同揃うて裏山の観音様にお詣り、大会の賞品は全部頂きというような意気込みで、10時過ぎ会場の福祉会館に着いた：」と書いておられます。垂井葵水、小浜牧人、高杉鬼遊氏が上位入賞されています。菊沢小松園先生が選者を務め、生々庵主幹は祝辞を述べられました。

墓石の朱は褪せ未亡人長者

ベレー帽打算の人と思われず

もう記憶しかない父を養められる

新聞が気になる株を少し持ち

新聞種になる失言をしてしまい

生々庵

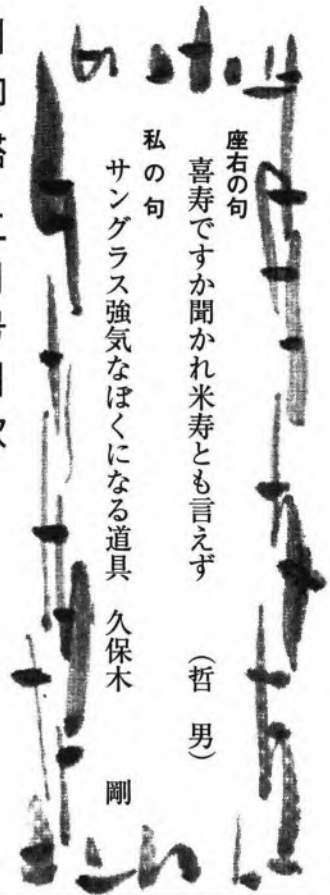
小松園

葵 水

鬼 遊

牧 人

一枚の写真から中島生々庵主幹をはじめ、多くの柳友を偲ぶことが出来ました。



座右の句

喜寿ですか聞かれ米寿とも言えず

(哲男)

私の句

サングラス強気なほくなる道具

久保木

剛

川柳塔 二月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「城崎温泉」

■巻頭言 一枚の写真から

職人氣質

川柳塔(同人吟)

名句選・この一句

川柳塔の川柳讃歌[㊤]

西尾葉句集「水鶏笛」

自選集

句集の森

温故知新

水煙抄

俳風柳多留一二篇研究 6

英語 de Senryu ㊤

■追悼文(加川靖鬼さん)

小島 蘭 幸 ……(1)

清 水 白 柳 ……(2)

小島 蘭 幸 選 ……(4)

木 津 川 計 ……(38)

木 津 川 計 ……(38)

桜 井 千 秀 ……(43)

桜 井 千 秀 ……(43)

西 出 楓 楽 選 ……(44)

西 出 楓 楽 選 ……(44)

吉 村 侑 久 代 ……(64)

吉 村 侑 久 代 ……(64)

藤 井 宏 造 ……(65)

職人氣質

清^{しみず}水^{みづ}白^{はく}柳^{りゅう}

二月といえばあらゆるものが凍る季節で、その凍ることを待っている職業もあるが左官のような仕事は寒さに弱いもの一つだ。

左官屋は寒波に弱し今日も来ず 白柳

世間でよく言われている言葉に職人芸とか職人氣質というのがある。職人芸というのは手際よくものを仕上げてゆくことを言うのだと思っている。そうした職人が作ったものは見かけは奇麗だが、その一つ一つに魂がこもっていないから心に触れるものが少ない。

川柳についてもそんなことが言えそうな気がする。課題を与えられたらすぐに鉛筆を持って淀みなく作句出来る川柳職人が余りにも多いように思う。難のない句さえ出来ればそれでいいのではないかと言われたらその通りで文句の言いやうも

（愛染帖）	新家完司選	（66）
檸檬抄「ゆらゆら」	石橋芳山・古今堂蕉子共選	（70）
一路集「ふつくら」	中村金祥選	（74）
（休む）	藤井寿代選	（75）
初歩教室「コピー」	居谷真理子	（76）
『麻生路郎読本』余滴 ⁽⁶²⁾	兼原道夫	（78）
インスピレーション・ナビ 印象吟	大西泰世	（80）
川柳塔鑑賞	梶谷和郎	（82）
水煙抄鑑賞	冨永恭子	（84）
せんりゅう飛行船 ⁽¹²⁾	新家完司	（85）
十二月本社誌上句会		（86）
各地柳壇（佳句地十選／小沢 淳／川本 畔）		（95）
二月各地句会案内		（108）
柳界展望		（110）
■編集後記（ひとこと／副井ゆたか）	朱夏・憲彦	（112）

座右の句

いい笑顔美人でなくていいのです

（能子）

私の句

ゆつくりと走れば見えてきた景色 近 兼 敦 子

ないが、どうもそれではいけないような気がする。

ありきたりの可もなく不可もない句が羅列されているのを見ると、いかに職人芸の達者な柳人が多いかに気がつく。勿論そうした境地に達しない柳人には、せめてあれ位いの句を作りたいと羨望の眼をむけている人もあるとは思いますが、ここで考えてほしいことは、魂のこもらない句が百句入選するよりも、精魂こめた一句の入選が作家として喜ぶべきことだということである。

多作するなどいうのではない。多作するのはその一句を得るためのレッスンなのだから、多く作って多く捨てることを忘れてはいけな。

職人氣質は職人芸と違って一途なものを持つている点で同調出来る。その人でなければ出来ない作品、それを生み出すのが職人氣質の持っているよいところなのだ。いつか若い人に言ったことがある。川柳職人にはなるな。職人氣質の（個性のある）作品を生む努力をしてほしい、と。

（昭和44年2月号より）



小島蘭幸選

大阪市 谷口 義

イメージは腕組みしてるおばあさん
物は考えようだ味噌汁がうまい
下準備は出来た後は生きるだけ
コンソメを入れたらちよつと若返る
身の振り方を考えている砂時計
ごくろうさんの一日が恙なく終る

うつくしく枯れるだなんて無理なこと
松山市 柳田 かおる

口角あげてほうれい線を消してみる
ドキドキをしなくなつたね影法師
小鳥たちも寒いか街路樹に群れて
群れるって温かかった生きていた
白菜をザクザクひとり鍋にする

桜井市 安土 理恵

手料理へ夫反応しなくなる
トリセツの小さい文字に八つ当たり
わたしたち今年はダイヤモンド婚ですよ

わたししかできない夫の使い方
着古しのパジャマも連れてフルムーン
さざんかの宿でも夫高いびき

河内長野市 山岡 富美子

ピノキオのような動きになつてきた
フィレンツェを闊歩した日は遥かなり
マウスなら自在バリにもローマへも
のんびりの日々へコロナという刺客
散歩する程よい距離に本屋さん
落ち葉掃き新芽膨らむまで続く

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

めぐる忌にボージョレヌーボーなど供え
鏡にも見せない顔をもっている
隙間風さえそよ風にする夫婦
好き嫌いあつてレシピが売れている
処方箋には雪月花とは書いてない
ふる里はきつと花野の中だろう

土佐清水市 辻 内 次 根

トーストの香り朝陽が射してくる

玄関に花一輪の菊日和

晴れ続き毎日郵便物が来る

無農薬わかる野菜を売る無人

日本酒の今宵イワシの丸鬻り

底辺にいつも明るい空がある

藤井寺市 太 田 扶美代

みかん剥く指先妻の物思い

ありふれたルールと生真面目な生き方

孫嫁ぐ爺と婆とを忘れるな

ボケットに少し残している銀河

わくわくの好きな鏡と暮らして

四面楚歌秋を枕にもの想い

豊中市 水 野 黒 兎

「ありがとう」の五歳の文に癒やされる

巢立つ子に大空すべて君のもの

同窓会スイッチオンの国なまり

自画像に減らすほくろとシワの数

コロナ消えろと魔法のランプ撫でる日々

九本が嫉妬左の薬指

香芝市 大 内 朝 子

振り向けば人間臭く生きてきた

無垢な子のつぶやきにこそある真こと

十代の友の電話へ血がはしゃぐ

ウィルスにびくびく心臓に悪い

ひらひらと喪中ハガキの軽過ぎる

ひとり居の声はよいしょとどっこいしょ

尼崎市 山 田 耕 治

ゆっくりでいいよと亡妻は待つている

ライバルが支えてくれていたのです

今のところカラスが勝っているようだ

マスクした御蔭すっかり目で話す

似合ってますよ八十の赤いシャツ

元気だよオウム返しに打つメール

羽曳野市 徳 山 みつこ

働きものですねえはやぶさ2は

いただいた可愛い句集ふとひ孫

イチヨウ舞う道で心の大掃除

ほどほどの距離を守っている垣根

灯明ゆうらり亡夫と対話する

宇宙が見えるそっと両手を合わせれば

鳥取市 田 賀 八千代

愛犬の衣裳を競う散歩道

百歳を目指し「ジョギング」「スクワット」

ブライドの扉ひとつずつ崩れ

コロナ禍でどこもかしこも冬景色

波風が立たない内に幕を引く

充電をします一人シヨッピン

大阪市 川 端 一 歩

耳そうじ今年も第九聴くために

正月に読むべき本を揃えとく

わが家での10大ニュース書き留める

生きていて良かった言える年めざす

牛歩でも良いから前へ一歩二歩

爽やかな朝だ裁判勝っている

神戸市 上 田 和 宏

生きて来た 父母は案じていただろう

ハイハイと妻の小言を聞いている

腹立てる前に小さな深呼吸

すみません僕は毎日ゴミを出す

妻がうれしいと言えば嬉しいのです今は

博物館コロナで空いていて楽し

唐津市 山 口 高 明

二重橋渡る燕尾は貸し衣装

鬼裁くお方心を鬼にする

今は亡き多茂津 鬼遊も来た唐津

書き溜めし十年日記もう五冊

親切が過ぎると妻に疑われ

手の切れる様なお札を選ぶ布施

堺市 柿 花 和 夫

立ち退きを迫られている永久菌

大国の不戦の誓い絵空事

反故にした約束の数経の傷

冬の案山子やさしい顔に戻ってる

子は巣立ち愛犬が乗る乳母車

見られても良い日記書く八十路坂

高槻市 初 代 正 彦

きらきらのスマホ埃まみれの辞書

お風呂場の蜘蛛よ早よう逃げなさい

長丁場自粛のネジを締め直す

九人の子らとズームオンライン

Gotoを余所にお昼のカップ麺

新鮮なふたりつきりのお正月

高槻市 松 岡 篤

あれこれあれ 妻からメール五連発

手を合わせジビエの味に舌鼓

病院で柳友の名が呼ばれてる

老夫婦ボカ帳消しにして平和

外出にマスクと鮎は忘れへん

消毒に意外と強い私の手

長岡京市 山 田 葉 子

胸元へ直球くれた友が逝く

くずれた積木また少しずつ積み上げる

脇役に徹しきれたのがブライド

お腹隠れる服が今ではお気に入り

ひょうひょうとしたドクターについてゆく

多国語の飛び交うバスも懐かしい

上尾市 中村伸子

当り前一年前の句はのどか
吹きだまる落ち葉は風が指揮をする

霧の中なかなか乙な散歩道

歩幅など合わないままで五十年

まろやかな味です少し物足りぬ

したたかに生きたししたたかになれず

鳥取市 吉田弘子

覚悟よし心静かに術日待つ

麻酔は魔法人間解剖知らぬ間に

面会禁止コロナが奪う家族愛

ナイチンゲールの精神深く噛みしめる

病室から母校が見えて元氣出る

二週間振り温い布団へ安堵する

犬山市 金子美千代

脳トレと思い取説噛み砕く

ピンポンも気付かず昼寝してしまふ

お豆さんふくら煮えた家ごもり

サイダーのような友からもらう活

正月も一人で過ごす覚悟する

想定外だった令和二年の乱

米子市 後藤宏之

袖の下闇魔さまにはききめなし

冷蔵庫開けたら寿命ですの声

揺らしてもいいアイディアが出てこない

打たせ湯に白伏せよと責められる

遊びところがどこことなく逞しい

余計なことするから柱揺れだした

鳥取市 田中天翔

あつと言う間にコロナ騒ぎの年暮れる

お見舞に百合の香りは向いてない

スマートに生きると決めた誕生日

辛棒に笑顔をプラスして生きる

さつきまで手に持っていたペン探す

老いて今一日おろそかには出来ぬ

箕面市 中山春代

休止符のままに今年が終わりそう

遠い日の故郷が透ける柿が来る

思い出をキャッチボールの姉妹

Lサイズで止まってほしい体重計

Withコロナマスクはせめて日本製

町内のお地藏さまへ初詣で

出雲市 岸桂子

決断のにおさを笑う花鋏

カウント九までには立つて見せる意地

アメダスに一日傘をもたされる

錯覚のまま人生を折り返す

狩をする楽しみがあるマーケット

生涯一句生きた証がまだ出来ぬ

可児市 板山 まみ子

富山市 島 ひかる

はやぶさの砂一グラムでもダイヤ

値くずれのキャベツで三日食べられる

次々に嘘がバレても知らんぷり

もう少し生きねばならぬ八十二

幕引きは自分でできぬことらしい

犬山市 関本 かつ子

安心を選び日帰り自家用車

ほどほどに聞いては流す友の愚痴

はやぶさに拍手研究者に感謝

輪の中に入ると上がる幸福度

大往生と聞いて安堵の顔馴染

愛知県 早川 遡行

無駄なことでもしないと落ち付かず

もう少し頑張ってみる免許証

卵かけご飯で今日も元気です

生きていく為のお早う今日は

買物も人混みさけた時間帯

鈴鹿市 小河 柳女

笑い声運つぎつぎと産んでいる

庭の木は歌う晴れの日も雨の日も

夢にむかって飛ぶように背を押した

君の前見えない神が立っている

白いページほどの色をぬろうかな

張り替えた障子に初春の陽がうらら

もう歳に不足はないが考える

戦中戦後耐えてコロナにも耐えて

夫婦で居るお蔭泣いたり笑ったり

長らえて瑞穂の国に居る感謝

奈良市 宇賀史郎

窓越しの日の出に祈るリカバリ

はったりで励まし病治す医者

端正な顔崩れ行く痛み潰け

哀も悲も三密の中埋もれゆく

五十年互いの悪い癖に慣れ

奈良市 大久保 眞澄

渡航制限ヒゲのお手入れするサンタ

外出自粛また別腹が肥大する

大掃除も自粛だあれも来ないから

マスクずらしてキャツキヤとはしゃぐ子供達

国会劇場猿も拍手を引っこめる

奈良市 加藤 江里子

戸を開けてと猫が背中でする

十年後はやぶさを見る確と見る

リュウグウの砂が生命を解き明かす

四人の祖父母勢揃いして七五三

一瞬の写真撮影コロナの禍

奈良市 高橋敬子

丑年の母は反芻忘れない

年末商戦ネットばかりがはいでる

十分の寝坊に駅へ猛ダッシュ

しなやかにでもノーと言う京ことば

楽しげな子の笑顔までマスク下

奈良市 辻内げんえい

牛歩でも怒れば走る時もある

大掃除コロナ自粛で止めにする

天気予報とコロナが決めるお出かけ日

和室でも椅子がなければ暮らせない

ゲーム好き息子も孫も俺に似る

奈良市 山本昌代

友が逝くコトンと秋が深くなり

マスク越し語尾が聞こえぬもどかしさ

アイウヴェー誤嚥体操日課です

太陽の光りウトウト猫を抱く

これも私スグに涙が溢れます

奈良市 米田恭昌

進化した医療を喰っているコロナ

抜け切れぬ訛が醸し出す魅力

拉致の子に祖国の土はまだ遥か

地味なカオセめてとマスク派手にする

コロナ禍にグッと堪えたご招待

生駒市 飛永ふりこ

のんびりが少し押されて立ち竦む

しんどさもほろりと解けるココアの香

温泉でコロナつると沈ませる

ルーチンの五郎丸さん惜しむ声

一つの菌損ない味も落差出る

香芝市 山下純子

煩惱よりコロナ鎮めよ除夜の鐘

逃げ道を確保してから一仕事

ネジ巻けば大正からの時刻む

巣ごもりの言葉私の辞書にない

五十年の疲れがドッと金婚式

奈良県 安福和夫

コロナ以来何が起きてても驚かず

句をひねり鬱も紛れて日が暮れる

居ながらに楽しむ作句自粛向き

第三波耐え忍ぶ術模索する

無理せずにワクチン普及待ち望む

奈良県 谷川憲

自分史に悔しさ誇り埋まってる

案内板日本語標記縮こまる

右足にブレーキ先と言いい聞かせ

さりげない妻の言葉につい本音

トランプとは何者だったのだろうか

奈良県 中堀 優

五位鷺はじつと立つてゐる立つてゐる

コロナ禍がさらに良くした夫婦仲

たまさかの難題脳の活性化

地獄めぐり手を取りあつて爺と婆

細い声で呼び続けてゐる夜の鹿

奈良県 長谷川 崇 明

それきりに出来ぬと落ち葉掃き清め

性善説信じ無人の販売所

北斎に風呂屋が借りた富士と波

令和二年もはや遠景大晦日

令和三年信じて今日も種を蒔く

奈良県 渡 辺 富 子

まほろばの里ではのぼの神と住む

ウォーキング落ち葉のことは聞きながら

あれやこれ詰めた頭が液状化

カラフルな糸で人生織り上げる

愛と憎半熟のまま夫婦

和歌山市 上 田 紀 子

いい風を待つて今年を締めくくる

脱ぎすてて一息ついた冬木立

ファッションのひとつになった柄マスク

バイトの子仕事の苦勞やつと知る

手際よく手品のように化粧する

和歌山市 柏 原 夕 胡

ネコ部屋はもはや運動会である

ネコじゃらしコロナ忘れて遊びます

同じ命だ捨てネコをもらい受け

子猫来る犬のしつけとほど遠く

奔放な猫に憧れ抱いてゐる

和歌山市 土 屋 起 世子

平熱を保つ手洗い孫看視

句会場巡った靴と家籠り

辛抱をする癖付いて医者嫌い

忘れたい事が再現する寝床

飼猫のように嫁に甘えたい

和歌山市 古 久 保 和 子

いまごろは吹雪だろうかりんご剥く

玉子さえあればちゃちゃつとばつぱつと

缶ビールお一人様の音で聞く

血統書付きのべつたり紀州弁

大晦日残り時間を精査する

和歌山市 松 原 寿 子

寒風に抱きしめられて目が覚める

声だけでも聞きたいのです電話口

本心が行方不明になつて冬

生かされて明日の予定組み直す

気が弱く口下手術のない女

岩出市 藤原 ほか

京都市 清水 英 旺

世界地図行きたい国をチェックする
是が非でもすてきな年と想いたい
コロナ禍で癒される華に巡り合う
巣ごもりで生き方みつめ立ち上がる
絶景に心洗われ歩き出す

海南省 小 谷 小 雪

神棚の神が笑う欲深さ

介護には聞こえぬ振りもひとつの手

京都市 藤 井 文 代

寄り道をしていて答まだ出ない
太めでも明るい笑顔だけは武器
どじを踏んでも叱らないで下さい
マスクするとわたしらしさが消えている

世界は今コロナ抱き込み同じ穴
マスク越しアイコンタクト役者です
カラフルなマスクの中も笑ってて
コロナ禍で美德になった引き籠もり

紀の川市 山 東 日出男

八幡市 今 井 万 紗 子

外堀を埋めてじっくり長期戦
読む気にもならん相対性理論
筋書きが分かっているも観るドラマ
飼犬も美味しいものを知っている
官邸に怪しい人が出入りする

取り敢えず元気でいよう逢えるから
むらむらもうずうずもあり老い半ば
補聴器からコロナコロナと騒がしい
老いてますます母が小さくなってゆく
自粛中でも逢えばよかった友が逝き

橋本市 石 田 隆 彦

大阪市 磯 島 福 貴 子

不可能に挑んでみよう時はある
口論後居間はひんやり老い二人
年金で楽しく生きる道探す
コロナ禍がひんやりさせた繁華街
ベットにも手づくりマスク要る時世

不安の日日ひたひた迫るコロナの影
コロナには罹らぬ様に移さぬ様に
寒い冬の予報に北の孫案ず
シミシワタルミ生きてる証し愛おしい
経済と命両立させる策難し

大阪市 井丸昌紀

話す人だあれもない大都会
長生きはしたいけれども美味い酒
マスクしてゐるかな来年の今頃
永遠の謎母の雑煮の隠し味
ちよつと咳き込む師走の形

大阪市 岩崎公誠

バランスを崩した日から喉が涸れ
正解がいくつもあつて迷つてゐる
左手で芸術センス凄いい人
習慣で妻より早く起きている
来年は巣ごもり抜けるプラン立て

大阪市 岩崎玲子

こんなにも賀状書くのが疎ましい
頭だけ夜中めざめてザワツクの
趣味休止無味乾燥でこころ痩せ
財政も命も大事やじろべえ
図書館で絵本三冊読む日課

大阪市 内田志津子

父自慢山高帽の受章式
通天閣赤青黄の衣更え
もったいないこんなに樹々が紅いの
鎮守の杜冬の色して佇んで
うまい嘔吐いて淋しい夜の帰路

大阪市 宇都満知子

ぬくぬく炬燵ノート鉛筆みかん二個
あれこれと寄り道好きな脳回路
マスク生活つい口呼吸してしまふ
母になり婆になり女は度胸
働いた手にハンドクリームのご褒美

大阪市 江島谷勝弘

頑としてわが道行くが一人ぼち
太ッ腹ではありませんビール腹
歳だなあとうとうルーベ必需品
喜寿まぢかぼんやりなんかしておれず
見つめるだけにしておくあのジャケッ

大阪市 榎本日の出

友達の旅の約束平和です
平和って耐えることなの解つて
ばあちゃんの楽しみ貯金使うこと
ラッキーマネ小犬がセレブに拾われる
終点に夫待つてゐる縄梯子

大阪市 榎本舞夢

自肅自肅炬燵川柳年賀書き
喪のハガキ思い出ひたり秋夜長
通天閣真ッ赤になった大打撃
節料理来ても来ないも用意する
年金の枠で年玉振り分ける

大阪市 大川 桃花

大阪市 金川 宣子

専門家横文字混せて煙に巻く

登山靴で散歩筋トレしています

愚痴ったら二階で息子くしゃみする

顔も仕草も知ってて名前出てこない

惚けたんとちがうまゝるくなつたんや

大阪市 大治 重信

親の夢次々消して子は育つ

金木犀芳香を広げ庭を埋め

白銀の夕日を受けて芒ゆれ

千両の実をこぼしたる庭の隅

鏡中の遠き奥に紅葉有り

大阪市 小野 雅美

いつか空飛べるはずだと織る翼

満開の薔薇が抱えている憂い

仲直りなさいと星に誘われる

泣けるだけ泣いてだけと言わせない

好き嫌い一瞬でした初対面

大阪市 笠嶋 恵美

息子からコロナ注意の電話来る

タンスの中の思い出と会う若返る

見て見ると真つ赤なバラが五輪咲き

ひとり身に弁当届き会話有り

いい本に出会って一夜ねむられず

来年こそはと誓った今年勇み足

二人居にメダカ金魚を飼い始め

ハーレルヤ一夜限りの聖夜ミサ

倦怠期襲めてもらえばやる気みせ

友からは季節はずれの花切手

大阪市 古今堂 蕉子

人恋し誌上大会続く日々

体力が線香花火のようになり

十七文字 ことはを脱いでいくように

就活内定孫の歩幅が広くなる

気がつけば舐い切れてる流れてる

大阪市 近藤 正

核のない世界に夢を馳せる春

お答えは差し控えると菅語録

医療費を二倍払えと長寿国

菅総理答弁さえも自助できず

ズーム会議便利ですけど熱気なし

大阪市 坂 裕之

ちよつとだけきつい言葉で言わせてね

それぞれの思いがあつて今日の空

ぎすぎすと尖つた人に近寄れん

失敗を叱るんじゃなく手を貸そう

捨てないできつと使える日がきます

大阪市 高杉 力

元旦の日記誓いであふれてる

来年はいいことあれと手帳買う

巣籠りに古いギターを出してくる

食べて寝るだけでは名句生まれ

じゃないけんて決めるうどんかラーメンか

大阪市 高杉 千歩

行く当てもないが禁止には抵抗感

鉛筆を削る名案続々と

車椅子では食べない頑固九十四

ペンを持つとごはんですよとケアハウス

あるようでないものばかりケアハウス

大阪市 田中 廣子

噴水と夕日が綺麗万代池

池に来てハルカスのぞみ夕日見る

何組も池におし鳥目をみはる

はやぶさ2カプセルやつと日本着く

年末の第九は皆で唄えるの

大阪市 田中 ゆみ子

会うたびに発見父の樹の戦ぎ

予約本の袋抱えて冬うらら

親友に出会ったような古日記

願望をこめて十年日記買う

ふるさを見つけた女将の国訛

大阪市 津村 志華子

星仰ぐ父の影かも母かとも

憎まれぬ様に静かに生きてます

よたよたとシニア巣ごもり冬ごもり

葱きぎむ魔女の包丁リズムミカル

浜に来て波のエレジー聴いてます

大阪市 寺本 実

わめいてるうちは元気があるのです

色落ちはしてもあなたは紅一点

ワクチンは欲しいが怖い副作用

投句したはずの封筒なぜここに

杖になる言った相手が杖をつく

大阪市 中井 萌

孫達が自粛せよとか歩けとか

はやぶさのロマンまだまだ未知の夢

忘れたい事が心に突き刺さる

勝てるから夫婦喧嘩はしない主義

ジェラシーも愚痴も忘れて鍋笑う

大阪市 原田 すみ子

マスクする習慣付いて冬に入る

食べ残した秋は無いかとふり返る

お笑いの大阪決めつけるテレビ

静かも良し賑やかも待つ老夫婦

おせち買う気持に勝る我が家流

大阪市 平井 美智子

焼き芋を買う病院の帰り道

自転車でいける範囲のプチ家出

一日の「ごめん」を抱いて仕舞い風呂

白を足す優しい明日になるように

転んだら起きる ゴールが待っている

大阪市 平賀 国和

大阪には帰省できぬと子の電話

コロナ不況なじみの店も閉店に

コロナ禍の歴史に残る冬籠もり

除夜の鐘コロナの憂い消して欲し

新年は牛の歩みをモットーに

大阪市 宮崎 シマ子

じつくりと生きる百まで後四年

貼り過ぎた切手おつりは出ぬらしい

柳友からの便り逢いたい逢いたいと

一族郎党だれもコロナに負けてない

ホームで迎える正月ってどんなだろ

大阪市 山本 加お里

なにごとにも頑張らなきやの時代すぎ

毎日が休みになった身の置き場

あなたなの夜空に光る星一つ

五年日記三年前に戻りたい

人生の賞味期限がいつかくる

大阪市 横山 里子

地味ながら母の面影枇杷の花

徘徊じゃないです家に帰れます

発声練習だと思ふ独り言

これ以上どう自助すれば収束が

絵馬に書くコロナ終息平和な世

大阪市 若本 安代

思い詰めないでひとりでないからね

今日もまた迷うてばかり揺れている

忘れたり思い出したり生きている

好きな曲かけて自肅のひとり酒

コロナ自肅この頃増えたひとり言

堺市 奥時 雄

国任せいや知事任せ風任せ

オリンピックぐらいやらせろ新コロナ

デジタル庁採用試験はどうするの

コロナ禍に株価の上がる摩訶不思議

リモートワーク社の上役はいらんがね

堺市 源田 八千代

大晦日も元旦までも独り膳

松の緑に千両の赤い実映える

怖いもの見たさのスリルもういらん

一吹きでバースデーキャンドル消えず

コロナ禍さらばオリンピックに期待掛け

堺市 齋藤 さくら

寿命とは言えぬコロナが恐くなる
うっかりで始まる朝の台所
肩を揉む妻にお世辞を二つ三つ
テレビから孫が笑顔でVサイン
父さんを送る覚悟で竹を踏む

堺市 坂上 淳司

コロナ禍をまでも詠まねばならぬ鬱
太陽の塔も通天閣も赤
GOTOが嘖われてると外地から
インフルで消される鶏の身を想う
美しい桜見たくて今を耐え

堺市 澤井 敏治

ご無沙汰の不義理のせいになるコロナ
飽食に慣れ選り好みするカラス
付度のゆえに生まれてくる巨悪
補聴器にも春のあしおと一歩二歩
きれいな手だねちゃんと洗っているんだね

堺市 遠山 唯教

諏訪湖畔に浮世のコロナ捨てにいく
打上げの花火よコロナ吹き飛ばせ
挑んでも正解がない芸の道
老いてこそ解ける方程式がある
赤飯で祝う自分の誕生日

堺市 内藤 憲彦

初春の元気をもらう触れ太鼓
長生きと相談しつつ粗衣粗食
お似合いねと褒めたマスクが嬉しそう
後期高齢動けるうちはチャレンジャー
パンチ受け男の顔になってゆく

堺市 矢倉 五月

お互い様とサラリ許してくれた友
私より長寿を願います主治医
健康祈願さえままならぬ寺社参り
木犀の香り届いていますか亡夫よ
野の花の咲き時散り時見極め散歩

池田市 太田 省三

お隣の二階がんばれ受験生
カタログのモデル着こなす安い服
ガラボンにコーヒー二缶イブの夜
豪州のサンタははだか波の上
雪富士を愛でる車掌のアナウンス

貝塚市 石田 ひろ子

久し振りの電車景色の新鮮で
度忘れもジョークに変える年の功
傷口を見せて仲間にして貰う
物欲も食欲もあり御蔭さま
転勤先のコロナ禍案じみかん剥く

河内長野市 大島 ともこ

悲しみを希望に向けて握り飯

忘れたはずの過去をカナリア唄い出す

米どころ美人ひしめく謎を追う

ステイホームお隣さんと振り合う手

マスク持参すつかり板についてきた

河内長野市 梶原 弘光

腸内の菌も潑刺朝歩き

ノーを言う元氣微かに残っている

トランプは見ている既に4年先

擦り寄って来るが変えない主義主張

菌ざしりといびきそれでもひとつ床

河内長野市 木見谷 孝代

納骨を済ませ安堵の一周忌

亡き父母と談笑してるだろう夫

子や孫が来ずに淋しい冷蔵庫

牛歩でもいい一歩づつ前へ行く

深夜便今夜も子守歌に聞く

河内長野市 黒岩 靖博

コロナ禍でたつぷりゆとり寝正月

寝正月蟹三味の食べ比べ

帰省する孫の手土産通知表

ポケットに孫が願った守り札

残り火が孫を相手にバスケット

河内長野市 辻村 ヒロ

老体を壊さぬようにネジを巻く

コロナ禍の墓に集まり解散だ

丸い背に繕った羽ありますか

見栄も張りはったりも交ぜ生きてきた

感情も衰え見せる無表情

河内長野市 中島 一彌

老いたれば老いには老いにくい速さ

向かい席指忙しなく繰るスマホ

計算は苦手なんです悪しからず

温暖化沈み消えゆく危機ツバル

ヒト科へのしつべ返し使者コロナ

河内長野市 藤塚 克三

二人暮らし気まずい空気窓開ける

お互いが頼みの綱と手繰り寄せ

蝸牛よ俺も必死で家背負う

左うちわを心の鬼が許さない

女の怖さ知らないうちが華ですな

河内長野市 村上 直樹

色メガネかけて傘寿の若造り

病む妻へ味はともかく俄かシエフ

ハルカスから諭吉千枚飛ばす夢

平和とやいつか国境消えた地図

アフターコロナ変わる暮らしの処方箋

河内長野市 森田旅人

高槻市 片山かずお

太鼓腹父の覚悟がありました

食卓は広く使えて夜の長さ

翔んでよし母は一人を楽しめる

感染者困る困るとするチェック

コンサートあきらめメルカリでCD

岸和田市 岩佐ダン吉

コロナ禍の以後人災を問われてる

多数派の中で骨抜きされている

取り敢えず眠れ母さん言うている

時流には乗ってはるけどそこまでだ

ドクターに聞くが野菜は好きですか

四條畷市 吉岡修

配役で真犯人がほぼわかる

草の芽か花の芽かなと抜きそびれ

この後は茶漬さらさらあればよい

手なれてるさらさらと書く借用証

締切りに余裕があつて油断した

吹田市 太田昭

句読点打って折りの鶴を折る

凡に生き春を迎える老い二人

寂しいのかアンテナだけは立ててある

前歯より少し怒っている奥歯

末席でうなずいて聞く平和

世話好きのおばちゃん要らんことも言う

ときに子と戯れもするテレワーク

背筋をピンと伸ばして広くする歩幅

脚は少し弱ってきたが弁は立つ

昨日を忘れる頭が忘れない故郷

高槻市 島田千鶴子

ウイズコロナシナリオ変える暮し方

干乾びてはならぬと作句するベッド

日にち薬焦らず待てば効いてきた

ひとひらの雪に詩心目を覚ます

ステイホーム師走の街も人疎ら

高槻市 杉本義昭

勝負の日きりつと帯を引締める

白百合の花の白さにある矜持

欲しいものある時妻はビブラート

腐るなど肩に手を置くあたかかさ

母さんの着物で食べた幼年期

高槻市 富田保子

お名前は要らぬほくろで覚えられ

まあこれが一人世帯かワンルーム

定刻に孫とおやつが来るたんば

レンコンの深さを知らず食べる人

日常を碎いて食べてる夫です

高槻市 原 洋 志

通せんば顔を狙うサーモグラフィ
ポイントがたまった頃に店つぶれ
年金の揺れに必死にしがみつく
生き方を変えてみたらと曼珠沙華
想い出もコスモスも揺れ廃校舎

高槻市 安 田 忠 子

コロナ禍の予防接種も済みました
次の世へ語り継ぎたい「ありがとう」
花柄が少女にさせる旅浴衣
金泉の有馬のお湯でふらふらに
孫の声息子の声と間違える

豊中市 上 出 修

虚と実に油も混せて私小説
定年後主役は妻に奪われる
GOTOで心に隙間第3波
元氣だが手帳に予定入らない
コロナ禍でジングルベルも寂しそう

豊中市 きとう こみつ

暗証番号手帖の隅に書いておく
ため息をつくとしあわせ取り逃がす
イライラとしたら爪噛む癖がある
お腹の中で親の言葉を聞き育つ
人のおしゃれ見て私も頑張ろう

豊中市 藤 井 則 彦

目も眩む宝石のごとみすゞの詩
やらなかった悔いは日に日にでかくなり
お辞儀する仕種に滲む社の蜨
あれれれ金歯が光る時代劇
楽しみな最後の未知というあの世

豊中市 松 尾 美智代

りんごの季節紅玉見付けジャムを炊く
我家のジャムは手作りりんご夏みかん
消毒マスク検温もしてヨガタイム
ジムの往復しつかり歩き六千歩
孫が来たのでスマホでゲーム目が痛い

富田林市 片 岡 智恵子

もう少し早く歩けと風の私語
名無き草花寒空に震えてる
盛り籠の梨もりんごも化粧ずき
肩も氣も張らず浮世の風に添い
神はたしかに頼りない思慕に気づかぬ

富田林市 中 村 恵

師走の街に極彩色の虹が立つ
熱い胸握り拳がなお熱い
いつだって欲しい言葉をくれる君
愛をふりかざせば罪が重くなる
コロナ禍に常識論が覆る

富田林市 山野寿之

ハルカスから俯瞰車も人も蟻

夕焼けに燃える山河も子も真つ赤

マスクから食み出している笑い皺

夜の散歩監視カメラの眼が数多

児から子へ漢字混じりになる手紙

寝屋川市 伊達郁夫

しがみつき意地を見せてる柿ひとつ

落ちていた財布を踏んで動けない

美人でも隣の席は避けて乗る

聞きのがすまいと補聴器確かめる

砂時計倒し暫く遊びます

寝屋川市 富山ルイ子

京丹波へ家族一緒に蟹食べに

杖なしで歩けしゃがんで草も引け

おとなりは高知の生まれわたし伊予

和洋中華の味が並んだ夕御飯

幸せな一年でしたありがとうございます

寝屋川市 平松かすみ

おめでとう無事を祈って初暦

満開を愛でる一時無欲なり

アイウベアイウベお口の体操よ

押入れも脳もスカスカもういいか

四十年続く趣味あり日日感謝

寝屋川市 森茜

領いてビデオ通話が盛りあがる

非常時ですおしゃべり雀電線に

リラックスリラックス日だまり呼び止める

七回忌過ぎて遺影の大人びる

水たまりよいしょと老いのひとまたぎ

羽曳野市 磯本洋一

年賀状同じコメント友からも

普通だよそれでいいなら付いて来て

気象庁桜前線口濁す

ボランティアお握り一つで明日を待つ

派遣する自衛隊員人の子だ

羽曳野市 宇都宮ちづる

モヤモヤを晴らすカサブランカの意気

熱あればうちは診れぬとかかりつけ

壁の額感じたらしい震度一

稲刈りを卒寿の父が差配する

優しい子に育てた誇りだけはある

羽曳野市 三好専平

一円安いいうてえらいならんでるやん

ええもわるいもあれへんやんちよろしいな

おべんちゃらやけどべつびんさんやなあんた

ゴーツーで国と知事とがにらみ合い

不要不急といわれたら全部そうやんか

羽曳野市 吉村 久仁雄

身の丈を少し大きく見せて生き
目と舌と歯でも味わう和食膳
森一つ消えたか野鳥庭に来る
ITが土足で家にながり込む
旅の夜の余裕虫の音聞き分ける

東大阪市 北村 賢子

奮の数かぞえほころぶ明日を待つ
ゆったりと向き合う普通の日に感謝
肉親の絆稀薄にするコロナ
一日に何度も青空を仰ぐ
落ち込まずいただいた日を生き尽くす

東大阪市 佐々木 満作

責任を負わぬブログの自己主張
財産はないが葬式代はある
熱燗で一杯老いの冬ごもり
老木の本音聞けぬまま朽ちる
三密を避けても忍び込むコロナ

東大阪市 西村 哲夫

必然と不思議を対峙するライフ
煩惱を友に苦悩がシャシャリ出る
ソーシャルディスタンスお母ちゃんは別
仄聞しただけを流暢に話す
ユーモアよ海の底から顔を出せ

枚方市 谷 英也

膝小僧笑わないでよ痛みます
耐えてますお迎え日まで閻魔様
嗚呼無情一人で渡るあの世橋
ぬるま湯の世界かき混ぜコロナ様
記憶力霞たなびく八十路です

枚方市 丹後屋 肇

コロナ禍に掠んでしまう笑い講
院内注意待合室ががらんどろ
手洗い嗽い消毒マスク換気口
第一号接種へ惜しみない拍手
ステイホーム正月三日の生き地獄

枚方市 栃尾 奏子

たらればの中で育っていく想い
ライバルのチョコに死角が見当たらぬ
直球で行くわ好きやで好きなんや
友達のまんま踏切また明日
この町の夕日は明日も美しい

枚方市 藤田 武人

小回りが苦手で韋駄天が敗ける
ポイントの誘いカードの山築く
コンビニと思えぬ味へひと工夫
サントまで自粛してると子に伝え
プライドが邪魔だ素直に謝れぬ

枚方市 藤村 亜成

家の中パツと華やぐ娘客

どんな曲弾くか愉しい駅ピアノ

冷えた愛温めるレンジはないものか

お喋りできず無表情になるマスク

平和ボケ令和に三島生き還る

枚方市 山口 弘委智

ひたすらに褒めて育てる子守唄

車座の居心地のよい新酒酌む

後の世を見て来たような話振り

雑踏は街の歳時記年忘れ

冬休みぬり絵の色は重くなり

藤井寺市 鈴木 いさお

柳友ともう一年も逢うてない

何よりもコロナに罹らないように

逆転し逆転されて元の位置

怒るのはよそう疲れるだけだから

なにもかも忘れて推敲のひとつき

藤井寺市 吉田 喜代子

長崎の鐘遙か昔が近くなる

菊の花ご近所さんとお付き合い

外食の楽しみもなく帰る足

旨いなあ友の手作りつるし柿

高齢者言われなくても出歩けぬ

箕面市 大浦 初音

満月に心の闇を照らされる

穏やかな笑顔に人は寄ってくる

キャッシュユレスなじめずいつも現金で

思い込みは捨て思いつきを生かす

里がえり客扱いも二、三日

箕面市 酒井 紀華

片恋をこころに秘めて嬉しがり

世界地図わたしの夢を膨らます

風をよみ風を信じて孤立する

終章は雅号で呼んで華やかに

ときめきは生きる力になっている

箕面市 出口 セツ子

宅配でひっそり祝う誕生日

人生をコロナに変えられたりしない

結果オーライならば苦労は厭わない

人は皆仮面をつけた役者です

三ヶ日避けて恐々初詣

箕面市 広島 巴子

医療従事神も敬意の青い空

年越しをさせてはならぬ新コロナ

正月も会えずワクチン待ち遠し

おでん煮る三日持つねと老い二人

たこ焼きをクルリコロコロ自粛中

八尾市 寺川 はじむ

手際よく呆けてその場の穴埋める
地球儀の洪顔消えぬ温暖化

埋められぬスタンド欠伸さすコロナ

職終えてほつとつかの間妻の弟子

賞味期限切れて益ます精が出る

八尾市 村上 ミツ子

仕事とも言えぬ雑用多過ぎる

かんにん袋ごみ箱に捨てました

覚悟して大ぶろしきを上げたが

でかい夢リユウグウからのプレゼント

何がとびだすか宇宙の玉手箱

神戸市 奥澤 洋次郎

コロナよりGOTO大事群れる人

道草をくったところが映えている

神戸市街で張る猪除けトタン

逃げてゆく五輪にすぎるおじいさん

酒の二本もあればこと足る寝正月

神戸市 斎藤 隆 浩

浮かんだら書き留めないと消えていく

GOTOで人が動けば倍返し

門限破り慌てて帰宅妻は留守

育毛剤個人差ありと小さな字

何もかもコロナの所為にしておこう

神戸市 敏森 廣光

秋風が心の鈴をかき鳴らす

余生短いワクチン早く早くして

人の世の渦巻く欲を照らす月

マツタケもカニも出番無き我が家

愛されてると思えるうちに逝くつもり

神戸市 富永 恭子

思いきりお家カラオケ90分

家族写真いいことだけを思い出す

平坦な道だけ選びウォーキング

飾り付けする気になったクリスマス

山茶花咲くいつも通りの冬景色

神戸市 能勢 利子

子が巣立ち夫婦別室恙無い

百歳の表彰状を読み上げる

コロナ禍の経験役に立つのかな

支援金いつの間にやら消えている

マスクして今年は風邪を引いてない

神戸市 松倉 正美

兼題をトイレに貼って句を捻る

3波来て句会再開目処立たず

すれ違う人のマスクを品定め

見るだけで高級おせち手が出ない

閉店の張り紙悲し年の暮

神戸市 山口 光久

尼崎市 近 兼 敦子

ただ一途迷う脇道などはない

左耳故障してから十五年

自肅中衝動買いをせずに済む

初詣家からじつと手を合わす

ぼつくりと逝きますように手を合わす

神戸市 山口 美穂

心の中見られてるよう冬の月

立話してる間もない秋夕陽

コロナコロナにふりまわされて除夜の鐘

新コロナお前は年を越さないで

柚風呂でちよつぱり寿命のびたかな

神戸市 山崎 武彦

夕餉の灯待つしあわせを知った膳

オムレツが上手にできて妻起こす

鈍行に乗り換え見えてきた自分

こうなればアマビエ様に初詣で

暇ですと通天閣の赤が言う

明石市 穂谷 和郎

ジグザグの道だが足は前を向く

雪こんこん音なき音を聞き澄ます

寂しい夜は絵本枕と決めている

不揃いの皿も言い訳したくなる

独り居を気遣う虫の深夜便

手に余る仕事断る勇氣もつ

波風を立てぬダンマリ上手くいく

相談をしても答えはだしてある

噂なら聞きもらさない雀です

注文の多い父ですうす味に

尼崎市 永田 紀恵

思い出も断捨離をする八十路坂

巣ごもりに増える兆しの認知症

あーついに恩師が消えた同期会

下戸なりの楽しみ方もある酒席

ウソがばれ演技不足を反省す

尼崎市 藤井 宏造

コロナ禍も多少ばたばたする師走

失われた令和二年になるコロナ

もう許したらと茶柱立っている

老いたけど爺さんだとは思わない

寄り添える人もないまま冬が来る

尼崎市 藤岡 りこ

順調な老化ですねという鏡

絵日記に食べ物ばかり描いた頃

自宅待機たつぷり家事と子守役

おはようと言える夫がそばに居る

余裕綽綽百歳まではまだ遠い

尼崎市 藤田雪菜

着回しのセンス、簞笥の古着たち
おやつとお茶で書く絵筆は自在なり
効き過ぎるくすり体調狂わせる
トンネルの先の明かりになる聖火
朝食後に飲むさす貼ると忙しい

加西市 山端なつみ

新嘗祭陛下新米召し上がる
GOTOイートマスク掛けたり外したり
前菜の五種盛について迷い箸
鯛鯉鰻河豚四季の美食旅
ペン走る大言壮語してみたい

川西市 山口不動

ふる里の友消えてゆく冬至かな
唯願う穏やかなるをその日まで
マスクして大樹の枯葉浴びている
早起きのストーブ点火僕の役
うらやましスマホ充電再起動

三田市 足立つな子

例年のかぶの漬けこみスライサー
年長者に世論調査の電話くる
一安心ポリープもなく腸カメラ
散歩は日中朝夕の冷えこみ
なんやかや納得いかぬ暮れ早し

三田市 上田ひとみ

ほったたをつねってみても変わらない
ドラマより複雑怪奇この暮らし
何とかなるさいつも何とかなった
私の全力出して見せましよう
その代り今年の紅葉美しく

三田市 大西重男

忘年会しないとコロナ付いてきた
宝船コロナの神は海に落ち
コロナ禍は線香花火と思ってた
一日も無駄にできない余命です
マスクして歌うカラオケなうい声

三田市 尾崎一子

来し方をしみじみ想うコロナの禍
働いて来た宝だと言う両手
お陰様兄弟姉妹居て楽し
母の齢生きて私もたとと皺
何時の世も母の教えにぶれはない

三田市 九村義徳

洗っても落ちぬ浮世のしがらみが
なんとなく生きて可もなく不可もなく
古寺巡礼自分磨きの旅に出る
若者のセンス取り入れ磨く古稀
気取らずに素顔のままの君でいて

三田市 多田 雅尚

三田市 堀 正和

ディスタンス何時も取ってる我が夫婦
息子にもジイジと呼ばれ腹が立ち
雨戸閉め朝の目覚めも気が付かず
コロナ禍に心弾まぬクリスマス
高齢に医療費負担倍返し

三田市 谷口 修平

次の世も猫に生まれてきたい猫
父の癖真似ると父の顔になる
そっくりに生んで貰った泣き笑い
信頼度低い無記名アンケート
ハグされて消える程度の軽い鬱

三田市 野口 真桜子

大寒波やつと出番の雪女
曾孫から挑戦された指相撲
おとり寄せのカニにワインのママの会
乱反射しながら粧す二十歳の娘
新コロナ都市伝説になっていく

三田市 福田 好文

女性の寿命延びたと知らず喪のがき
ツアーバス止まればまずはマーキング
気前よく買物する日は孫が来る
常備薬切らすな言うて酒のこと
金婚式忍耐強さ称えあう

コロナ禍で自粛しましたお歳暮も
コロナ禍へしほし時計を止めている
ディスタンスとれば心も通じない
八十路だが五年日記を買いました
コタツ守りまかせといてと年の暮れ

三田市 松本 ゆかり

女医さんはウォーキングもブラダ着て
爺婆達そろり出てくる朝十時
友の死を受け入れ難くスクワット
大根で菜園デビューはいポーズ
赤米で田んぼアートの金太郎

三田市 村田 博

ウォンテッドまだ正体を見せぬ敵
どん底を覗いた君を信じよう
検査値に異常はないが絶不調
脇役に徹しひたすら飲んでる
ギアチェンジしてもパワーは戻らない

高砂市 松尾 柳右子

木枯しにめげぬ野鳥に起こされる
カラフルなマスクでお洒落するマダム
防寒へマスク手袋マフラーも
寒風へティッシュの在庫確かめる
ぜんざいに笑顔あふれるデイケアー

宝塚市 丸山 孔一

諦めたバスがすぐ脇通り過ぎ
テレビ観て眠りベッドで寝つかれず
二十年経ってもふっと現役の夢
食い物も買い物もみな欲が出ず
退院日脚に体重乗るを知る

丹波篠山市 北澤 稠民

生かされた八十路の坂で深呼吸
幸せは気付かぬうちに過ぎている
冬の夜あつあつおでん晩酌を
座りたいかすかに空きがあるけれど
深呼吸わたしを少し入れ替える

丹波篠山市 酒井 健二

一時間並び餃子で癒される
年一回カニだけを食うバイキング
湿っぽい話聞こえて来る令和
そりゃ無理と五輪言うたら怒られる
筋肉をつけて大台越すつもり

丹波篠山市 長谷川 善輔

猫だらり我が家の主の顔をして
目の前の机上にマスク気にならず
戦争を知らないような顔で生き
まだ生きる正月準備が気になって
こんなにも世界が脆いと悟りし一年

西宮市 緒方 美津子

ほっこりと塔誌の切り絵四季の味
百歳の投句のありて元氣出る
おたがいに傘を傾げるいい街だ
淋しいネツリーの前に老い二人
老いの波にまつたをかける五七五

西宮市 亀岡 哲子

小春日のうらうら弾む屋根屋さん
植木屋さん秋を刈り取り秋の天
お隣の屋根からぬつと月が出る
負けん気の姉には姉の八十九
野菜安値一人鍋して冬ごもり

西宮市 福島 弘子

一年の計はコロナで御破算に
コロナ後に叶えたい事二つ三つ
うっかりと猫に漏らした愚痴聞かれ
鰯大根うすくちしょう油亡母譲り
着ぶくれるマスクに帽子気付かれぬ

西宮市 福田 正彦

グッバイの便りも来ずに友が去る
幸せを掴み取ったか暖かい
二人には信じ合ってる愛がある
加湿器に潜む病魔をチェックする
目覚しが鳴る前なぜか起きている

南あわじ市 萩原狸月

ランドセル普通の四月待つ不安

自粛して氏神さんへ初詣

新型コロナ付いていないか旅土産

ワクチンの先物買いにある不安

急流は避けて淀みに生きる老い

岡山市 大石洋子

切り抜きレシビをためて自粛中

ぐし縫いのぞうきん遣し祖母が逝く

干し柿をつくれと祖母の声がする

ばつの悪さマスクが隠しすれちがう

あと何年生きるでしょうかメールくる

岡山市 工藤千代子

ごく稀に命が惜しくなる夕陽

病院のこんな所で里自慢

平凡って有り難いのね晩御飯

話すこと何にもないが横にいる

今日という幕を上げてる玄米茶

岡山市 丹下凱夫

正論は竈の中でチチロ鳴く

焼酎の湯割りが僕の性に合う

末枯れてゆく足腰も脳味噌も

剣幕に押されてハンコつきました

よたよたと歩いて今日も八千歩

岡山市 前田恵美子

切り貼りも限界が来て障子貼り

雪見障子の貼り変えはまた次の年

夫と二人協力できた障子映え

年賀状難を転じる「南天図」

御節料理これは譲れぬ我が出番

笠岡市 藤井智史

オーブンザハートで愛を受け止める

柔らかい語尾にキュンキュンするハート

わたくしのハート串刺ししたあなた

愛妻を幸せにするマニフェスト

妻を好き過ぎる熱中症でした

岡山県 高岡茂子

小さいけど夢はでっかいはやぶさ2

うめき声聞える原爆記念館

やすらかにやすらかにと手合わすドーム

カラオケで巻き戻す半世紀

逆光で化粧ほめてくれる友

岡山県 田中恵

見るだけでうれしい我が家の青い空

呆けた振り逃げ口上がうまくなる

あっち見てホイでは越せぬ夫婦坂

この指にやさしく止まる赤蜻蛉

楽しみはなじみの鯉に逢う散歩

岡山県 藤澤照代

堪能もせずに秋刀魚の秋終る
追伸にでっかい釘が打つてある
やんわりと女が投げる蜘蛛の糸
あんなことこんなこともと蜜柑むく
かけ蕎麦の汁まで飲んで温まり

広島市 岸本清

「歎異抄」先ずはマンガで試し読み
肘タッチだんだん様になってきた
飲んで直ぐマस्कちつとも酔えません
自分では満点爺のつもりだが
ボケ話今日はよそうよ誕生日

竹原市 石原淑子

手放して見守る愛を冬木立
散歩道孫が迎えに来る歩速
七十を過ぎて毎日おもしろい
グーチョキパー曲がらぬ指のつぶやきが
背は丸くなる 丸くなれぬころ

竹原市 岩本笑子

三日月を見つけた秋が座つてる
招くには秋のススキよ虫の音よ
生き残るために小花を買って来る
辞書にない言葉を拾う秋である
それは個性であつて私という形

三原市 鴨田昭紀

挑戦が自信に変わる曲がり角
絵葉書を食み出すもぎ立ての果実
峰打ちの痛みがじわり効いてくる
優しさを貰つて優しさを返す
大波に挑む一途な父の海

宇部市 平田実男

セリーグへ恥をかかせたジャイアンツ
極楽へ行ける人生つまらない
孝行は父母より長く生きただけ
最高齢の僕へみんなの目が温い
棒読みをしてる総理の支持が落ち

防府市 坂本加代

究極のロックダウンで街は死ぬ
バーフェクト叶えばみんなアホになる
通販で送つてくれた見舞品
誉め言葉すなおに受けて芯になる
おしゃれしていざ出陣と気合い入れ

鳥取市 池澤大鯨

枯れ木も山の歳よりが居すわった
ディスタンス人嫌いな丁度いい
枯れた庭ほったらかしのわが書斎
ポーナスは熱燗ちよつとはずみつけ
炬燵のなか足の親指蟹となり

鳥取市 奥田 由美

お賽銭泥棒が来た過疎の宮
脱過疎のお祓い誘う鎮守さま
ドライバーも高齢村の福祉バス
古稀なんて小僧若手の片田舎
退職のブーケは妻と分ちあう

鳥取市 加藤 茶人

手に残るフォークダンスのまだ余韻
面影はどこへ行つたのクラス会
押し入れは子供心に秘密基地
娘なら少し介護も甘えられ
テレワーク三日過ぎるとちとウザイ

鳥取市 岸 本 宏 章

大家族で炬燵囲んだ寒かった
性格のプラス同士が折り合わぬ
粒よりも粉の薬が効きそうだ
私の斜め後にある死角
幸せだ苦言をくれる友がいる

鳥取市 岸 本 孝 子

枯れそうなところに酒という薬
不自由な足が伸ばせる掘こたつ
私には模造真珠がよく似合う
冷えた体雑炊食べて喜ばす
人様に血液型がすぐわかる

鳥取市 倉 益 一 瑤

切つてはならぬ絆おろそかには出来ぬ
わたくしを巻き戻したらみな喜劇
良いヒント拾い集めているルーペ
継ぎ目からニヨキニヨキ新芽出て来たぞ
漬物石亡母の秘伝が染みついて

鳥取市 棚 田 大

紅葉も俺らを鍛え去って行く
読めそうで読めない漢字どんと増え
コロナまたインフルエンザ次は何
娘婿俺と飲み合い元氣出す
いつまでもプラス思考を心する

鳥取市 谷 口 回 春 子

正義とは胸三寸の匙加減
亡母の愛裸電球ミシン音
物忘れ思い出したら時間切れ
まな板の蟹も震える夜叉の顔
尻拭い黒子演じるのはばあば

鳥取市 永 原 昌 鼓

ふる里の山も眠りにつく頃か
核兵器備えて平和唱えても
風呂ワイタ御飯デキタとベルが呼ぶ
老婆でも自粛じしゅくはもう飽きた
久し振り会っても出来ぬハグ握手

鳥取市 中村 金 祥

国民も医者になれそう新コロナ

コロナ禍も知らんぷりする渡り鳥

湿布貼る腕を捻ってまた湿布

風紋へ足跡数多有難う

天国に行った筈だが目が覚めた

鳥取市 夏 目 一 粹

毎日が言葉の渦の中にいる

春うらら神にもジョーク効きそうだ

常識は時どきキレたほうがよい

蝸牛のような旅なら出てみよう

満天の星をつまんで吞んでいる

鳥取市 副 井 ゆたか

発想の枯渇を解す芋湯割り

故郷から離れて気付く片想い

温泉で心の澱を拭い去る

新コロナインフル加え増す恐怖

ポーナスの感動消えて年金者

鳥取市 福 西 茶 子

蟹歩き後ろ歩きもして散歩

三密もGOTOもない現住所

お隣へ行くにも百歩では足りぬ

法要のお経もマスク内緒声

ジシユクして脳に褥瘡できました

鳥取市 前 田 楓 花

コロナ原発オリンピックも金が要る

母として娘は強くなっていた

向き合ってやれば良かった娘の悩み

ミノムシが見たくて殻をほじくった

帰っても独り夕日の海に行く

鳥取市 山 下 凱 柳

年の暮れプラスマイナス締めてゼロ

無理せずに休ませ使う老いた脳

政治の歪み放置されては泣く庶民

句の基本疎かするな師の教え

無病息災祈り今年も初詣

鳥取市 吉 田 孔 美 子

わたしが総ての猫枕並べる

四十の厄全て終りと思われた

長男の丸坊主彼のコピーかと

コピー大国歴史に恥ずかしいか

急かされるめし風呂洗濯のピーピー

倉吉市 猪 川 由 美 子

コロナコロナで暗く切ない年となり

総理力ちから活気が無くて頼りない

会食をマスクしてまでやりたない

五輪選手維持して待機大変だ

帰省や初詣でまたも変わりそうだ

倉吉市 岡崎 美知江

ドタンバタン元氣印のドアの音
流行に染まらぬ白がよく似合う
点と線結んで出来た福祉の輪
真ん中は大丈夫だと逃げ込んだ
どの輪にも幅をきかせる人がいる

倉吉市 田中 紀美恵

結婚祝いしずくほどだが愛がある
上手口に祭りあげられ有頂天
わっしょいと妻祭り上げれば円満だ
野焼きして煙もくもく消防車
友逝きし月命日がもうすぐだ

倉吉市 牧野 芳光

幸せなせいで寄り道してしまう
同じ苗植えても格差ついてくる
何度でも試すとどめを刺さぬよう
諦めが悪くて若いフリをする
あの世かも知れぬコロナ禍の世界

米子市 池田 美穂

こわごととコロナ禍の中丑が来る
ハグしない人類の手は退化する
客の無い今年はおせち超手抜き
おしゃべりの私マスクは二枚する
欲しいもののサンタババにも教えてね

米子市 伊塚 美枝子

平和だね大山眺め茶をすする
朝陽さす庭にさざんか笑顔咲く
寝顔見てどこに惚れたか思案する
またですか夫のスマホ側で鳴る
寒い日の散歩ついつい急ぎ足

米子市 後藤 美恵子

金で買えぬ普通に気づく今更に
GOTOと自粛に揺らぐ対コロナ
久びさに口紅選びGOTOへ
握る手に温もり残し姉は逝く
急逝に樟脳匂う喪服着る

米子市 竹村 紀の治

廃校になっても生きている校歌
受け皿に残った酒が私です
励ましの言葉が重い後遺症
直立で唄う昭和の恋の歌
天敵が毎晩酒を注ぎにくる

米子市 中原 章子

白菜が美味しくなって忙しい
白黒をつけることなく認めてる
現状を維持するための呼吸法
今出来ることを楽しむのが長所
ときめきを無くし一年早く過ぎ

米子市 成田 雨奇

妻が消す灯りナースがまた点す
ナース来ても起きてくれない妻も老い
鼻に管腕に点滴独房に
いつ酒が飲めるか医者に聞いてみる
退院の時はきちんと作務衣着る

米子市 野川 宣子

婆ちゃんも当てにされてる大掃除
ありし日を偲ぶはがきが届く暮れ
巣ごもりになごりつきない立ち話
手を振って見送る母が居てくれた
助手席ではらはらしてもまた乗った

米子市 吉田 陽子

朝練のボートと競う早歩き
シクラメン一鉢を買う冬支度
シナリオ通り大根さげて姉が来る
小母みんな送рийよいよ秋深む
ホットケーキのためにボトルのブランデー

鳥取県 門村 幸子

今日生きるほどのお金を持てばよい
待ち遠し子供のように昼ごはん
老いを止めるわけにゆかぬがたおやかに
他人様とつい比較して忤怩たる
ぷりぷりの膚を晒してウォーキング

鳥取県 斉尾 くにこ

アクリル板三割増しの美女にして
コタツ出す冬はやっぱり密がいい
なんだろう「く」の字に折っているページ
普段着の本名よそゆきの雅号
口癖は「いいですねえ」と「すみません」

鳥取県 竹信 照彦

寒い祝日だ勤労感謝の日
月一度散髪老いの身だしなみ
三世代住んでおしゃべり無くスマホ
次世代が継ぎそうもない果樹畑
脱コロナ元氣を出せと冬火花

鳥取県 山下 節子

ファープルの本と虫篋置く机
子育ては一番希望もえていた
戦後から希望はずっと持つて今
白無垢で嫁ぎ自分の色で住む
母の味あと一味をプラスかな

松江市 石橋 芳山

山頭火ビビビとビザが焼き上がる
中二階へ進み出てくる駆逐艦
両乳房かたく埴輪のさめた顔
こむら返り疑うこともなく謀反
陽水の声を引つ掛け逢いに行く

松江市 藤井 寿代

ドンマイドンマイと私へのエール
レモンティー遥かはるかな人想う
三面鏡ズバリ私を攻めてくる
人間を休みたいと思う時がある
幸せが続くよう夫の鼻歌

松江市 松本 知恵子

金曜日知ってるカラスもう来ない
ふるさとの思い出浮かぶ雪になる
溺愛の祖父でありしよ雪が降る
受け流すことに慣れてる耳だけど
距離保つ猫が野性を残してる

出雲市 伊藤 玲峰

早や師走大事な方の別れあり(原章峰様 金楽雨学様)
總廟を感謝で洗う年の暮
老いの身も静かな趣味で続けられ
コロナ禍に病院だって行き難い
さあ皆さん体力つけて寄せつけまい

雲南市 菅田 かつ子

おしゃべりが来ると明るくなる我が家
時々ほ喋らにや言葉忘れそう
かつちゃんとマスクに声をかけられる
友が来る喋り薬を懐に
庭に来た鳥に小首かしげられ

島根県 伊藤 寿美

ケセラセラ九十歳になっちまい
「延命拒否」九十歳の文字残す
「ナラヌコトハナラヌ」頑固な蝸牛
雲悠悠瑣末なことは忘れよう
ハネムーンは城の崎亡夫は志賀ファン

東かがわ市 川崎 ひかり

幼き日すき焼きだった誕生日
日記帖今日の元気にありがとう
コロナ禍で辞書引く事が趣味になる
写メールでホームの友へ送る秋
さあ翼広げて翔ぼう八十路坂

松山市 栗田 忠士

四面楚歌コロナインフル花粉症
御破算で願いましては新コロナ
饒舌を重ねる時は嘘っぽい
卒寿越えなら仕方がないか計報欄
気晴らしにひとつカッポレ踊ろうか

松山市 宮尾 みのり

お惣菜売場お隣さんと会う
ずっと先は無いがすぐ前見て歩く
今だから話すだなんて言わないで
ちらり欲かすめなかなか割り切れぬ
価値観も秩序も変えてゆくコロナ

今治市 永井松柏

糞虫に学ぶ巣ごもりのノウハウ

自肅中「ころ」を三度読み返す

万歩計持つて二千歩ほど歩く

紅はるかも紅まどんなも美味すぎる

だとしてもにもかかわらず師走かな

西予市 黒田茂代

控え目な生き方好きな寒あやめ

ほつとするニュース心に灯がともる

BGMの所為で聞えぬナレーション

夫がしなくなつてきれいな台所

三十年出刃包丁が痩せ細る

西予市 西田美恵子

本当になるまで嘘をかき混ぜる

混ぜても混ぜてもいつも分離をするあなた

機を織る生涯恋は語らずに

木綿のような暮しがあつた火吹竹

ママになる爪はまあるく切つてある

北九州市 小松紀子

ボランティア十七年の暮おろし(病院ボランティア)

病院は待つところ塔誌忘れない

孫自慢いらない人にはやめましょう

聞かなければ良かった甥の悩みごと

取説は苦手頭痛くなる

唐津市 坂本蜂朗

断りの口実にしているコロナ

妄想の中を彷徨う独り酒

女房の老化が進む予定外

義母の葬儀済んだばかりに義父も近く

仏壇の蠟燭機嫌良く笑う

熊本市 杉野羅天

愛ありて扱く紫蘇の実の千本

一輛立てローカル線はのんびりさ

黄蝶舞う秋の日差しの黄の中で

「高貴」の名薔薇むらさきの気品持ち

自肅GOTO私は迷うことばかり

熊本県 岩切康子

窓明り異様な赤に外に出た

ダイケアに通っている友元氣そう

句集出来るクラスメートが待つていた

久し振り帰つて来たか赤トンボ

以前ほど正座永くは続かない

札幌市 小沢淳

何騒ぐ牛がのそりとやつて来た

お若いと言われ口笛吹いてみる

叩き上げ菅総理にも妻の功

ジョン・レノン歌うイマジンまだ褪せず

主語のない話通じた友が逝き

弘前市 稲見 則彦

お母さん二十七回忌が来ます

地吹雪が止めばすつくと岩木山

ジャラジャラと小銭かかえて街へ出る

この三味は誰だったかと五能線

プシュプシュと手を洗う癖つきました

弘前市 今 愁女

各国もコロナが殖えて安らげぬ

花模様のマスクをしては気分変え

あゝあ早くさくら満開観たいもの

自粛しても単純に気持ち変えられぬ

コロナ終熄が一番の春が来た

塩竈市 木田 比呂朗

換気してコロナ意識の鬼遣らい

巣ごもり後妻がテレビを占拠する

湯豆腐に似合う盃決めてある

はやぶさ2沈む日本を歓喜させ

スニーカー春への準備怠らず

男鹿市 伊藤 のぶよし

巣ごもりじゃ過疎も都会もかわらない

荒れなけりや鰯寄れぬ日本海

此処までは慣れ此れからは根気だな

雑魚だから寄り添う知恵で生きのびる

吹雪一過まぶしすぎます新世界

朝霞市 前田 洋子

勤労感謝今は毎日慰労の日

何の予兆ハマグリ総出九十九里

ちよつとそこまでそんな感じの宇宙服

三市を跨ぐ三十分の散歩道

増えてきたコロナを縫って美容院

越谷市 久保田 千代

ご壮健恩師に贈る粟古代館

移ろうて肩の力を抜く暮し

修正の叶わぬままに紅をひく

過去の傷無知では済まぬものだった

出来ぬ約束またしてしまふ悲しいね

東京都 川本 真理子

人生を考える落ち葉の季節

相性のことなど思う冬一日

あやまりたいことばかりある年の暮れ

添書きもなくなる老母の年賀状

不眠の合間極彩色で描く夢

東京都 まえで とよこ

幼稚園天気のよい日は汽車ごっこ

車掌は先生みんなの腕はピストンだ

汽車は走る路地から八間道路まで

園児たち避難訓練とはしらず

汽車ごっこの避難訓練ありがとう

八王子市 川 名 洋 子

紅葉狩りしばしコロナを吹き飛ばす
真夜中の恋人深夜便とる

巣ごもりに鈍感力を磨く日
ほっこりと居心地のいい人が好き

家籠り今日も指折る五七五

横浜市 菊 地 政 勝

叱る父なだめる母で子が育つ

絵はがきの一句が旅のおすそ分け

ひと時の至福をもらおう試着室

死ぬことはないと食べてる期限切れ

コロナ禍に国策出せる人居ない

(前月分) 熊本県 岩 切 康 子

テレビ体操満足出来ず始動する

虫食いの菜に虫卵を疑うよ

お元氣さ問えば同じ齢だった

只一途に短距離だけ歩いてる

真つ直ぐに進む牛歩で暮れて行く

春の川柳塔まつり誌上大会

締切は2月28日(日)です。

詳細は表紙裏参照。

名句選・この一句

本ンぶりに成て出て行雨やどり

宝暦13(一七六二)智2・柳多留初35

俄雨に遭つて雨宿り。直ぐ止むだろうと思つたが
なかなか止みそうにない。降り始めに無理をしてで
も目的地に行つておけば良かったと思つても後の祭
り。いよいよ止む気配無しと覚悟を決めて尻を端折
り身支度をして雨の中へスタスタと。

さて、この句の前句は、「つれ立ちにけりく」。
投句者は、どうやら数人の雨宿りが居たことを想定
していたようだ。同じ境遇で、何時しか親しくなり
会話が交わすようになる。「止みそうもありません
ね、あたしゃ行きます」といえば、私も・私もと連
れ立つことになる。

前句付の句・川柳は前句の有る無しで、句の解釈
も印象も全く変わってしまうのである。(清)

川柳塔の

川柳讃歌

⑬

上方芸能評論家 木津川 計

一面の白津軽は眠りの中にある

稲見 則彦

小説の書き出しを思わす句である。雪に覆われた津軽は、雪の降らない大阪では憧憬の最果てであった。なんといつても津軽出身の太宰治の影響が大きかった。自己破壊型の太宰は「人間失格」で「生まれてきてすみません」と謝り、愛人と入水自殺を遂げた。石川さゆりはその太宰の津軽を経て北海道へ帰るのだ。「北へ帰る人の群れはだれも無口で……」辛い津軽海峡冬景色である。弘前の則彦さん、今も無口の人たちに川柳で励ましを。

金婚を祝いて集う子や孫や

副井 ゆたか

「今年のわたし達、金婚の年よ」と妻が言ったのは十年前である。国立療養所での闘病を終え、遅れて入った大学で学生結婚をした。第1号と思っていたら開高健が最初だったと後に知った。「原爆許すまじ」の思いで広

島に原爆の落ちた日を選んで貧しい式を挙げた。出席の友人が立って「八月六日を二度と繰り返すな」と叫んで座った。その叫びにも応え六十年が過ぎた。ゆたかさんもおめでとう。お子さんや孫さんに囲まれて幸せですね。

手品して騙せる孫が今日も来た

金川 宣子

孫と遊ぶためにおばあちゃんは手品という手を思いついたのです。孫は騙されるのが不思議で仕方がない。だから今日もネタを見破りに来たのだ。だが孫はまだ慣れて分らない。双方の駆け引きではあるが孫はやがて見破る。来なくなつては困るからおばあちゃんは次の手を編み出す。その手に飽かされるとおばあちゃんはさらに……。だが彼はバカらしくなつて来なくなつた。おばあちゃんは淋しい。宣子さん、しかし彼は賢い若者になります。

長生きも惜しんでくれる内が良い

福田 好文

「まだ生きてたか」と呆れられる人がいる。「とうとう逝きましたか」とホッとされる人もいる。「なんでもうちと頑張つてくれななんだんやろ。こんな人、二度と出てきまへんがな」と惜しまれる人もいる。故人への思いさまである。長生きは万人の願いであらうが「惜しんでくれる内」が華だ。あた

ら長命は周りにかける難儀を思えばこそ、私にはほち人知れずこの世を去りたい。好文さん、貴方は慶はれるご長命をぜひ。

手の甲に浮く血管にある歴史

岸 桂子

赤ん坊の手は丸く柔らかい。その手がやがて大きくなり、固くなり、学業を終え、人生の凸凹道を歩むほどに体は締まつてくる。血管が手の甲に浮きだす。年輪を刻んだ証だ。容易ならざる人生を切り開くほどに体は酷使される。皺がより、髪は抜け、白く、腰も曲がり、うずくまる。老人の体は喜怒哀楽の総決算である。人間は漲つたのち萎む。縮んだ老後がおだやかであつてほしい。桂子さん、懸命の人生でした。これからは幸せですよ。

森からの手紙小鳥が庭に置く

斉尾 くにこ

南の丘をはるばると郵便馬車はやつてくるのです。うれしい便りを乗せて、と岡本敦郎が歌いました。丘からの手紙がうれしい以上に森からの手紙は小鳥が配ってくれるのです。ですが、今年の冬は寒くて、あたしたちはみんなふるえながら巣ごもりしています、と手紙にあるのです。あつたかい毛布を持つていつてあげたいけれど、どこにいろのかわかりません。くにこさん、小鳥も今年は大変です。

西尾葉句集『水鶏笛』くいなぶえ

夫婦は二世おたやんなれど辛抱する
時雨よし河内のはての灯を守る

紅葉寺明治の夫婦手をつなぎ

燃えもせずさめもやらずに珊瑚婚

夫婦喧嘩長男にフンと笑われる

迎え傘の妻に教える水溜り

悟れる如く諦める如く老夫婦

「家族風呂」

トマトからして嫁と気が合わず

遠い耳へきかす根気を嫁はもち

姑のたまに笑えばサタンめき

皿割った音を奥さん寝間できき

意見する儂がまだまだ遊びたし

効きすぎたかと両親の瞳が出合い

姑は半分きこえる耳をもち

掃苔の一人は義理の仲の人

プラモデルませた言葉で手伝わし

孫が来て碁石がたりぬ駒がない
苔はやす石を孫等のすべりんこ
巻ずしの中だけ食べる祖母育ち
水引きに鰻あてている十二月

おむつまで提げてと姑眉をよせ
染め直し昔の生地をほめられる

ゆきとどいた言葉で姑おくり出し

鼻がようきいて姑の因果なり

五人目の孫抱く力余りけり

孫が来て儂のペースをくずすなり

孫達のとりあう膝を広く組む

おんなじ話きくも孝行の一つなり

アルバムのここから軍服姿増え

結局は我が家をほめて帯を解き

せやさかいにとゆるう叱られる

宿題へ時々夜なべ口をきき

みんな帰してホンにおなかすきました

それぞれにスポンサーがあり孫達者

俺は独酌妻は家計簿差し向い

自選集

小島 蘭 幸

忘れてはならぬ通天閣の赤
ライトアップが消えたコロナも消えなさい
マスクマスク髭は暫く剃つてない
覚醒しました巣籠り中でした
句碑巡り私ひとりの初詣で

竹 治 ちかし

好奇心 連れて歩いてる余生
幸か不幸か同じ仕種の朝が明け
戦いの敵にも赤い血が流れ
やり慣れた頃に終りとなる仕事
立つ位置の違い舞う人沈む人

津 守 柳 伸

手作りのマスクは愛のしつけ糸
じんわりとコロナ退散させる丑
アマビエに縋る鰯の頭でも
初旅は3密避けるミステリー
出る杭は打たれる事に馴らされる

都 倉 求 芽

孫の手の先孫いない箇所もある
高齢者優先ありがたいやら怖いやら
コロナごもり師走ごもりや冬ごもり
マスク汚れないデイサービスは週一度
一日が長い今日も36度5分

西 出 楓 楽

傘寿越え好々婆にはまだなれぬ
孫には死語もつたいたいという言葉
一千万の負債背負ってきた曾孫
安らげる向田ドラマ小津映画
今どきは親孝行より子孝行

仁 部 四 郎

建国の神話は虹だつかむまい
神話には衝突したがるものもある
或るポスト神話に衣裳着せたがる
教科書で習うと神話肩が凝る
Aさんも神話を置いて逝きました

福 士 慕 情

お山に三度そろそろ郷に雪がくる
生きてるか死んでいるのか鬼ヤンマ
風吹けば黄葉が足に纏いつく
脳の錆ヨサレヨサレと撥の音
御多分に洩れず津軽も新コロナ

松本文子

雑草は枯れても生きる わたくしは？

独り酒コ罗纳は動く気配なし

ふるさと通過の白鳥を出迎えに

待たされて待ちくたびれて鳥になれ

そして終りは夕焼雲に包まれて

三浦強一

賀状来る年頭吟の清清し

先輩の感染したい詩心

老化順調足腰耳に物忘れ

転ぶたび傷は浅いと自己暗示

大阪都にならず良かった署名判

三宅保州

遠くからせめても義援金送る

幸せな人だけ集うクラス会

起承転結転がり出すと止まらない

厚顔無恥の最たるものは戦争だ

変わない正月という幸せよ

村上玄也

新内閣もやはり逃げたり隠したり

コロナ以後余白ばかりの予定表

どんどんと足早になる八十路坂

便箋の余白を埋める句を一句

年の瀬が迫りやっぱり賀状書く

森山盛桜

外連味が無い一円は一グラム

毒きのこらしくなかった油断した

泥濘よ怯むな朝焼けを仰げ

税まだランドマークに成り得ない

阿茶羅漬不協和音が洩れてくる

八木千代

望月に賜る 氣力らしきもの

未来はいつも伏目がちなる桜月

八月の月 敗戦を忘れまじ

霜月の月影 詫びて詫び足りぬ

月の弦 総身ひれ伏すばかりなり

山本希久子

主婦六十年奥の手使い切り

前進をするほど仏に近づく

巢ごもり続くカルテも冬景色

太い一線自分で引いている孤独

令和三年いまだ昭和を生きている

板尾岳人

宇宙から見れば人間美術品

その内に死ぬかも知れぬ茶を煎れる

猫生んだ記憶はないが追ってくる

人間はみな阿呆であり月へ行く

狂猫と書いてあるので近寄れぬ

居谷 真理子

悲しみに酒を飲ませて太らせる
見上げれば新月答えなどくれぬ
まだ赤い熱せば古代紫に
堕ちるまで紙飛行機よ白くあれ
墓なんて何度来たって墓だけで

川上 大輪

GOTO GOTO コロナをかき分けて
本当の春はコロナが明けてから
迂闊にも便座の上の夢心地
ポーンとピアノ過去はもう動かない
抽斗の奥で指切り風化する

北野 哲男

願うより卒寿の札に初詣
アポ取って孫へ年玉前渡し
通販のおせち心が満ちて来ぬ
寒行の団扇太鼓も遠くなり
西暦で聞かねば齢が判らない

木本 朱夏

老い先が揺れるコロナの棒グラフ
トリアージにいつかは揺らぐ命かも
そんな目で揺れるわたしを見つめるな
揺れながら行くあの影はちちははか
あの影はいいえわたしの分身よ

新家 完司

メールにはハートマークを願います
はけぬうちやつておきたいボケテスト
おだやかな暮らしを壊す破裂音
難問のひとつお酒を減らすこと
傾いた家で傾きながら寝る

高瀬 霜石

蘊蓄はさておき卵かけご飯
お茶漬さらさら充分パワーアップする
結局はハンバーグかなレストラン
カロリー表示あると食欲うせますなあ
うまいもん食って涙とおさらばだ

麻生路郎語録

句というものは、いつも巧い句が作れるものではない。生活があまりに忙しい時には作れないことがある。あまりに悲しい出来事が起ったときや、あまりに嬉しい出来事が起ったときも同様である。かと思うとあまりにひまな時にも作れないことがある。

では、どんな時に句が生まれるかというと、忙しい時が過ぎた後、悲しいことや嬉しいことが過ぎた後で、人生を静思する時、颯風のように、創作欲がやって来るのである。

(「川柳雑誌」NO・147より)

森の集句



『川柳塔創刊80周年記念句集』

桜井千秀 さくらい せんしゅう

信用ゼロ首のないのと同じこと
ぶつかってみよう勝負は時の運
叩いても出ない埃で持つ自信
ドミノ倒しちよつと手前で飛んでやる
ほどほどの我慢泣いたり笑ったり
ひとめぼれの米は常食しているが
知っていてとほけ通すも難しい
風茫々わが身ひとりの置き処
お洒落着は鎧しつかり身につける
いざ鎌倉へ心積もりはしておこう
サントルチア歌う菜の花咲く丘で
真実はひとつ仮説に無理がある
へらへらとされて構えが崩せない
落伍者になるなど影が叱咤する
句は心偽りの句は作れない

(平成16年7月17日 発行)

温故知新

小出智子川柳集『露の臺』から

三年も経てば誤解は解けている
遠い日を想い出すのが癖になり
エンピツの思えば長いお付き合い
明日から春というので燗焼く
知らん間に棚の胃薬減っている
デパートへ行くのは少し淋しい日
当分は医者を信じておくことに
北の風夫に言えぬこともあり
玄関の灯りは許す明るさで
何時からのことにしようかさて余生
人肌の湯吞みがいやに懐かしい
酒の瓶ひとりぼっちが大嫌い
世渡りの下手なついでに宵寝して
素晴らしい素顔で逢いに来てくれる
人の世に病院があり寺があり

(完)

水煙砂

西 出 楓 楽 選

神戸市 米 田 利恵子

招き猫も泣くほかは無い時短では
母が泣く映画この次このセリフ
四人目はお産も楽と聞いて春
カラフルなブライドやはり人間だ
お守りのようにバッグに替えマスク
嘘つきのふたり話を盛りあげる

江南市 脇 田 雅 美

人並みに人生行路無事過ごす
物忘れ思い出すまで五分待つ
へそくりの置き場所変えて安堵する
暮らしぶり覗くカラスのゴミあさり
愛車から自転車に代え怖いこと
国か都か新型コロナよく協議

横浜市 長 島 亜希子

褒めるって簡単だけど難しい
「はやぶさ2」観る子らの目に希望沸く
一グラムが宇宙の謎を解き明かす

VIP待遇でカプセル長い旅を終え

Goと言いStayとも言いぶれている

良いホーム費用の面は別にして

池田市 上 山 堅 坊

あやふやな返事している遠い耳

惚けレベル進まぬように五七五

結び目を弛めこころ開け放つ

ああ痒いボクは確かに生きている

思い出す為に階段引き返す

もう歳だ多少の不義理許されよ

尾道市 小 川 道 子

師のことは勇氣やる気を賜った

蹟きをバネに念じてきた言葉

焦るなよ用心深くなる齡

一本の鉛筆で見る夢の数

咳払い一つでわかるイエス・ノー

時として見て見ぬ振りも思いやり

鳥取県 下 田 茂登子

死に支度毎夜考え出来てない
八十路とはまだまだ若いそう思う

食欲はないと言ってる友の肉
百歳が当り前だよ今世紀

掃除する元気はないが食はある
同居する息子と会話ゼロである

横浜市 巖 田 かず枝

神に聞きたい まだですか いつですか

郵便で菓子と絵本とお年玉
不便な地免許返納ゆらいでる

朝ドラのセリフ笑いを期待する
宅配や買物すべて消毒す

人口が減ると地球が軽くなる

三田市 住 吉 美和子

温泉猿頭にタオル乗せましょか
老人に優しくないねカタカナ語

穏やかな気持の時は皆善人
大好きな柿の実食べて子規想う

日暮れ時愁いをおびた曲「家路」
深々とお辞儀をしたらよろけたよ

京都府 北 野 クニオ

新型コロナ三波押し寄せまた自粛
新型コロナ強かさには舌を巻く

遺言書書いて余生が楽となり

居酒屋を出れば北風心地よい

一人立ち記念に贈る腕時計

脱コロナワクチンまだか気が揉める

佐賀県 真 島 久美子

尾骶骨あたりに置いてある荷物

さよならを言いたいだけの夜のメール

哀しみを乗せ天秤に笑われる

不細工な私で逢いに行く月夜

手の中に隠しきれない傷の数

偽りの時間を添付しています

松江市 山 根 邦 代

ちかちゃんに脱帽してる八十五

このシワは生きたあかしの宝もの

好奇心あれば衰え寄りつかぬ

電話では転ばぬように念をおす

もうイヤだ毎日コロナ数字ふえ

腰曲げてでも行きたいサロンの輪

寝屋川市 川 本 信 子

茶飯事をちよつと工夫で手抜きする

朝一は灯明つけて日々感謝

足腰の鞭になりますドッコイショ

ざわざわの噂話は耳通過

恋なんかしたくないけど懂れる

去年の苦勞肥やしになりました

広島市 常國 喜好

煩惱の消えた男の無味無臭
冤罪が晴れても元に戻れない
悩んでも大差はないと猫ごろ寝
いつからか妻の歩幅に合ってくる
青信号杖に歩道が長すぎる

竹原市 若年 幸子

油断大敵コロナに隙を狙われる
長電話マスク無しにて盛り上がる
自家野菜おしゃべり載せて友が来る
私をリフォーム朝の万歩計
除夜の鐘忘れ上手の生き上手

三原市 笹重 耕三

庶民の秋刀魚にありつけない夕餉
にんげんの所為ですクマが怒るのは
にんげんの隙間に入り込むコロナ
コロナ禍の隙間でクリスマスケーキ
政治家に大金持たせてはならぬ

松山市 大内 せつ子

ネジ山を潰すあなたのお説教
重箱のすみが少うし臭くなる
涙あふれてポテトチップス一袋
満月の猫面倒くさい欠伸する
光るもの拒むふるさとの葦屋根

黒石市 石澤 はる子

句読点胸のつかえを消してゆく
頷くか笑い飛ばすか無視するか
紆余曲折豆腐の角が丸くなる
気を配る両隣との車間距離
出がらしのお茶で一日締めくくる

黒石市 北山 まみどり

雪のない冬の津軽は味気ない
いよいよの雪に一喜一憂する
あきらめの色かもしれないぬ白一面
室温をあげて怠けものになる
意気込みを静かに呑んだ冬の使者

仙台市 月波 与生

遺影用写真毎日自撮りする
図書館の順番待ちが心地よい
潔く生きて条幅はみ出さず
謝りすぎぬよう土産ふたつ持つ
悪くない巨大観音見える部屋

白河市 鈴木 たけし

空も海もおとぎ話が消えていく
アクセルを踏む度トンネルが伸びる
翅のない蜂がたらふく蜜を吸う
故郷を描く色鉛筆がない
血縁が絶縁になる遺産分け

富士見市 中島 通則

マスク越し目に物言わす小池知事
アベノマスク話のタネに取って置く
遺影撮るタイミング待ち早五年
デジタルに遂に置いてきぼりを食う
ホームドラマ妻に感謝の主演賞

名古屋市 富田 末男

無理なことチャレンジしては前を向く
母さんへいつも感謝を足している
好奇心持つて世間を知り尽くす
耐えるのは母の助言があつたから
好奇心あると生き方進歩する

大阪市 尾崎 文子

コロナ禍で軍事費減らす気配なし
誕生日延期をせずにやって来る
紙バックお酒の底が見えません
初詣神様今年ひまだらう

大声を出して乾杯したいもの

大阪市 阪本 秀子

とどめたい医療崩壊ああ神よ
当然が必然などと思えない
今日よりも明日に輝き満ちるよう
心の目どこにあるのか我に問う
痛み知り人の痛みに薬ぬる

大阪市 柴本 ばつは

血統書私無いけど犬は持つ
床磨くヘルパーさんに大感謝
ええ加減にしときなはれやこらコロナ
飛沫感染マスクしかない情けなさ
天と地にご恩返さず老いました

大阪市 森 廣子

老いは悲しい林檎一つが手に余る
老人だけど命は惜しい新コロナ
憤怒の赤で通天閣が悶えてる
一人にも一人楽しむタジン鍋
来年に夢 チューリップを植える

大阪市 樋口 眞

大和路の秋景コロナ忘れさせ
絢爛の中金堂に魅了され
強い意志多川俊映いうお方
受付さんごく丁寧な依水園
名園の紅葉尽しに草臥れる

池田市 倉本 一弥

肩もまれ短い夢をみています
お茶するか仲間がいないテレワーク
手を伸ばす届かぬ場所にほしいもの
ドラえもんのポケットみたいコンビニは
毀滅の刃 前横私泣いている

泉佐野市 樫葉良子

豊中市 貝塚正子

六十路坂駆け落ちてる記憶力
オンライン会社の立場家にバレ
憂うつを風呂で流して明日を待つ
病院へ化粧する日はまだ元氣
白か黒焦るなグレーそれでいい

茨木市 細田マキコ

豊中市 齋藤奈津子

残り柿メジロと雀分かち合い
師走だと思いこんだら走り出し
初詣祇園とりやめアマビエに
高齢化年賀状じまい急増す
猪出るいたすけ古墳午後三時

門真市 坂本星雨

寝屋川市 岡本勲

通天閣を真っ赤に染めているコロナ
鏡への愚痴をマスクで隠す妻
GOTOが眠った欲を目覚めさす
感染者の数を毎朝確かめる
自分自身と向き合う大切な自粛

高槻市 鳥居宏

八尾市 田邊浩三

超大国これが選挙かあきれ入る
我が国の首相もなんと情けない
コロナ禍にしばし御無沙汰美術館
同じ顔同じ挨拶散歩道
暇なようですべきことなら山とある

夢のまま散った私の玉の輿
シワ消える信じて使いもう十年
見栄張ってニーチェは読まず飾り物
年金日ATMの長い列
断ると死ぬと言われて共白髪
観劇中音が気になる袋菓子
松茸の香り盗んで買うしめじ
立ち話避けて家まで遠まわり
カップルも席を離され見る映画
クリスマスツリー飾るお寺の奥座敷
うるさいが安心もする高いびき
エラそうにしてるが電気つけて寝る
泣き虫を育ててくれた泣かぬ母
また負けた一人コッソリ夜の酒
年とらぬ写真の父が笑いかけ
ボケてると言ってる内はボケてない
三連休誰のものかと家族会
ワクチンも離れて並ぶ申し込み
四季の良さ奪ってしまう温暖化
会食で返杯不要羨まし

大阪府 奥野健一郎

いい眺め腕を組んでる老夫婦
知らぬふりしても知ってる苦勞人
揉み手する手とは握手をしたくない
しみじみと酔いがまわればいいお酒
本物は飾らないから見間違う

大阪府 高木道子

大切な小春日布団干さなけりや
いつだって田舎時間で来るお方
うっかりと雫した愚痴が膨らんで
かみ合わん話も弾む日向ほこ
つつつんと冬の木立は無愛想

神戸市 近藤勝正

コロナで明けコロナで暮れる二〇二〇
2波3波どこまで続く暗い海
頑張ろう始まりあれば終りある
久しぶり日本元気にはやぶさ2
肩書きを取って気楽な好々爺

神戸市 みぎわはな

コロナ無い星を探しに探査船
怠け癖明日があるさ あさつても
権力の味それほど美味しいかトランプ
性善説信じたいのに事件多々
沙羅双樹の白は汚れることは無い

神戸市 山根弘華

拡大のコロナに今日も家ごもり
アイラブユー亡夫の笑顔夢の中
追いついた友の横顔知らぬ人
世の中を丸く治める口達者
音沙汰がなくて息子の無事祈る

明石市 瀬島流れ星

生きてるか定期メールの無二の友
イエスマン集め総意と言う組織
待ちぼうけ性善説は捨てました
自転車ドミノ倒しのいつち下
途中下車論吉一泊すぐに発つ

芦屋市 新阜義明

労力に汗がごほうびボランテニア
何もかも川柳にする得意技
渋柿が甘柿になる歳迎え
句が浮かぶペンメモいつも忘れない
楽隠居通用しない今時代

伊丹市 岡村風琴

今日もまた楽しさ探すスニーカー
生きている誰もがみんな支え合い
五線紙に弾けて遊ぶ春の音
幕間に走る黒子の汗が飛び
人間の森に迷路が多過ぎる

三田市 稲角 優子

コンバイン笑顔で洗う秋仕舞い
曾孫だき明けてめでたさ倍になり
つまりて人は優しい風を知る
生きる世の幕間にもらうさそい水
背を向けた母の教えはいま宝

三田市 辻 開子

毎年の師走片づけのばしぐせ
師走月経つ日の早さ時止まれ
コロナ禍でキッチン見事美しく
高齢も手洗いまスク板に付く
コロナ禍にテレビとラジオ友になる

三田市 中山 昭美

コロナ禍のエンドロールは見届ける
こたつ出しますます密な四畳半
はやぶさ2コロナの地球見限らず
出す出さない相手任せにする賀状
着ぶくれてお洒落心も冬ごもり

三田市 森 玲子

句が浮かび朝になったらもう忘れ
断捨離しますもうハイヒールはけません
診察日右も左も老夫婦
シミとしわ歳の証しと諦めた
秋刀魚にも少子化時代くるのかも

宝塚市 太田 としお

人生は笑った者が勝ちになる
トレードに出したら急に打ち出した
辛いけど二度と死なない一度きり
美し過ぎて不幸になったひとがある
葬式いらぬ灰は空からまいてくれ

宝塚市 岸 田 万 彩

ドングリが不作で寒いブナ林
人里に誰も獲らない柿実る
空腹に勝てる道理をみな捨てる
赤い実がおいでおいでとクマを呼ぶ
腹いっぱい食べてぐっすり眠りたい

丹波篠山市 藤 井 美智子

好奇心集めて佳句の糧とする
新コロナいつまで居れば気がすむの
手伝いの次に勉強昭和の子
失敗が励みをくれた事にする
マイペースとび入り雑事邪魔をする

西宮市 高 橋 千賀子

心に余裕持てと言う秋の空
余裕等ない年金で猫を飼う
人の世の十人十色が面白い
それぞれに歩いた道が身の証し
握手止め肘でタッチのニューマナー

三木市 山口 ヨシエ

手すさびの筆つれづれの詩を編む

冬ざれの庭淡淡とわが歴史

眩いてみんな許して黄昏れて

鐘撞いてただ合掌の冬の天

山門を遠ざかる背に父の声

奈良市 東 さだお

駆け出しが時たま見せるしたり顔

モーモーと妻はときどき牛になる

火傷したアベノマスクで鍋つかむ

逆らえぬ川の流れと僕の妻

息拔きは肩書脱いだ露天風呂

和歌山市 倉橋悦子

月冴えて眠れぬ夜の五七五

積ん読を崩し始めたのはコロナ

寒の入りクローゼットがふくれだす

母さんとコタツとみかん冬景色

作りたい笑えるような川柳を

和歌山市 定松宏枝

仏壇にケーキ供えてクリスマス

独り居も膳に立派な睨み鯛

喜寿を越え米寿目指してスクワット

来る人もないのに晴れ着三が日

叶わない夢をポッケに持ち歩く

和歌山市 福島一雄

足早に動く師走の人の影

小言いう私に妻は目で止める

積る雪番傘下駄も見なくなる

カブセルは六年かけて無事帰還

医者がよい自粛自粛でとり止めた

鳥取市 上山一平

砂丘らつきよ紫の花告げる春

音曲も自粛の出雲神有月

没落の哀れを煽る琵琶の音

目標の完遂できぬまま師走

コロナウイルス師走まるのみあえぐ民

倉吉市 宮田風露

雨凌ぎ雀が軒を借りに来た

良い嫁と酔い姑です世間体

零したい愚痴はマスクの中に置く

もう少しこの世に未練あるように

どうしてる友が元気に電話口

境港市 中井虎尾

八十二生まれた昭和遠く去る

八十二戦争戦後平和と生く

カタカナの令和コトバはわかんない

師は走る俺はコタツでテレビ見る

木が生きる為に紅葉は散る定め

米子市 川 本 美津子

眼の手術終えて美人に見える妻
電線に間隔あけて鳥止まる
心の隙間ピンクの花で埋めたい
友と会いたい心の闇が遠ざかる
お年玉すこしプラスで機嫌とる

米子市 妹 能 令位子

はらはらと花びらのよう記憶散る
君にだけ届く言葉を温める
すぐ八十路思えど紅を引いている
ふつふつと亡夫の記憶が充ちる朝
何もない畑に春を埋めました

鳥取県 田 中 重 忠

九十四歳まだ作業服よく似合う
九十四歳歩ける足にただ感謝
大皿に秋の味覚をてんこ盛り
会釈するマスクに出合う散歩道
危険で行かぬコロナが怖いパチンコ屋

松江市 相 見 柳 歩

ポストたち毎日仕事してくれる
山ほどの恋の起伏が楽しくて
体育館同時にこころ掃除する
給食の冷凍みかんセピア色
日本の底には石破待望論

出雲市 黒 目 ひでお

リスタート夢叶えるに機は熟す
薬にサブリ僕を支えて元気づけ
頭晴れ知恵が次々浮かび来る
頭晴れ心のしこりやつと取れ
世直しの成就を願ひ喜寿祝う

安来市 原 徳 利

重い命を軽い葬儀にするコロナ
山陰の真冬の空のダダイズム
共白髪おぼろ豆腐になりました
雷が鳴ってもやめぬひとり酒
ハロウインの魔女の化身か女郎蜘蛛

瀬戸内市 宮 宅 比佐恵

自粛して家で合掌初詣
今年こそサクラ見せてよ拉致家族
コロナ禍の不況予期せぬ老舗消え
見逃したサイン不運ってそんなもの
お正月増えてゆくのはしわとぐち

美作市 岡 本 余 光

一周忌中村医師の徳偲ぶ
一日を始める用意水ゴクリ
真っ直ぐ道の筈だが壁がある
不純物洗い流して出直そう
コロナ禍に問われる大事僕の芯

松江市 中 筋 弘 充

造花にも咲きたい色があつて咲く
初めからやり直してと言う機械
政治家をバカだアホだと言うテレビ
校正は一番先がやりやすい

雲南市 永 見 安 子

楽しみの予定一つに明日を生き
七十路まだまだだと喝を入れ
紅葉を見ても今年は寂しそう
行つた孫あいたテーブル帰省待つ

津山市 高 橋 由紀女

冬夜空心も洗う七つ星
振り返り論して和むグータッチ
だとしても気にせぬ噂マイベース
明日着る服を取り出す氷点下

広島市 田 桑 恵 子

ただいまの声と一緒に鎧脱ぐ
寒風にますます背なが縮こまる
寝つけぬ夜お猪口グラスの赤ワイン
おうち飲み居酒屋風に腕振るう

広島市 松 尾 信 彦

断捨離を終えて気になるニューモード
新しい自分に変える初詣
本心を晒して無念四面楚歌
すぐできるだからやらない独り者

尾道市 小 畑 宣 之

傘寿過ぎ読めても書けぬ字が増える
声を出し読むこと老いの健康法
目に感謝傘寿過ぎても週五冊
白黒をつけて生涯恨まれる

竹原市 土 井 輝 恵

死にたいと言つてた母の歳になる
七十歳未満ですかとTELがあり
押入れに座した通販掃除機よ
ブランドの服着せられた犬散歩

三次市 伊 藤 寿 子

生きているいや生かされているのだな
杖をつき家の廊下のリハビリ
運命と真正面から受けとめる
1歳の孫とヨチヨチ競争だ

府中市 岸 田 武

雪だより今日も喪中のはがき来る
妻の客勝手口から上がり込む
老友会温泉旅行また中止
杖ついて男は夢の欠片追う

山口市 中 前 幸 子

古代ロマン彷彿土器のひと欠片
夢空間にしばし漂うしゃぼん玉
蒼天へはらはら枯れ葉舞う挽歌
四次元へ翔ぶカクテルの酔いごこち

阿南市 小畑 定弘

唐津市 前田 廣幸

亡き人の不実きかさる通夜の席
薄味になってしまった冬至粥
マスクから自肅疲れの老いの息
ふるさとのニュースに箸を止めたまま

松山市 郷田 みや

憶測で言っても答出てこない

今日できる事を仕上げてオリオン座

生きています年に一度の年賀状

つぶやきが聞こえるスーパールの母

高知市 三谷 松太郎

本気でしょ終活などと騒がずに

年取って短気になって正義感

直言をずらせて訛る年の功

マラドーナ神の手もありさようなら

福岡県 本田 さくら

りんご届くつくった人の手紙添え

針の穴糸が迷って通らない

中村哲氏その生涯に学ばねば

忙中閑コーヒートチョコ二人して

唐津市 岩崎 實

やり遂げてかなわぬことも多くあり

えにしとは思わぬとこで結びつき

働いた指ですゴツゴツ男の手

原爆のボタンを押せば世界消え

加齢だと鏡も下す医者のお如
ローマ字名増えて紅白置き去られ
ブレーキを踏み違えたか第三波
吐いた息又吸わされる苦のマスク

宮崎市 黒木 栄子

母さんの思い一言噛み締める

産声の紡ぎ始める物語

どん底も喜びも知る母の背

マスターのむかし肴に飲む聖夜

沖縄県 禰 モト

幼な友スマホメールの再会に

百年の自分史綴り逝く従兄

秋場所に知事観戦をアツプ撮り

亡き父の弾き語る三味なまなまし

沖縄県 宮 すみれ

なまぬるい雨の匂いに目がさめる

まめまめに暮れの用事もクリアする

サラダ菜が雨土かぶり一休み

在庫品特典つけて何やかや

五所川原市 むらの ひとり

テープカット肩幅の慶賀なり

紫陽花の往生際を介錯す

在宅で折りたたまれた怖いパネ

振り返る知恵が欲しい窓の蠅

弘前市 高森 一 吞

プライドを心機一転脱ぎ捨てる
祭り好き跳ねなきヤ損とラッセーラー
「ふじ」たわわ実りの秋に撓む枝

和解など北の辞書には皆無です

宇都宮市 廣瀬 良磨

明日のため一杯の水を飲んでおく
コロナ禍に友の葬儀はオンライン
夕焼けを背負って今日も帰宅する
釜で炊くお焦げご飯が好きだから

東京都 高岡 弥生

GOTOでお店開拓できぬまま
インフルもさすがに負けるコロナには
人間の価値は果たしてどこにある
暑かった夏とコロナで年の瀬に

横浜市 加藤 佳子

生と死の分水嶺を歩く日日
度忘れを笑い飛ばして高い空
出て来ない単語夫の脳も借り
あるがまま老いの流れに乗ってみる

神奈川県 小田 幸子

家たずね故人しので散策す
友人の安否確認窓あかり
夫と犬呼びまちがえて苦笑い
はくの犬なぜか同時に目がさめる

岐阜県 喜多村 正儀

おおげさに弾けてほぐす固い自我
海鳴りに少し傾く砂時計
近道はなかった父のくれた地図

退院の窓から放つ千羽鶴

静岡市 渡辺 芳子

鬼は外コロナも一緒に出て行って
来年こそ後悔しない一年に
戦争はいい事なんて何もなし
気力が続かなくなる九十歳

浜松市 中田 尚

百歳へお付き合いするジェネリック
レントゲン明日をのぞいてみませんか
ひとつぶの米にいのちの重さ知る
水ぬるむ春をユニクロ買って待つ

名古屋市 山本 三樹夫

はやぶさ2生れた地球忘れない
途中下車道草酒にロマン湧く
ラブレター香るシャネルが憎らし
青信号歩道に危険秘めている

豊橋市 西郷 紀美代

ひと口を30回も噛む根気
波風が外からやって来て不穏
加齢だと触りもせずにいる主治医
捨てないでもつたいたいと4歳児

豊橋市 小松くみ子

初診ではアサイチに行きおヒルすぎ

踊る肉全部とりたいお湯の中

息子らの苦言聞きますす平和です

失敗も明日につなぐ糧とする

八幡市 武田悦寛

SLの音も溶け込む秘境駅

細胞が動き始める初日の出

午後3時定位置あたりのコーヒー

老い二人プラス思考をトッピンゲ

大阪市 東敏郎

好きな酒命を狙う悪魔かも

宿題すませホツとするパパとママ

ワンカップ忘れず買って墓参り

土筆摘み五本並べてドレミファソ

大阪市 石田孝純

覗いたら硝子のような自尊心

突っつけば反抗心が蘇生する

本音にも少し御世辞を混ぜておく

甘すぎるお世辞五臓にほろ苦い

大阪市 今村和男

開店のドタバタ見てた胡蝶蘭

居酒屋の小声で飲めと無理をいう

窓開けて炬燵に入る冬休み

動物園出来た時からグロリアル

大阪市 岡田恵子

ワンチャンス掴み損ねてまだ一人

人前では泣かぬと決めた見栄っ張り

誕生日くるたび螺子を締め直す

鍵穴にあわない鍵を持っている

大阪市 近藤風羅

ものもちが良くてあなたと添いとげる

聖徳太子大好きな人同世代

葛湯のみ少しほぐれた胸の内

さみしさをつい口にする夕まぐれ

大阪市 前川善之

老人に孫が来るのもお年玉

老人も金と健康有ってこそ

老人は金はいらぬとユニセフに

感染者若者だってかかります

大阪市 松田 總

総合俯瞰あなたに言って欲しくない

コロナ禍に自助おしつける無為無策

うつむいてのらりくらりと菅政治

内孫という言葉には差別あり

大阪市 中村峰子

びったりのことば見つかり霧晴れる

わが心ことばの中に溶けていく

山盛りのカイロを買った冬よ来い

探しものきつとあるはず家の中

大阪市 降幡弘美

マスクして証明写真撮っちゃった
休みの日ばかり早起きする子供
ゴキブリはきつと人間大キライ
爆笑を最後にしたのいつだろう

大阪市 宮本千恵子

ジングルベルが響いてこない十二月
メルケルさんの強い訴え心打つ
日本にもトランプ支持者いてたんや
パソコンテレビおまけに夫婦老朽化

泉大津市 助川和美

時短営業歓楽街の寒さ知る
丸くなった母の背中に感謝する
病院の予約が目立つわが手帳
妻のタンス流行りすたりの玉手箱

交野市 山野双葉

檸檬ですツンと尖って自己主張
お散歩の土産尾っぽに草の棘
優しさが重荷だったと告げられて
竹定親父の手になる我が名あり

河内長野市 穂口正子

わだかまり捨ててリズムを取り戻す
引きこもり思えば息子上出来だ
べらべらと軽い言葉が舌を出す
猫抱いて妻も優しい人になる

堺市 羽田野洋介

間食を減らすと旨い夜の酒
気にすればますます増えるブレッツシャー
押入れを見れば性格よく分かる
自動ドアに慣れて時々ぶつつかる

堺市 古川光雄

食事する嫌いなものから先に食べ
余命ないコロナの後はどう生きる
効いた感覚ないけど今日もサブリのむ
領収書見直し昨夜後悔す

吹田市 西沢司郎

決断は国だ知事だと擦り合う
見事です天気予報の命中度
無観客気合が抜ける本命馬
おもてなしどうなるものかと病む五輪

高槻市 三谷白黒

おかえりの一言聴いて疲れとれ
満点の人間なんて付き合えぬ
余るのに廻って来ないお金です
インフルもコロナに負けているみたい

豊中市 荒木郁子

メタセコイア二人の世界並木道
お隣りの雨戸が開いて安堵する
近所でも車で五分過疎の村
コロナ禍で新生活は式も無く

豊中市 松田 蟻日路

ゴネたつた落し所を探りつつ
紅葉公孫樹俺何色で散るのなら
月光仮面カブに跨つてた昭和
身内とて遠きに有りて思うもの

寝屋川市 坂本 ミヨノ

おばあさんぼろぼろ落とすにぎりめし
手術後に安心と聞き手を合わす
私振られため息キュン苦しいです
マスクしてとてもカラオケ歌えない

寝屋川市 廣田 和織

底の底沈めばきつと浮いてくる
菌が欠けて食いしばることしなくなる
過去ばかり追って明日を見失う
幸せはそれぞれでも自分色

羽曳野市 黒木 ひとみ

青空に映える黄金銀杏の木
恙なく越えていきたい八十路坂
紅葉をめぐる人波コロナ呼ぶ
柊の刺ある葉にも清き花

東大阪市 秀 爺

世の中はボケた主水の処世術
出る杭は叩きのめして和の日本
本能寺令和の今も要注意
天敵の上司いたからがんばれた

大阪府 大浦 福子

初句会今年マスクで「おめでとう」
初春をリモコン手元寝正月
映画館手も握れずに初デート
初恋の君よ元氣かしあわせか

神戸市 青山 ひろし

守りから攻めへ葉を止めてみる
台所男やもめの小宇宙
妻に内緒母は黙っていてくれる
引出しの奥に昭和は詰めこまれ

神戸市 石川 克美

面会はガラス戸越しの十分間
この寂しさ老いを知らねば解るまい
気象庁生物観察やめないで
また来るの お正月はもういいわ

神戸市 輿水 弘

やはり勘パチンコ競馬惚け防止
少しずつ忘れるテンポ早くなる
やがてくる別れの言葉ひねってる
一手終え五時間ぶれず酔うしびれ

神戸市 櫻井 崇史

情けない徒歩五分でも筋が張る
鬼ごっこ孫の逃げ足速すぎる
約束のオモチャ探して足が棒
予定表何もないのに一度みる

尼崎市 山田厚江

アクセルとブレーキ同時には踏めず
だんだんと嫌な事から忘れてく
カワイイと言えるお腹も五歳まで
自粛と休み続きとうとう引き籠り

伊丹市 延寿庵 野鶴

価値観を計りにかける人の性
ありふれた一日だった安堵感
咳ひとつ気遣う朝のターミナル
深呼吸明日へ生きるネジを巻く

伊丹市 平井富夫

政治家がマスコミ避ける何かある
所帯費の無駄を削れと酒煙草
微熱出たコロナ検査の結果待ち
票は票飲み食いタカリ選挙です

三田市 生田えい子

肩書きも取れて大きく深呼吸吸
リモートで脳まで緩む休み癖
機器おんちスマホが重くもて余す
おしゃべりをしすぎぐったり里の家

三田市 木村マユミ

鐘の音静かに何かを告げてくる
人生も長編小説のようだ
限らない探究心で夢を追う
なおざりに過ごした日を見つめ直す

三田市 幸田厚子

最短距離マスクは今のワクチンだ
晩秋の夕影映える武庫堤
コロナ禍でしつかり相場上がる金
退屈と見せかけ猫も思案中

三田市 馬場貴美江

近未来宇宙漫遊夢でない
秋日和迷う自粛の紅葉狩り
頷くがマスクの声は聴きづらい
同じ屋根嫁でなければよい奥さん

丹波篠山市 澤良子

歳月が昭和の歌で甦る
お荷物にならぬ生き方模索中
夫婦でも一つや二つある秘密
父さんは本気に怒りあとケロリ

丹波篠山市 横溝安子

新コロナ肘と肘とでごあいさつ
読み聞かせさきに眠るのはバアバです
子も孫もボロボロ絵本お気に入り
落葉ふみ二人よりそう散歩みち

西宮市 高瀬照枝

部屋の中澄んだ空気と濡れタオル
さあ朝だ日を浴び散歩変り無い
夫忍ぶ何でもやれると言いい残す
精一はい生きたどん底今笑う

奈良市 尾 畑 なを江

言い訳を聞くと疲れる肩が凝る
お月様祈る想いと独り言
体操に貧乏ゆすりも入れてみる
何気ない話の中に本音有る

奈良市 仲 西 賛 郎

デジタル化古いそろばん大欠伸
旅行業元の会社が気にかかる
あの会この会みんな消えてく飲み会日
がんこ者いまだスマホに代えません

生駒市 響 庭 風 鈴

たぶんそう求めているのは自分だけ
はやぶさは拍手喝采されたのに
よくやったほめられもせずヒト科主婦
いかり肩生まれつきですなぜかしら

生駒市 児 玉 規 雄

亡き友に又逢おうぜと夢の中
無観客それでもやるか夏五輪
奈良公園鹿がようこそおじぎする
室内で恵方に向けて柏手と

奈良県 室 田 行 久

言い分を黙ってうなずき何もせぬ
核心を突けば記憶にないと言う
捨てられぬ期限の過ぎた蟹缶は
種の保存カマキリのオス命がけ

和歌山市 北 原 昭 枝

雪掻きの苦労は知らぬ都会の子
遠いひと想いだして雪しぐれ
あのひとを待てば心に積る雪
底冷えに熱爛しみる雪降る夜

和歌山市 佐 藤 ま き

乾燥の冬ウィルス活性の季節
医療崩壊おきないように願う日々
バーチャル旅ダム感激の虹かかる
雄大な立山アルペン黒部ダム

和歌山市 まつもと もとこ

煮込んでも夫なかなか崩れない
灰汁があるそこも美味しいふきのとう
お喋りなカラスの口に白マスク
流れ星二人を繋ぐタイムラグ

和歌山市 鍋 嶋 澄 子

妹に見せてやりたい燃ゆる秋
三姉妹楽しく笑うゆめ刹那
高野山弥陀のひかりに笑む紅葉
手紙書く思い面々母を恋う

和歌山市 西 川 千 鶴

隙のない男にちゃちゃを入れてみる
ダイエットしても余命は知れている
吐き出せぬ疑惑が喉で思案する
イケメンに見とれて駅を乗り過ぐす

岩出市 村中悦男

高齡を小さな欲で叱咤する
厚着をしてもコロナの話寒すぎる
老介護妻の完食嬉しくて
指先でとらえた不安不整脈

和歌山県 三枝眞智子

ローソクの灯りが民話抱き寄せる
万緑に心も溶けてリフレッシュ
冷汗を覚悟でせまるプロポーズ
過疎守るような一生野辺送り

和歌山県 森下よりこ

検査値はいつも何かが異議となえ
翔猿が面白くする大相撲
柿紅葉見慣れた景色変えて見せ
時代劇にチャンネル変えるコロナの世

鳥取市 大前安子

温もりのことばを奪うコロナ禍よ
コロナ禍へ籠を外さぬよう歩く
母の技一つ出来るか柚を煮る
久し振り向こうの窓と口パクす

倉吉市 伊藤嘉昭

好きですと言われた昔懐かし
この梅は皮だけで生き花も咲き
淋しかな友の訃報が続く冬
待ち人の来ない代りかライン来る

倉吉市 大羽雄大

コロナです今出番です鐘馗さま
GOTOの神社巡りで疫払う
靴下の中で残念赤い爪
締切日追って重石伸し掛かる

倉吉市 堀かずこ

丑年はのんびりゆこう幸せに
わたくしの願いはひとつ健康を
苦勞した後は幸せきつとある
坂道を上げれば夕陽近くなる

境港市 藤原久直

丸腰で過ごせる日本平和です
大腸の掃除済ませていざカメラ
目覚ましは毎朝五時のバイク音
ピカピカの公衆トイレ街の顔

鳥取県 橋谷静江

母の味近づけたからまず安心
お洒落など出来なくなつた腰曲がり
暗算がすぐに出来ない惚けかいな
スマホなど持たぬ夫へ困りはて

予告

第27回川柳塔まつり

日時 令和3年10月2日(土)
会場 ホテル・アウイーナ大阪

誹風柳多留一二篇研究 6

高野 範雄・山田 昭夫

小栗 清吾・細井 龍夫

伊吹 和男

清 博美

45 でばじやれるふりで袂へふみをいれ

伊吹 ではじやれるは、ふざける。付文を手渡して、その場で付き返されたら、面目丸つぶれである。だから、たわむれた振りをして、袂へそつと入れるのである。

清 賛。 とい狂ふふりて袂へ文をいれ 二二

46 黄ひろうとなそて張角つゝむなり

高野 張角は、中国後漢末に起こった黄巾の乱の首謀者。彼らは皆黄色な絹で頭を包んだので黄巾の族と呼ぶ。張角は、また、張形の異称（『川柳大辞典』）。雨譚註に、「黄巾の乱の主将」。

句意は、

①張角は黄巾賊の首謀者であるからもつと上等の布である天驚絨で、頭を包んでいたに違いない。

②長局は水牛や牛の角で作った上等の張形を持つっており、天驚絨に包んで大切にしていたに違いない。

③張形のような名前の黄巾賊首謀者張角は、当然張形を持つていたであらう。頭を黄色の絹で包んでいるのだから、貴重な張形は、もつとい布、天驚絨で包んでいたに違いない。

の三説が考えられるが、礎稿は①とします。

黄色成ル頭巾か事のおこりなり 明五宮3

山田 賛。雨譚註で可ならん。

小栗 問題は「張角」が「張形」の異称なの

か、そうとしてもどれ位ポビュラーだったかということ。「張角」といえば、即ち「張形」とピンとくるならば、句意は、「張形がビロウドで包んである」という情景描写を表にして、裏に「黄巾の乱」を趣向として入れたということではないと思う。しかし、柳句中、「張角」はこの一句のみ、『川柳大辞典』もこの句を引くのみ。文献を漁ればあるだろうが、私の知識では張形の句という自信がない。消去方で①とします。

清 唐突な句だ。作者は己の知識を自慢したかったであろう。勿論、張形は関係ない。

47 遠ッばしよりをするやつは玉もなり

高野 金毛丸尾狐のこと。

後シテ「今は何をつつむべき、天然にては斑足太子の塚の神、大唐にては幽王の后褒姒と現じ、我が朝にては鳥羽の院の玉藻の前とはなりたるなり」（謡曲「殺生岩」）

このように、三国を股にかけ活躍し、行動範囲の広いのを「遠走」と言うのであろう。最後には安倍泰成に正体を見破られ、下野へ逃げ、殺生岩となる。

女一正三国をさわがせる

山田 遠走は、「遠い所まで出掛けること。遠方に走ること。遠くに逃げのびること」(「日国」)。

礎解も考えられそうですが、「安倍泰成に正体を見破られ、下野へ逃げ」ではないでしょうか。

那須野迄十二重の俣て飛

二二6

くわい／＼のくわいと下野さしてとび

一四18

小栗 賛。「遠っぱしより」は諸説の通りだろが、句の構成としては「狐は遠走りするものである」との前提がほしいところ。だから玉藻は狐であると……。だが、手許の資料では、せいぜい「たとえづくし」の「狐は百里続く国ならでは栖まず」ぐらいしか発見できず。

伊吹 賛。手持ちの辞書にも、「狐は百里続く……」は、だから四国にはきつねが棲まない、とありました。なんとなく、この諺から遠っぱしより結びつくような気もします。それと、天竺から日本、都から下野のどちらかに限定するのではなく、両者を指して遠っぱしよりを言っているのだと思います。

清 賛。世界をまたに、の意かと思う。

48 あわめしが出来ると元トの旅人なり

高野 唐の沈既済の小説「枕中記」の説話から栄枯盛衰の極めて儚いことを例えて「邯鄲の夢」とか「一炊の夢」「黄梁の夢」という言葉が生まれた。それを詠んだ句。

謡曲「邯鄲」では、「栄華のほどは、五十年、さて夢の間は粟飯の、一炊の間なり」。

平人に成た時あわめしか出来 明七松3
い、ゆめを見てあわめかまづくなり

天七825

小栗 賛。廬生は楚国の羊飛山への求道の旅の途中。

清 賛。

49 母の留守どじやうを買ってしらん顔

高野 ①母親の留守に、息子は泥鰌を買って食べたが、食器もきちんとしまひ込みしらん顔。②母親の留守に泥鰌を買って台所に置いてある。母親は泥鰌が怖いため台所へ寄りつかずしらん顔。息子は母親の困惑した顔を見たい為しらん顔。②とします。

冬中に無汁母の留守に出来 安六礼2
としやう汁女房となりへいつて居る

安九礼2

山田 ①でしよる泥鰌は精力が付き、結構うまい物だが、その形状や汁にする時、鍋に生きたまま入れ、煮殺すから女性には人気が無い。

小栗 母親がいると可哀想のなんのとうるさいので、留守の間に。

清 賛。勿論①です。

50 切もくさ大イハ大方つれのこり

高野「切艾」は、紙で巻いて細くした艾を、細かく切ったもの(「江戸語大辞典」)。「大方」は、物事のほぼ全体。大体。大部分(「広辞苑」)。大きい方は、当然火力が強く熱いのでなかなか売れない。小さい方から売れ、大きい方はたいいてい売れ残ってしまう。

子の曰むしが通して切りもくさ

八16

山田 賛。大はいかにも熱そうですものね。

小栗 賛。現在も続いている「釜屋もぐさ」のホームページによれば、切艾には「大」・「中」・「小」があり、「中」は米粒大らしい。清 賛。人情である。

英語 de Senryu ⑪⑩

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim Horne

せんべいの薄くなつたを鹿も知り

*Senbei crackers getting thinner
deer in Nara park
know it well*

文楽人形みな寒そうに寒そうに

*Bunraku puppets
all look like
they are cold*

cracker 薄いビスケット *getting thinner* ますます薄くなって *deer* 鹿 *park* 公園
know 知る *well* 充分に *puppet* 操り人形 *look like* ~のように見える *cold* 寒い

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句⑤⑩ 神田惣介の日英ハイク世界

大学の先輩である神田惣介氏より日英俳句作品と英語俳句の作句法を記した『私の人生と英語俳句：楽しき人生の為に』(2013)を頂いた。神田氏は母上の影響で俳句を初めて37年。そして50代より英語俳句にのめり込んだ。カリフォルニア州立大学ロサンジェルス校での第一回環太平洋ハイク大会にご一緒させていただいたことがある。企業人として海外を渡り歩いた日々、故郷京都に足を運んだ時の感慨、退職後日常生活を映す作品など、まさに(楽しき人生の為に生まれた作品)が魅力の作品を紹介する。

アマゾン横切る翼に 望の月

(the full moon/ shining beyond the plane wing/ across the Amazon)

新涼やタップ踏みたる ウェイター

(autumn chill/ one waiter/ tapping)

春雨や裾上げ舞妓 急ぎ足

(quick steps in spring rain/ maiko raised the hem/ of her kimono)

転居して知る思慕強し京の春

(moving from/ longing for it/ Kyoto Spring)

精糠の妻コスモスに埋れ立つ

(after many hardships/ now wife stands deep/ in Cosmos fields)



追悼

加川靖鬼さん

藤井 宏 造

十月二十八日、園田川柳会の開催中、スマホが鳴り靖鬼さんの娘さんから、訃報を知らされました。享年八十八。しばらく絶句。

靖鬼さんとの付き合いは、十年余りになります。尼崎川柳大会のスタッフとして、参加してからは、特に親密になりました。

靖鬼さんは、高齢にもかかわらず、フットワークが軽く、行動力のある人でした。「川柳あまがさき」の会場を探したり、「川柳たちばな」、「ひまわり川柳教室」の設立にも、尽力をつくされました。また平成二十八年三月からは、「川柳ひろば」の会長として、頑張つてくれました。

靖鬼さんの句を紹介させていただきます。

でこぼこの路を歩いてきた踵

耐え忍ぶことに馴れてる足の裏

切り取り線の上に立つてる僕の脚

落ち葉みな使命果した顔で散る

ハルカスから覗く地獄も極楽も

恙無く生きて傘寿の二人傘

このような句も詠まれています。

半夏生タコは受難の日と知らぬ

虫の飛ぶ道を知ってる蜘蛛の網

ロールキャベツの口を押えた爪楊枝

花筏メダカがあとを押している

フグ提灯ふくれ面したまま吊られ

靖鬼さんは猫がとっても好きでした。

うっかりと猫に洩らした内緒事

猫のおしゃべり妻が通訳してくれる

妻の留守猫に見張りをされている

膝枕うつとり猫が寝ています

靖鬼さんは浪速の真ん中に生まれ、そ

して何よりの自慢は、子供の頃、中島生々

庵師の病院に通い、生々庵先生に診ても

らったと、うれしそうに話されていました

た。また靖鬼さんは物知りで、蛸の雄雌

の見分け方から、大阪の南北の道路を「筋」

と言ひ、東西を「通り」と言う。大城を中

心に丁目の若い番号が付けられている等、

色々とたくさんのことを教えて頂きました

た。きっと天国でもあちこち動き回り、

情報を集めていると思います。後から来

た後輩たちに、教えて回ることでしょう。

それでは最後に

ズケズケと大阪弁が温かい

靖鬼さん色々とお世話になりました。

ありがとうございました。

辞世の句です。

ただ感謝 末期の水が齒に沁みる

ご冥福をお祈りいたします。 合掌

愛染帖

新家 完司 選

(投句274名)

百までの予定を詰めて磨吊る

大阪市 岩崎 公誠

(評)何歳まで生きられるかは神のみぞ知る。ならば、目標を大きくしっかり掲げて、澆刺とした日々を送らねば損ではないか。

黒石市 北山まみどり

舌先は忘れない季節感

(評)季節の移ろいは「気温」や「風の音」「葉の色」など、五感それぞれに伝わってくるが、何よりも強く感じるのは匂の味。

鳥取市 上山 一平

ゴミ出しが今日の元気の糧になる

(評)心と身体は繋がっていて、じっとしていても心も萎んだままである。積極的にゴミ出しをするだけでも元気が出てくる。

大阪市 金川 宣子

主婦業の辞職届は誰が受理

(評)家族の為に黙々と働いてきたが、今年でお役ご免願いたい。さて、誰が受理して「お疲れさまでした」と労ってくれるのか？

生真面目な折り目で判る母の鶴

神戸市 横田 次郎

(評)誰に対しても何事に向かっても折り目正しく誠実だった母。私もそのように生きたいと思うのだが、なかなか難しい。

堺市 矢倉 五月

ウィッグを三度買い換え帽子に戻る

(評)大きさは色を変えていろいろチャレンジしてみたが、。買い物に出かけるぐらいなら手早くスッポリ隠せる帽子がベスト。

神戸市 山崎 武彦

居酒屋の吐息通天閣の赤

(評)新型コロナウイルス感染拡大を警告して通天閣に「赤信号」が点灯。新世界のみならず全国の居酒屋さんの吐息の象徴だ。

大阪市 津守 柳伸

燃えるもの探す自肅の四畳半

(評)自肅が続くと心身ともに萎えてくる。何か情熱を注げるものを探さなければならぬが、それはやっぱり「川柳」ではないか。

弘前市 福士 慕情

ちちははの義理を果たしに行く葬儀

(評)自分とは深い付き合いのなかった故人。だが、両親からは何かとお世話になったことを聞いている。義理を果たしてこそ男！

大阪市 江島谷勝弘

気になるな柩に釘はもう古い

(評)結婚祝いの水引は「結び切り」とか、

出棺の前には「柩に釘を打つ」など、「まだ言っているのか」と、A I が嗤っている。

名古屋 富田 末男

癖字でも器の人は味がある

高槻市 島田千鶴子

やっと打ったLINE五秒で返事くる

寝屋川市 廣田 和織

目には目で菌には入れ菌で立ち向かう

箕面市 中山 春代

お菓の専用湯呑み決めている

弘前市 稲見 則彦

吹雪く日もガラガラ窓を開ける妻

橿原市 居谷真理子

車にも目付きいいのと悪いのと

香南市 桑名 孝雄

紅葉の中に枯葉の僕がいる

茨城市 細田マキコ

冬仕度しまい忘れた恋心

神戸市 山根 弘華

息抜きも手抜きも恋もしています

羽曳野市 黒木ひとみ

愛大がとりもつ縁で恋実る

鳥取市 福西 茶子

初恋の名前そろそろトンド焼き

寝屋川市 伊達 郁夫

することが未だありそうで眼鏡拭く

堺市 内藤 憲彦

お新香に醤油をかけて怒鳴られる

和歌山市 柏原 夕胡

子猫来てやとバアバになれました

桜井市 安土 理恵

至福です猫とコタツのゆるい午後

神戸市 上田 和宏

年金日犬を一匹買いに行く

鳥取市 副井ゆたか

胃の中のエノキ時々切除する

八尾市 高杉 千歩

日本語も危なくなつて車椅子

豊中市 水野 黒兎

クラスメイト一人もいない九十四

落ち着ける人それぞれの慣れた席

新鮮を求めすぎて踊り食い

寝屋川市 川本 信子

辛せと思えるように比較する

医療従事者に申し訳ない大欠伸

米子市 竹村紀の治

ひとりでは嬉しくもない耳掃除

寝込んだと聞けば身内の回覧板

和歌山市 まつもととしこ

泣き虫な女は海へ電話する

幸せのワイン百円サイゼリヤ

唐津市 山口 高明

潤沢な予算原発交付金

亡命者出ない豊かな日本国

交野市 山野 双葉

それぞれの想いを胸に冬のジャズ

松江市 石橋 芳山

ウエストも金にも余裕ありません

松山市 大内せつ子

ほっただけ赤くなるのねファンヒーター

堺市 奥 時雄

お歳暮はビール行ったり来たりする

大阪市 大川 桃花

何故と問う間もなく鶏は殺される

倉吉市 牧野 芳光

影の薄い私についてくる影よ

バーチャルの世界になつていくようだ

佐賀県 真島久美子

寂しくはないとわざわざ書いている

不完全燃焼なのに笑っている

弘前市 高瀬 霜石

殴られてみたいお厚い札束で

散骨希望悪友どもの合言葉

岡山市 大石 洋子

高枕肩を凝らせて悪夢見る

高枕首筋ひやし風邪を引く

大阪市 樋口 眞

口喧嘩ふた言ほど先に引く

補聴器は一人の話しか聞かず

鳥取市 田中 天翔

困ったらスマホをググるいい時代

電動車輻を利かせる世が見たい

大阪市 高杉 力

モデル並みのポーズを決める試着室

鳥取市 田賀八千代

試着室私一人のファッションショー

広島市 松尾 信彦

我が日記慮りが支配する

大阪市 田中 廣子

リハビリのノルマ達成昼寝する

唐津市 仁部 四郎

病院の待合室で会う羅漢

大阪市 平井美智子

ポイントに釣られて慣れぬペイ払い

堺市 坂上 淳司

後6年とガラケー余命告知され

南あわじ市 萩原 狸月

がんばりや無理するなよの匙加減

東大阪市 秀 伶

美しい嘘が言えたら一人前

鳥取市 前田 楓花

水鳥飛来おもしろくなる水面

三田市 北野 哲男

久しぶり朝ドラで聞く河内弁

藤井寺市 鈴木いさお

興奮してくると河内弁が出る

安来市 原 徳利

踊り食いをする焼きたてのたい焼き

三田市 上田ひとみ

ユーミンも安倍さんだって同い年

池田市 上山 堅坊

米寿きてまだまだ駄句を追加する

岡山県 藤澤 照代
一度より千度読まれる句を目指す

芦屋市 新阜 義明
多句目指し川柳工場と呼ばれた

津山市 高橋由紀女
川柳を辞めたら出来る事が無い

加西市 山端なつみ
延期中止投句で終わる令和二年

三田市 村田 博
バーボンのダブルで酔えぬ全没日

三田市 多田 雅尚
富岳から飛沫の距離を教えられ

米子市 後藤美恵子
マスクした店先の猫客招く

広島市 岸本 清
酔えませんマスク付けたり外したり

豊橋市 西郷紀美代
コロナ禍の回転寿司に蓋が付く

河内長野市 梶原 弘光
黙々と食事会終え即マスク

今治市 永井 松柏
糞虫になってコロナを遮断する

香芝市 山下 純子
世はコロナせめてアニメで鬼退治

長岡京市 山田 葉子
ウイズコロナ遊び足りない歳の暮れ

越谷市 久保田千代
コロナ禍の駅を流れる無彩色

東大阪市 北村 賢子
ふる里をいよいよ遠くするコロナ

大阪市 宇都満知子
三密を楽しむような吹き溜まり

豊中市 松尾美智代
三密を避けてプールで平泳ぎ

神戸市 松倉 正美
3波来て通天閣が真っ赤っか

神津島 宮 すみれ
友寄ればマスク色々品定め

奈良県 渡辺 富子
お出かけへマスクと帽子ノーメイク

三原市 鴨田 昭紀
マスクしていないと悪人にされる

松山市 柳田かおる
マスクの中で唇が老けている

大阪府 高木 道子
マスクして令和の時世斜め見る

西宮市 福田 正彦
コロナ禍の策が唯唯自覚せよ

八王子市 川名 洋子
赤い糸ゆるめて二人家籠り

箕面市 広島 巴子
自粛中家の中だけ大掃除

大阪市 森 廣子
呼吸する事さえ怖くなってくる

香芝市 大内 朝子
ワクチンが頼りだけれどちと怖い

横浜市 菊地 政勝
怖いのはコロナ慣れた若い人

和歌山県 森下よりこ
年中自粛一人ぐらしの農作業

神戸市 能勢 利子
コロナ禍で料理がうまくなった婿

神戸市 敏森 廣光
夕焼けが悲しく見える歳になり

唐津市 岩崎 實
耳遠く音の大半逃げてゆく

弘前市 高森 一吞
これくらい思つて転ぶ老いの足

福井市 伊藤 良一
従うか迎え討つかと悩む老い

河内長野市 穂口 正子
止まらない鏡見るたび老けている

唐津市 坂本 蜂朗
予定外妻の老化の急降下

岡山市 丹下 凱夫
年寄りとみくびっているサル・カラス

奈良県 中堀 優
婆さんのあと影のごと付いて行く

神戸市 山口 光久
今回は最後になるか年男

奈良県 安福 和夫
目標の白寿を茶寿に変えました

尼崎市 永田 紀恵
居酒屋の硬い腰掛け好きな尻

枝葉つけ噂をアテの屋台酒
黒石市 石澤はる子

採卵場の鶏のごと立呑み屋
大阪市 石田 孝純

胃の形思い浮かべて飲んでる
土佐清水市 辻内 次根

一合で溶けてしまった罪意識
枚方市 丹後屋 肇

わたし癖呑むと傾く殿方へ
大阪市 岩崎 玲子

酒飲むといつも下五で蹴蹴く
三原市 笹重 耕三

はしこ酒今は無理だと欲をオフ
鳥取市 谷口回春子

退院後経過花丸酒二合
豊中市 齋藤奈津子

割り勘の顔ぶれ見れば皆酒豪
三田市 谷口 修平

壁で切る自由も良しや一人酒
五所川原市 むらのひとり

煩惱を閉じ込め一人コップ酒
大阪市 岡田 恵子

果ごもりを桃源郷とするお酒
札幌市 三浦 強一

内緒だが私ほんとは泣き上戸
箕面市 大浦 初音

自分宛書いた節酒の誓約書
高槻市 松岡 篤

あと何度休肝ルール破るやら
河内長野市 村上 直樹

わだかまり酒が飲めたら溶けるかも
岡山県 高岡 茂子

大酒飲みの父は卒寿を越えて生き
羽曳野市 吉村久仁雄

いいことが郵便受で待っている
鳥取県 斉尾くにこ

自販機の缶コーヒで暖をとる
和歌山市 古久保和子

加齢の仮面被ってやってくる病
堺市 村上 玄也

バレそうになると病気になる議員
枚方市 藤田 武人

ご機嫌の斜めが顔に書いてある
鳥取市 岸本 宏章

「疫病神」「腐れ縁」だと半世紀
大阪府 大浦 福子

喧嘩が終わったら晩ごはんにする
米子市 後藤 宏之

君と僕いい塩梅のまぜご飯
大阪市 内田志津子

いいふうふの日努力をしよういい夫婦
豊橋市 小松くみ子

二人だけの鍋もいいなあ十二月
松山市 郷田 みや

北極星動かぬことが価値至上
美作市 岡本 余光

久しぶり明るいニュースはやぶさ2
神戸市 近藤 勝正

はやぶさが子供の未来夢運ぶ
鳥取市 山下 凱柳

お帰りの万歳りゆうぐう玉手箱
京都市 都倉 求芽

嵐ロス番組すべて録画する
羽曳野市 宇都宮ちづる

脱ハンコせて花押は残したい
池田市 倉本 一弥

ふるさとの風は透明無口です
伊丹市 延寿庵野鶴

鍋みがく今日も一日青い空
岡山県 田中 恵

落ち葉掃く栄枯盛衰ちりとりに
川西市 山口 不動

飼猫が拗ねて横顔見せている
奈良市 加藤江里子

私ひとりの指紋なのです千羽鶴
和歌山市 松原 寿子

ランドリー文句も言わず下着まで
浜松市 中田 尚

プレゼントは何 ホームにサント来るらしい
大阪市 宮崎シマ子

死に際にボケず言えるか「ア・リ・ガ・ト・ウ」
宝塚市 丸山 孔一

共選欄

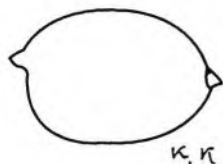
檸檬

檸檬

抄

(薫風書、カットとも)

(投句349名)



「ゆらゆら」

石橋

芳山選

ゆらゆらと恋のフェロモン出てる背な
わたしよりも稼ぐワタクシの尻尾
呑み切るか明日にするか揺れている
ゆれ動く私の中の水たまり
ゆらゆらと遠い記憶がゆれている
ハルカスの上層階の窓掃除
パイパイを言って二年も過ぎたのに
ゆらゆらと鬼火が燃える恋でした
どちらかに決めることなどたぶん無理
再会へまだ決心が定まらぬ
目減りする預金と寿命やじろべえ
乗りますか僕の作った笹舟に
困るなあ札束そない積まれたら
ボトル空き天動説がしやしやり出る

鳥取市	加藤	茶人
弘前市	高瀬	霜石
米子市	竹村紀の治	
大阪市	若本	安代
京都府	清水	英旺
堺市	坂上	淳司
鳥取市	福西	茶子
笠岡市	藤井	智史
三田市	上田ひとみ	
藤井寺市	鈴木いさお	
岡山県	藤澤	照代
安来市	原	徳利
大山市	金子美千代	
三田市	村田	博

「ゆらゆら」

古今堂

蕉子選

追隨がゆらゆら揺れる昨日今日
湯気の中枯葉と入る露天風呂
あいまいな問いに戸惑う答案紙
ゆらゆらとしてる間は大丈夫
免許返納わかってるがまだともう
ゆらゆらと話を逸らし逃げ切る気
ゆらゆらと白い乳房の仕舞風呂
ゆらゆらと揺れて下車駅まちがわず
ロウソクの灯り途切れぬ震災忌
ゆらゆらと記憶の軸が定まらぬ
言うべきか揺れる私のお節介
水溜りきっちり避けて千鳥足
妹のブランコ揺らす姉の風
ゆらゆらと揺れた瞬間腕の中

大阪市	山本加お里
羽曳野市	宇都宮ちづる
岐阜県	喜多村正儀
大阪市	榎本日の出
香南市	桑名
堺市	村上
和歌山市	定松
大阪市	笠嶋
大阪市	金川
米子市	妹能令位子
豊中市	松尾美智代
岡山県	藤澤
宮崎県	黒木
大阪市	榎本
	舞夢

引力に逆らえなかつたか浮気	枚方市	栃尾	秦子
ドングリの波紋にゆらぐ天守閣	岡山市	丹下	凱夫
あちこちへ視線が揺れる好奇心	奈良市	山本	昌代
ハムレットはたまたドンキホーテ型	和歌山市	西川	千鶴
着地点目指して飛んだ落下傘	防府市	坂本	加代
午後の日を浴びて睡魔が押し寄せる	可児市	板山まみ子	
カーテンと風の奏でる円舞曲	河内長野市	中島	一彌
ゆらゆらとしてはならぬぞ座標軸	鳥取市	山下	凱柳
ゆらゆらのバストは疑似餌だったかも	明石市	穂谷	和郎
就職も結婚もせぬ独りっ子	宝塚市	太田としお	
シャボン玉ゆらゆら故郷へ戻る	三原市	笹重	耕三
ゆらゆらとするがぶれない青レモン	海南市	小谷	小雪
ゆらゆらと手の鳴る方へゆくこころ	鳥取市	倉益	一瑤
ぶら下げた金にゆらゆら寄る汚職	堺市	古川	光雄
体調に合わせうゆらゆら生きてます	大阪市	大川	桃花
半世紀レム睡眠の夢のなか	鳥取県	斉尾くにこ	
煩惱を静かに笑う和蠟燭	大阪市	森	廣子
ゆらゆらとぐらぐら分ける震度3	三田市	多田	雅尚
ゆらゆらと今日一日を何としよう	八幡市	今井万紗子	
ハンコ押す時にゆらゆらする男	高槻市	松岡	篤
ゆらゆらゆら片足立ちがもうあかん	長岡京市	山田	葉子
簡単に妥協はしない垂れた首	黒石市	北山まみどり	

引力に逆らえなかつたか浮気	枚方市	栃尾	秦子
ゆらゆらと癒やされに行くくらげ館	上尾市	中村	伸子
ゆらゆらと鶴匠の技の綱捌き	名古屋市	山本三樹夫	
首振るとめまいを起こす僕の脳	大阪市	江島谷勝弘	
かううじて女の意地で立っている	松江市	藤井	寿代
結論の話になるとゆれる奴	寝屋川市	岡本	勲
休校で子らの情緒が揺らいでる	奈良県	安福	和夫
一人鍋または水菜を持て余す	佐賀県	真島久美子	
浮遊する水母はまるでエイリアン	枚方市	藤村	亜成
ゆらゆらとスイッチバックする八十路	三田市	堀	正和
ゆらゆらはあなたと会ったあの日から	大阪市	岩崎	玲子
才能へ嫉妬がゆらり点火する	横浜市	加藤	佳子
頓堀の灯ゆらゆら恋しお聖さん	箕面市	広島	巴子
遊行期なんとか杖を持たず行く	神戸市	みぎわはな	
お灯明揺れてあなたは居る確か	松山市	宮尾みのり	
ゆらゆらとインクも匂い立つ新書	大阪市	寺井	弘子
飛花落葉みな風になり蝶になり	河内長野市	坂野	澄子
我が命口ウソクの火のどのあたり	香芝市	大内	朝子
ゆらゆらと徘徊ぶらぶらと散歩	岡山市	工藤千代子	
ゆらゆらと道行きの風待つ木の葉	大阪府	高木	道子
空き家の庭 揺れてるからすうりの朱	和歌山県	森下よりこ	
ラストダンス黙って揺れてるだけいい	桜井市	安土	理恵

ゆらゆらと空想の視野全開に

本能のかたちで揺れているピアス

切り取り線の上をゆらゆら散歩する

しなやかに揺れて風向き確かめる

女ごころゆらゆらゆれて嫁ぎます

欲深い街によく出る蜃気楼

浮遊する水母はまるでエイリアン

ゆらゆらと長き昆布や喜望峰

揺蕩うてゆこうか老いの二人連れ

木漏れ日が揺れてベンチで漕ぐ小舟

湯煙の中でゆらゆら回想す

揺れるのは地震血圧貧血か

ゆりかごに重なつてゆく軽い眩暈

海月のゆらりこんなはずではないと言う

肝心な時にゆらゆらする記憶

三日月にぶらんこ架けて春の夢

養虫が風の形で揺れている

いつまでもゆらゆらしてるこの頭

ゆらゆらと灯りまつりの幻想美

味方かい敵かい ゆらゆらとするな

どうしても目が胸元にゆくんです

かろうじて女の意地で立っている

越谷市 久保田千代

佐賀県 真島久美子

鳥根県 伊藤 寿美

豊橋市 西郷紀美代

箕面市 酒井 紀華

岐阜県 喜多村正儀

枚方市 藤村 亜成

尾道市 小畑 宣之

大阪市 平井美智子

豊中市 齋藤奈津子

和歌山市 柏原 夕胡

八尾市 田邊 浩三

黒石市 石澤はる子

松山市 大内せつ子

東かがわ市 川崎ひかり

神戸市 奥澤洋次郎

寝屋川市 伊達 郁夫

大阪市 榎本日の出

尾道市 小川 道子

神戸市 米田利恵子

神戸市 敏森 廣光

松江市 藤井 寿代

陽炎が話があると呼んでいる

ゆれ動く私の中の水たまり

ハルカスの上層階の窓掃除

売地の職寂しく揺れる過疎の町

i P S ゆらゆら神の領域へ

子と住むか独りでいるか揺れる胸

仏灯もやがて微笑むようになり

酒五合ゆらゆら無敵の僕がいた

車椅子離れゆらゆらストレッチ

半世紀レム睡眠の夢のなか

喋りたい逢いたい揺れる自肅中

安寧な余生をゆするウィルス禍

廃校のブランコ揺れて自己主張

ゆらゆらと舟漕ぐ母の丸い背な

陽炎が燃える寿命がまた延びる

ゆらゆらのバスト疑似餌だったかも

多すぎて揺れる二十才の選択肢

拳骨の優柔不断挙げたまま

決心のつかぬ男に未練なし

赤ちゃんの二足歩行に春の風

わたくしをその気にさせる蜃気楼

猪口持てばびたりと止まるゆらゆらり

富山市 伴 よしお

大阪市 若本 安代

堺市 坂上 淳司

神戸市 松倉 正美

池田市 上山 堅坊

可見市 板山まみ子

堺市 奥 時雄

河内長野市 森田 旅人

大阪市 高杉 千歩

鳥取県 斉尾くにこ

和歌山市 土屋起世子

塩竈市 木田比呂朗

愛媛県 玉井 勝順

寝屋川市 川本 信子

和歌山県 三枝真知子

明石市 桃谷 和郎

南あわじ市 萩原 狸月

大阪市 石田 孝純

三田市 幸田 厚子

東京都 川本真理子

三原市 鴨田 昭紀

堺市 澤井 敏治

ゆらゆらと記憶の軸が定まらぬ	米子市	妹能令位子
カーテンがゆらゆら内緒聞いている	西予市	黒田 茂代
ゆらゆらと徘徊ぶらぶらと散歩	岡山市	工藤千代子
ゆらゆらと揺れているのは自分です	大阪市	寺本 実
多すぎて揺れる二十才の選択肢	南あわじ市	萩原 狸月
かげろうが揺れると散歩したくなる	倉吉市	牧野 芳光
遺言状書きつつゆれる右左	神戸市	近藤 勝正
陽炎が行く先々で邪魔をする	三田市	九村 義徳
西方の波ゆらゆらとざわざわと	和歌山市	まつもととこ
ゆらゆらと揺れて根っこが育たない	米子市	中原 章子
ゆらゆらの眠気が解けるまでベッド	豊橋市	小松くみ子
不確かな人生なんて蜃気楼	松山市	柳田かおる
愛と別れのはざまで揺れている螢	松山市	栗田 忠士
ゆらゆらと癒されに行くくらげ館	上尾市	中村 伸子
ゆらゆらに余裕感じた震度3	大阪市	樋口 眞
温泉でゆらゆら棘も抜いてます	生駒市	飛永ふりこ
贅肉ゆらゆらおばちゃんフラダンス	河内長野市	藤塚 克三
ゆらゆらとしぶとく残る嫉妬の火	松江市	梅瀬みちを
ゆらゆらはあなたと会ったあの日から	大阪市	岩崎 玲子
秀 句		
ブランコにまだ人妻が揺れている	阿南市	小畑 定弘
何時も心はもの欲しそうにゆれている	土佐清水市	辻内 次根
涙腺が切れたか何もかも揺れる	藤井寺市	太田扶美代

みの虫も宇宙遊泳しています	大阪市	津村志華子
ゆらゆらと蟹満載の宝船	鳥取市	上山 一平
風に舞う馬券切なく見る夕陽	枚方市	丹後屋 肇
ゆらゆらと道頓堀を船で呑む	大阪市	坂 裕之
ブラゴミが波間に揺れる地球危機	富士見市	中島 通則
ブランデーグラス還らぬ日目が揺れている	神戸市	奥澤洋次郎
糞虫になってコロナを遣り過ぐす	弘前市	福士 慕情
しなやかに揺れて風向き確かめる	豊橋市	西郷紀美代
ゆらゆらり飲み過ぎだよと影が言う	大阪市	岡田 恵子
怖いのはときどき妻の揺り返し	河内長野市	梶原 弘光
点滴棒下げてゆらゆらトイレ迄	鳥取県	門村 幸子
重心がゆらぐコロナの丸木橋	箕面市	中山 春代
サツちゃんブランコ降りたまたあした	生駒市	饗庭 風鈴
火をつけた人は誰です私に	三田市	野口真枝子
煩惱を静かに笑う和蠟燭	大阪市	森 廣子
乗りますか僕の作った笹舟に	安来市	原 徳利
キッチンも財布も譲り無重力	鳥取市	福西 茶子
吊るされて柿もわたしもシブぬける	大阪府	大浦 福子
おばかさんなんて言われて少しゆれ	大阪市	柴本ばつは
秀 句		
困るなあ札束そない積まれたら	大山市	金子美千代
醒井の梅花藻涼し川の渕	京都府	北野クニオ
ノンアルにするか運転代行か	米子市	竹村紀の治

「ふつくら」

中 村 金 祥 選

(投句 234名)



ふつくらと夢ふくらます未来地図
 ダイエットに叛きふつくら焼けた芋
 ふつくらに見えるコロナの持つ毒牙
 ふつくらの赤子の手足夢掴め
 絵に描いた餅がふくらむ自肅の夜
 マタニティドレスの中で育つ夢
 ふつくらは自肅太りでございます
 皺の手をふつくら包み母介護
 お歳暮のふつくら包む松葉がに
 ふつくらとしてはいるけどカードだけ
 ふつくらと出番待ってる寒椿
 乳呑み児のほっぺ見ているママの幸
 ふつくらとウィッグつけてクラス会
 猫に負けずわたしふつくら日向はこ
 蟹も河豚もふつくらしてるのが旨い
 銘柄はさておき新米は旨い
 ふつくらした財布が萎む競馬場
 あなたへのケーキもうまく焼き上がり
 出酒らしの煮干とわたし同じ型
 太陽を食べた布団に身を沈め

弘前市 福士 慕情
 豊中市 水野 黒兎
 堺市 澤井 敏治
 河内長野市 藤塚 克三
 岐阜県 喜多村正儀
 大阪市 平井美智子
 香芝市 大内 朝子
 和歌山市 土屋起世子
 鳥取市 上山 一平
 米子市 成田 雨奇
 鳥取市 岸本 孝子
 橋本市 石田 隆彦
 大阪市 岡田 恵子
 河内長野市 穂口 正子
 大阪市 古今堂蕉子
 安来市 原 徳利
 三田市 福田 好文
 三田市 上田ひとみ
 鳥取市 福西 茶子
 貝塚市 石田ひろ子

ふつくらの形に終りたい余生
 たこ焼きは転がるたびに丸くなる
 注文を聞いてから焼くパンケーキ
 ふつくらに小さい命無限大
 ふつくらの土が嬉しい春の種子
 ふつくらの母のボツケはドラえもん
 青い実がふつくら熟れる反抗期
 ふつくらとやさしく包むオムライス
 ふつくらと老いの命を編んでいる
 ふつくらといつも笑顔のお面つけ
 ふつくらの膝でみていた甘い夢
 ふつくらと入道雲の焼け具合

佳 句

ほこほこの焼き芋手の平で踊る
 母が来る予感ふつくら煮る小豆
 ふつくらと乙女に脱皮する少女
 ふつくらなほっぺを少し染めて恋
 YESかなNOかなモナリザの微笑
 ふつくらとふくらむ鬼を切る刃
 ふつくらしたぬもうじきママになるんだね
 天
 ふつくらな笑顔一つがあればいい
 軸
 ふつくらの顔から貰う生きる糧

藤井寺市 太田扶美代
 三田市 谷口 修平
 豊中市 きとうこみつ
 富田林市 山野 寿之
 鳥取市 岸本 宏章
 豊橋市 西郷紀美代
 河内長野市 坂野 澄子
 富田林市 中村 恵
 長野県 丸山 健三
 和歌山市 北原 昭枝
 池田市 上山 堅坊
 神戸市 上田 和宏
 倉吉市 牧野 芳光
 奈良県 渡辺 富子
 三田市 尾崎 一子
 堺市 村上 玄也
 弘前市 高瀬 霜石
 鳥取県 竹信 照彦
 八幡市 今井万紗子
 男鹿市 伊藤のおよし

「休む」

(投句 232名)

藤井寿代選



はやぶさ2休み間もなく次の旅
一休み歟に止まった赤とんぼ
妻の留守心休まるひと時だ
どっこいしょ一休みしてよつこらしよ
毎日が休み子猫と遊んでる
夕焼けの沈む景色で一休み
燃え尽きて裸で休む落葉樹
おやすみを言う相手いる幸せよ
お喋りを休み無表情になるマスク
西之島大さくなあれ休まずに
乳癌かあ休みなさいと言った神
空つ風シャッター街を駆け抜ける
休日の時計は滑らかに回る
休憩の合図で並ぶ女子トイレ
横綱の有給休暇長すぎる
休むのが一番心も体も
休みなく動くハートに感謝する
人間六コロナでひと休み
にんげんを休むスイッチオフにする
スマホ投げカンコーヒーを飲んでいる

豊中市	上出	修
河内長野市	藤塚	克三
米子市	成田	雨奇
三田市	尾崎	一子
和歌山市	柏原	夕胡
米子市	後藤	宏之
池田市	上山	堅坊
交野市	山野	双葉
枚方市	藤村	亜成
神戸市	上田	和宏
豊橋市	小松くみ子	
大山市	金子美千代	
海南市	小谷	小雪
神戸市	富永	恭子
西宮市	緒方美津子	
西宮市	伊藤のぶよし	
河内長野市	黒岩	靖博
奈良市	米田	恭昌
三原市	鴨田	昭紀
浜松市	中田	尚

コロナ禍で休み間もない医療危機
過労死の蟻よゆつくりお休みよ
毎日が休み年金ありがとう
人間を休み一日猫になる
皆勤賞だけの人生それもよし
休みなさい体のいい首切り勧告
100年の歴史寂しいシャッター街
「休業」が「閉店」になり灯が消える
育休を取れば無くなる元の席
ああ楽になったと空を見る落ち葉
プチゆつたりを求め日帰り湯に浸かる
介護には連休なんて夢の夢

佳句

退屈という贅沢な日向ぼこ
慟哭は休耕田の肥えた土
星取表両横綱の「ややややや」
歩を休め私の轍確かめる
休日なしの医療現場へありがとう

人

ドタキャンのLINEが届く冬の部屋

地

休むのは日本海の見える墓地

天

ベスト・オブ・ベストの笑顔だな 眠れ

軸

耳休めカシオペア座と対話中

東大阪市 佐々木満作
西予市 黒田 茂代
高槻市 松岡 篤
寝屋川市 廣田 和織
川西市 大坪 一徳
岡山市 大石 洋子
大阪市 内田志津子
宝塚市 丸山 孔一
堺市 村上 玄也
橿原市 居谷真理子
高槻市 片山かずお
大阪市 若本 安代

三原市 笹重 耕三
富田林市 山野 寿之
富士見市 中島 通則
越谷市 久保田千代
堺市 内藤 憲彦

佐賀県 真島久美子

倉吉市 牧野 芳光

弘前市 高瀬 霜石

初級教室

題 コピー

居谷 真理子

「コピー」——広辞苑では①写し、複写
②模倣、模造品 ③下書き、手本 ④広告文、
宣伝文句。いろんな意味がありました。「山」
とか「海」とかの分かりきった言葉の題で
も一度は辞書で引いてみましょう。思いが
けない作句のヒントが隠れていたりします。

(原は原句 参は参考句)

原 5円での御縁探して西東

不二夫

5円と御縁をかけましたか。題を知らな
ければ分かりにくい句となりました。

参 5円コピー探して使う電車賃

原 贋作と祖父には言えず気が重い

厚子

参 贋作と祖父には言えぬ気の重さ

参 贋作とお祖父ちゃんには言えぬまま

原 コピーだと見抜く眼力年の功

一平

参にせものを見抜く力も年の功

原 ベーパーレスいまだコピー機活躍中 のぞみ

参 ベーパーレスのはずがコピー機忙しい

原 物事はまずは模倣が始まりだ 義明

参 何事もまずは無心に真似てみる

原 コピー機に札だけ刷るな注意書き 三樹夫

参 コピー機に札は刷るなの注意書き

原 知能犯父親似だとゴマをする (あ)さくら

参 知能犯父親似だとゴマをする

原 まがい物コピーですのとすまし顔風 羅

参 まがい物コピーと言えばカッコいい

参 堂々と持ちますまがい物だけど

原 健全さん仕草真似ても出せぬ男くさ一 弥

参 健全さんを真似ても出せぬ男くさ一

原 子の人生コピーしないでオリジナル 弥生

参 コピーにはならぬ人生子に望む

原 中国はコピーで済ます四苦八苦 眞智子

参 中国もコピーが得意芸だった

原 コピー商品それでも欲しいおんなです マキコ

参 ブランドのコピーそれでも欲しいです

原 コピー機は改削前の文字知る 風露

改削^{かいしゅん}文字。ここまで難しく言わなくても。

参 コピー機は推敲前の文字を知る

参 コピー機は付度前の文字を知る

原 謄写版昔はこれで答案用紙 光雄

参 謄写版だった試験が懐かしい

原 コピーかと思う程ババ似なのです 千賀子

参 ババ似なの縮小コピーみたいでしょ

原 白黒コピー一枚残す孫たちに (興)弘

参 孫たちに残す言葉をコピーする

原 瓜二つ心のコピーできません 貴美江

参 瓜二つ心はコピーできません

原 写し取る書く手間はぶきボタン押す 照枝

参 写し取る書く手間はぶきボタン押す

原 外出時保険証コピー持ち歩く 開子

参 お守りに保険証コピー持つて出る

原 とりあえずコピーの山でレシビ帳 紀美代

参 とりあえずレシビのコピー山とある

原 検索し頭にコピー知ったふり (櫻)良子

参 検索し頭にコピー知ったふり

原 ネットから頭にコピーする知識

参 私のコピー人間欲しいです

参 私のコピーが一人欲しいです

ひでお

原 コビベしてやつと進級出来た孫 厚 江

参 進級の孫はコビベの腕を上げ

原 コビー機の下に転んだ五百円

ひとみ

参 コビー機の下に逃げ出すワンコイン

原 似てる人この世に三人居るらしい(澤良子

参 そっくりが世に三人も居るらしい

原 喜怒哀楽複雑すぎてコビー不可(圓恵子

参 人間の喜怒哀楽はコビー不可

参 コビーなどできない人の複雑さ

原 コビーでもいいから下さいメッセージ 双 葉

参 コビーでもいいから欲しい子の便り

原 スランプを模写に戻って芸術家 行 久

参 スランプを模写に戻ってまた一步

原 給付金パソコンよりもファクスです マユミ

参 パソコンよりファクスを買う給付金

参 ファクシミリ買おうと待った給付金

原 教えられありがた迷惑偽物と 勝 正

参 偽物と目利きありがた迷惑な

原 子供は親のすること総てお手本に ゆ き

参 子は親のすること総てお手本に

参 子は親を手本にしますご用心

原 本物と複写判らぬゴッホの絵 (川) 信 子

参 本物が複写かゴッホだというが

原 コビー機が吐く七回忌の知らせ 道 子

参 コビー機が吐いた七回忌の知らせ

参 七回忌のお知らせ五枚コビーする

原 雨後の虹心にコビーまた明日

このままでも良い句ですが

参 雨後の虹心にコビーして明日

原 夢だったトリスを飲んで行くハワイ(伽佳子

懐かしいです。あのキャッチコビー

参 あの頃はトリスを飲んで行くハワイ

原 妻の鞭母の叱咤に瓜二つ

のりひろ

石川県の方、無記名でした。

参 妻の激励母の叱咤に瓜二つ

原 奥方は模造ダイヤに目がくらみ 風 鈴

参 奥方は模造ダイヤと知らぬまま

参 奥方は模造ダイヤのほうが好き

原 何だこりゃ押し間違えて紙の山 汪

参 紙の山コビーの数を間違えて

原 毎日がコビーのような日を送る 通 則

穏やかな日々でしょうね、きつと。
参 日々好日コビーの様に過ぎていく

原 うれしいことだけをコビーで残したい 千 代

参 うれしさをコビーしてます残します

原 ラブレターコビー出したが返事ゼロ 英 也

参 ラブレターやはりコビーは駄目でした

原 血筋かな孫の晴着に娘が映る えい子

どんな晴れ着でしょうか。それが分かれば

句はイキイキします。

参 遠い日の娘よ孫の七五三

参 振り袖の孫は娘に生き写し

ミヨノさん、題を勘違いなさいましたね。
掲載できませんが、どうぞ悪しからず。

〔佳句〕

持つ人がコビーに見せるルイヴィトン 令位子

大切なデータやっぱり紙で持つ 崇 史

コビーした手間と時間が捨てられる くみ子

盗難の心配のない模造品 (貞) 正 子

念のためコビーを取ったラブレター (義) 廣 子

〔今月の推せん句〕

サンブルに惹かれてランチ決めたのに

山 中 閑

ロボットに任せて私消えようか 中 田 尚

東京のコビーなんかはもうごめん 秀 爷

『麻生路郎読本』余滴 (62)

路郎の「川柳人協会」 ⑩

葉原道夫

「川柳雑誌」昭和16年6月号「川協のページ」に、路郎の健康が勝れないため、川柳人協会の理事長は水谷鮎美に譲り、路郎は会長になったことが報告されている。

また、水谷鮎美の「川柳人協会員に告ぐ」に、〈本協會機關誌として從來頒布いたしてあました「川柳雑誌」は前理事長麻生路郎氏の好意により犠牲的特價で分譲されてゐたのでありますが、同誌が定價以上の原價で印刷されてゐる實狀を知つてこのまま看過することが出来ないで、せめて定價だけは支出していただくことに決定いたしました。(以下略)とある。「川柳雑誌」の定価は、年間3円60銭、川柳人協会員は年間3円だった。川柳人協会が発足した昭和11年7月時点では、その金額で運営できたのだろう。ところが、昭和12年に日中戦争

が勃発し、物資が不足し紙価や印刷費が高騰したために、定価以上の原価で印刷されるような状況になったのだと考えられる。

「川柳雑誌」昭和16年8月号「川協のページ」に、〈日本出版文化協會の第一回總會が去る六月廿五日午前十時から早稻田大學前、大隈會館で開催され、出席會員二千五百餘名中川柳ではきやり吟社主幹村田周魚、川柳雑誌社主幹麻生路郎の兩氏が出席〉とある。日本出版文化協會は、出版物の統制を行うために、昭和15年12月に創立した機關である。周魚は、「きやり」の主幹としてではなく、「日本川柳協會」の常任委員という立場で出席したのではないだろうか。路郎は、「川柳人協会」の会長としてではなく、川柳界唯一の営業誌「川柳雑誌」の発行人としての立場から出席したのだと思われる。

「川柳雑誌」昭和17年1月号「後記」に、〈十二月號でも減ページをしなかつた本誌は新春號でも特に増ページをしなかつた。要はページ數ではない。時局下の編輯は與へられた紙數にどんな内容を盛るかが問題である。▼本號から從來の「柳界展望」欄を廢し、それらの記事を「川協のページ

欄」へ發表することとしてその欄を「川協のページ柳界展望」と改稱することとした〉とある。「柳界展望」と「川協のページ」を一つにまとめたのは、紙數に限りがあるからだと述べているが、「日本川柳協會」が発足して一年余り経ち、路郎の「川柳人協会」から脱会する柳人が増えたために、「川協のページ」を充実させることが困難になったからではないかと推測する。

路郎の「川柳人協会」に対する、前田雀郎委員長長の「日本川柳協會」の動きを見てみる。雀郎は「日本川柳協會」を解散して「日本文学報告会」(昭和17年6月18日発会)に統合しようと画策していた。その動きを知った路郎は「川柳雑誌」昭和17年7月号「廻轉椅子」で、次のように批判している。

〈*1一昨年の秋に雀郎氏が頬被りをして來阪した時の話も*2俳句の第四部に入る話だつたので彼にその非をさとしてやつたがまだそんな夢を見てゐるのかも知れない。私が御免を蒙つた原因はそこにあるのだ。俳句が今日の俳句になるまでにはどれだけの犠牲を拂つてゐるか知れないのだ。眞に川柳を愛するなら川柳のために、どん

な大きな犠牲でも拂ふだけの覺悟がなくてはならない。餘所の御馳走に目をつけるなど淺ましい了見だ。(中略) 文藝報國會だけが報國の誠を致してゐるのではないことを知らねばならぬ。日本は今大きな戦を闘つてゐるのだ。くだらない看板の塗りかへにばかり腐心してゐる時ではない。)

* 1 「日本川柳協會」は昭和15年12月19日に發会した。その前に雀郎は路郎に會つていたことが知れる。

* 2 「川柳きやり」昭和17年8月号の三宅巨郎「川柳も皇道文化の一翼」に、「日本川柳協會の結成に先立ち、情報局より前田現協會委員長まで當局の案として示されました事は、俳句と川柳の連携でありまして、第一部を定型有季、第二部を定型無季、第三部を新傾向及び自由律(內在律)そして第四部として川柳をおき(以下略)」とある。

また、「川柳雜誌」昭和17年11月号「廻轉椅子」では、次のように述べている。

「日川協幹部の俳句部門への轉換は一つのセンセーションを捲き起してゐる。幹部が總辭職でもしなければ一寸収拾のみちはあるまい。

塊人氏が「東亞川柳」の八月號に*「文學報國とは何か」と題して啓蒙の筆を執つてゐるし、不浪人氏が「みちのく」の九月號に「川柳系圖にこだはる」の一文を草して日川協の幹部の人達に一矢を酬ひてゐるし、清水米花氏も又「みちのく」九月號に「百年の計を樹立せむ」を執筆し日川協幹部諸氏の反省にこれとめてゐる。

上述の如く火の手は寧ろ内輪から上つてゐるにもか、はらず、久良伎氏を頭目として雀郎、三太郎、周魚、水府の面々、何れも俳句の落胤でもあるかのやうな顔をして遂に俳句の遺産にありついたのである。「泣くくもよい方をとる形見分け」か。

久良伎氏の門下が、僕の書いた記事(筆者註「8月号「廻轉椅子」参照」を久良伎に見せたところが、路郎のいふことは正しいと云つてゐたそうだが、その久良伎氏も正しくない方へひきずられてしまつた。久良伎氏も又老ひたり矣である。)

* 一部抜粋する。(川柳部會がどうしても認められなければ、川柳協會の幹部諸氏は認められるまで参加を遠慮すればそれでよいのであります、認められなければ認められるまで待つのがお國

の爲でありまして、節を屈して加盟しては、お國の爲にならないのであります、何となればこれは、文學によつて報國するのが會の目的ではありませんか、その主體となるべき、川柳文學を認められないで、何によつて報國の實を示さんとするのであります。)

路郎の「川柳人協會」と「日本川柳協會」はどうとう最後まで交わることはなかった。

さて、路郎の「川柳人協會」はいつまで存在したか。東野大八の「麻生路郎物語」によると、(同協會は戦局が苛烈化するとともにいつか自然消滅の形となつた)とある。「川柳雜誌」雜誌奉還終刊号(昭和18年12月)の「川柳人協會員に告ぐ」に、「川柳雜誌」の廢刊は同時に弊協會の機關誌を失ふことになるので、不朽洞會席上で非公式に協つたところ寧ろこの際、發展的解消をしてはと云ふことになつたが、その時期は未だ決定してゐない。會員諸氏の御意見を至急拜承したい。川柳人協會 會長 麻生路郎」とあり、「川柳雜誌」奉還後まもなく、その幕を閉じたと思われる。



(投句199名)

春はすぐそこ、のはずなんですけどまだまだですね。

今年は盆梅展のボス

ターも見当らなかったように思うのです。もちろん、開催されていなければ当然なのでしょうが。今までは当然のようにあった事が物がアレッ、と思えば消えていた、なんていうのは寂しいです。

あれもこれも、復活を祈るしかありません。

では、ナビです

枚方市 栃尾 奏子
繋いだ手はなれる日までお味噌汁

(評) 何だか泣けてきそうな一句です。お味噌汁という、ごく日常的な食べ物に空気の様に自然な愛が思われます。

大阪市 高杉 力
美学など持っていないと寒椿

(評) あれやこれやとこじつけたがるの

が人間。ただ咲いて散つてただだもんネ、と椿に笑われているかも。

和歌山市 土屋起世子
アマビエが春を伴いやつて来た

(評) すっかりお馴染みになったアマビエ様、早くコロナをやっつけてくださいませ。待つてまつせえ。

大阪市 内田志津子
休むのも踵返すも恥じやない

(評) 疲れたら休み、ダメだと思えば引き返す。サムライじゃないんだから、気楽に考えたいです。

松山市 柳田かおる
キラキラに憧れていた若かった

(評) 表面だけしか見えなかったのかしら、でも、そんな未熟さも今から思えばかけがえのない若さの象徴かも。

河内長野市 森田 旅人
天上はこんなところと視察団

(評) うーん、行ってみたい、視察団に入つて。ところで、その視察団はどうやって選ばれるの？

枚方市 藤田 武人
おはようと柱時計のネジを巻く

(評) 懐かしい風景、大体はお父さんがネジを巻いて家族の一日が始まるんですよね。家長の特権だったんだわ。

尾道市 小川 道子
イクメンも飽きるお顔と馴れる顔

(評) そうなんだ、イクメンにもさまだ

まあるなんて目からウロコ！そんなこと考える余裕も無かったわ。

男鹿市 伊藤のおよし
そつ無く生きたつて逝くまでの命

(評) 逝くまでの命、だなんて、当たり前のことなだけと深いわねえ。だったらい一寸ぐらい好き勝手、ダメかしら。

生駒市 飛永ふりこ
真つ白な翼に潜むジャンプ力

(評) 真つ白な翼だなんてウツクシ過ぎるー。一見、儚げで実はめっちゃ力貯め込んでたんだわ。

三田市 谷口 修平
逆転のパワー密かに取っておく

尼崎市 藤田 雪菜
風花がそつと教えてくれるエゴ

弘前市 高瀬 霜石
シアワセの尻尾に触れたことがある

松江市 相見 柳歩
枝も葉も涙をガマンするのです

大阪市 笠嶋 惠美
初雪を手を受けなんか畏まる

米子市 吉田 陽子
四季という枠のくずれる音を聞く

黒石市 北山まみどり
この先は内緒話といたします

松江市 石橋 芳山
アホやなー空を見詰めてばかりいる

豊橋市 西郷紀美代
温室に入れるサボテン 依怙蟲眞

大阪市 坂 裕之

ゆらゆらと漂うだけで軽く生き

鳥取市 谷口 回春子
懐かしき旧き時代よまた会おう

唐津市 仁部 四郎
散り方を人に教えて花一輪

江南市 脇田 雅美
啓蟄を待つて飛び交う女王蜂

米子市 八木 千代
クロウシタネと隕石を抱いてやる

高槻市 富田 保子
目薬を涙に見せて逃げ延びる

大阪市 石田 孝純
だとしても野仏捨てたもんじやない

鳥取県 門村 幸子
雪に花ときにこの世はいとおしい

箕面市 出口セツ子
常識が夢を侵害して困る

藤井寺市 鴨谷 瑠美子
衣がえはいさささとはいかぬなり

西宮市 亀岡 哲子
無理心中するに程よい雪が降る

松山市 大内せつ子
きれいだねと言われきれいにさようなら

岡山市 大石 洋子
全幅の信頼開くパラシユート

弘前市 稲見 則彦
読書感想文大嫌いでした

松山市 郷田 みや
引き際はそつと拍手はいりません

鳥取市 田中 天翔
もう一度チルチルミチル読みたいな

奈良市 山本 昌代
ガンバッテまたガンバッテヨッコラシヨ

池田市 太田 省三
早梅の幹にごつごつ力こぶ

今治市 永井 松柏
雪の夜はアダモの声も途切れがち

箕面市 酒井 紀華
さくら散り里には母が待つてゐる

和歌山市 北原 昭枝
信じれば何んにも怖いものはない

加西市 山端なつみ
スーパの石焼芋に腹の虫

橿原市 居谷 真理子
両脚が主役になったトウシューズ

大阪市 柴本ばつは
あわたしの天国行きは何時だろう

弘前市 福士 慕情
如何に咲き如何に散るかと花の私語

大阪市 今村 和男
煤払い隠した手紙落ちてきた

防府市 坂本 加代
踏まないで地面の花は美しい

河内長野市 木見谷孝代
殻破り女に戻るイヤリング

鳥取市 永原 昌鼓
校庭に植えたかばちゃやさつまいも

大阪市 田中ゆみ子
黒髪は椿油の祖母ゆずり

河内長野市 大島ともこ
ダイエツトし過ぎ着地が出来ません

横浜市 菊地 政勝
ぬくもりが伝わってくる雪の精

米子市 後藤 宏之
冬眠の前に遊ぼうもう少し

和歌山市 まつもととこ
寒い日は素直に君に会いに行く

貝塚市 石田ひろ子
雪虫が夜行列車の窓覗く

富田林市 山野 寿之
里山の矜持は凜と数椿

奈良県 長谷川 崇明
また雪が積もる三十八度線

名古屋 富田 末男
雪んこと話がしたく飛んでいる

吹田市 山本希久子
ひとり旅終着駅はきつと雨

大阪市 宇都満知子
凜と咲き定めは天にまかせましょ

和歌山市 古久保和子
軒下を借りて作戦練り直す

4月号発表
(2月15日締切)



(平本 霧石人 画)
柳箋に2句

川柳塔鑑賞

同人吟 糺谷和郎

—1月号から

と皆の笑顔と、そして川柳を口ずさんで
乗り切るしかないようです。

巣ごもりも川柳あればこそその日

磯島 福貴子

川柳が今はわたしのオアシスに

雪本 珠子

コロナで巣ごもりを続けるのは苦痛で
しかありません。しかし、川柳を友とし
たお陰か、五七五と指を折ることで日々
を楽しく過ごしているのですから。

ボタンよりファスナーが好き一発屋

古今堂 蕉子

一発屋でなくても歳を取ればボタンは
扱いにくく、ファスナーは至極重宝なも
の。便利な物には必ず欠点があり、噛ん
だり壊れた時の始末に泣かされますね。

うさぎ小屋ふたりになれば持て余す

中井 萌

家族がいた時は何と狭い家か、もつと
広い家に住みたいと思ったもの。二人に
なった途端、うさぎ小屋でも掃除には広
く、使う部屋も限られてきます。いつの
間にか贅沢な悩みになっています。

幕引きは花あるうちにするつもり

吉村 久仁雄

海鳴りが心に沁みてやつと冬

伊藤 のぶよし

秋が深まる頃から日本海では海鳴りが
風向きにより聞こえます。大波が海岸近
くで崩れて起きる低周波の海鳴りが、腹
の底に響き沁みわたります。そして冬が
やつと訪れたことを実感でき、しみじみ
とさせられる句です。

幸せな日は満月がよく見える

牧野 芳光

幸せとを感じる時は心に曇りがありませ
ん。満月も人の心も素直に見えます。人
に対しては暖かく接することができると
ですね。幸せなことを事象でうまく表し
ており、気持ちりがほっこりします。

人生の午後です珈琲にしませんか

丹下 凱夫

人生の午前はとつとに終わり、現在は
午後3時頃でしょうか。ゆっくりと時間
が流れる中、木漏れ日を浴びながら珈琲

を楽しむ。余生ではより一層時間の使い
方の大切さを考えさせられます。

自転車もわたしの節もよう軋む

初代 正彦

古くなった物は全て円滑に動かず軋ん
できます。全く同感であり、「老いるショッ
クギシギシ膝のオイル切れ」なんて詠ん
だことがあります。

GOTOで乗り越えました倦怠期

山下 純子

GOTOは割引特典と地域クーポン付
きで安価な旅が楽しめます。その上夫婦
水入らずの旅で倦怠期を乗り越えること
ができれば、家族も政府も願ったり叶っ
たり、申し分ありません。

コロナ禍の中こそ笑顔咲かせたい

柏原 夕胡

世界がコロナ菌に囲まれた中で生活し
ている私達。テレビで感染者増が連日報
道されていますが、この苦境をワクチン

早いうちから幕引きされるのですね。「華」でなく「花」ですから、花が存在しているうちに自分の幕を自分で引くことになるのでしょうか。安室奈美恵さんのように輝いている時に幕引きをするなんて、常人にはできないことですよね。

月光を独り楽しむノクターン

山野寿之

深秋の月光のもと、夜想曲のノクターンを聴きながらオンザロックでもう一杯。溜まった疲れが一気に癒されます。川柳の後は大好きなクラシックで頭を休ませるのは最高の息抜きです。

ときめきは生きる力の調味料

酒井紀華

対象が人であれ物であれ、ときめきがあるから生きてゆける。胸を躍らせ人生に張りをもたせる「ときめき」は、調味料だと言いましたね。毎日ときめいていたいものです。

センターラインたびたび越えるおせっかい

富永恭子

ひとにはそれぞれ侵すべからずの結果を持っています。そこへ他人が踏み込むと嫌な気持ちになります。そういう代物

をスバリ言い切っている大胆さに感心します。

身の丈のしあわせみそ汁ほか

山崎武彦

贅沢な食事ではないが、いつもほかほかのみそ汁を家族揃っていただく、幸せはほんに近くにあると感じる句です。

余生の色まだバレットで迷ってる

竹山千賀子

自分の色を一旦決めたが、もともと自分にあふわしい色はないかと迷っている。余生には明るい色を選ぶと思いますが、色言葉にはネガティブな意味合いもありますので、お気をつけ下さい。

もぐもぐを隠すマスクの使い良さ

辻内げんえい

コロナ禍のマスクは、デザインや色合いがより工夫されています。マスクの使い方も、化粧を省いたり、もぐもぐを隠したり、小顔に見せたりと様々ですね。

紫陽花は作った人の色に咲く

中堀優

紫陽花はもともと「青い小花が集まって咲いている花」ですが、育った土壌の性質によって色が変わります。その土壌

を精魂込めて作り上げた人となりに移り込み、花の色として表われるのか。花は律儀で正直なんですね。

人間のおいがにじむ窓際だ

岡崎美知江

歳を重ねるにつれ、中心部から窓際に寄せられる。窓際でしばらく過ごした人間模様が見られる所であり、欲しかった自由な時間が手に入る場所でもありました。窓際は悲喜こもごもが宿る神聖な空間と思えてなりません。

太陽の下は秘密が似合わない

前田楓花

太陽の下ではなぜか人は正直になれます。レミオンの「太陽の下」の歌、「太陽の下では深い眠りから覚めたらもう少し素直に生きたいよ、だってあなたに逢いたいから」が思い浮かびます。

永遠に枯れない愛を咲かせたい

藤井智史

人間の万能薬は恋です。命枯れても恋は枯れぬとは言わないまでも、永遠の愛へのあこがれを持続けていたいものです。一方、川柳塔が川柳界の永遠の塔になっていくことを祈っています。

水煙抄鑑賞

—1月号から

富永恭子

悲しいが自分のことでいっばいだ

太田としお

頷ける句。「悲しい」と表現されているところにお人柄が見えました。

エコバッグ忘れて担ぐ米5キロ

齋藤奈津子

あるある！ウォーキングの帰りなど、忘れた時に限って重い物を買って後悔。私もしよつちゅうです。

彼女で少しやわらかく反抗期

降幡弘美

いい出会いがあったのですね。成長への階段を見守る暖かい目を感じました。

産見舞欠伸とくしやみ誉める客

田中辰夫

赤ちゃんを誉められたら一人前とか。

米朝さんの「子ほめ」が浮かびました。

呱呱の声はまわりに幸せを届けますね。

お向いも空き家となつて沁みる秋

若年幸子

寂しさと同時にご時世を詠まれた句。この先の自分にも思いを馳せます。

手を置けば妻の墓にも秋の冷え

小畑定弘

墓石の冷たさまで伝わってくる句。中七のものが活きていて心に響きました。

出番ないスーツやつぱり捨てられぬ

鈴木たけし

勤務時の苦楽を知っているお気に入りスーツ。「やつぱり」に思いが籠もる。

元氣なら子供食堂やりたいな

巖田かず枝

得意な事を生かしてはつらつ生きる！上向きで素直な願望が伝わりました。

シナリオの通り泣けない意地っ張り

岡田恵子

ぐつとくるポイントは人それぞれ。人生のシナリオは自分で描きたいですね。本物の強さを感じる素敵な一句でした。

たらればを思うと早い夕間暮れ

坂本星雨

同感です。たらればが、たらればで無くなる日が来ますように。

人の来ぬジムで淋しく汗流す

古川光雄

健康維持の為の継続と感染防止との葛藤。更にジムの閉鎖も心配ですね。

転け方も上手くなったと七転び

米田利恵子

わが家は絆創膏が沢山必要。上手な転け方を是非是非伝授下さい。

コンビ二のついて行けない新機能

本庄汪

便利になり過ぎて右往左往。使い慣れるしかないのでしょうか。就労人口の減少が拍車をかけて無人コンビ二まで。

コロナより人と疎遠が怖くなる

岩口のぞみ

コロナは人間関係の破壊をもたらしました。逢いたい人と逢えないなんて。

平凡な去年の暮らし出来ぬ今

幸田厚子

あとどれくらい待てば収まるのでしょうか。すでに一年。とにかくお元気で。

咲く姿浮かべて植えたチューリップ

尾畑なを江

最近品種も多くなりましたね。なを江さんのワクワクが伝わってきます。



お金さまさま (3)

これまでの「お金」を詠った句では、自嘲を含めた「お金がない」から始まって、「小銭と五百円玉」「金遣い」「預金」「家計簿」「お金持ち」などでした。この(3)では「年金」と「宝くじ」そして「遺産」に焦点を当ててみます。

ばあちゃんの支持率上がる年金日

村上ミツ子

タマまでがいそいそとする年金日

平井美智子

年金は遅延することなく入る

きとこみつ

年金でそよ風ほどの夢を見る

野口 節子

年金のカットとうとうロープ際

山岡富美子

年金が減らされケチになつてゆく

岡崎美知江

年金がケチの哲学引き寄せる

夏目 一粹

年金でモータリタニアの蛸を食う

大内 朝子

年金の支給日は偶数月の15日。その日が土日であれば前日に振り込まれます。支給額が「そよ風ほどの夢」しか見られないものでも「遅延なく入る」のは有り難いことです。

年金額が物価の上昇に合わせてアップしていくのが理想ですが、残念ながら諸般の事情でじわじわとカットされるばかり。ケチくさくチマチマ暮らすのは嫌ですが、借金をせず凌いでゆくには大盤振る舞いなどは自重です。

買わないと誰かに当たる宝くじ

鈴木 道子

五億円ひよっとしたらと思わせる

高島 啓子

宝くじ罰を受けても当たりたい

今西 廣子

使い道なら決めている宝くじ

大島ともこ

人の為使うと誓い宝くじ

榎本 宏子

ジャンボくじ買うか買わぬか買いそびれ

大羽 雄大

当たるまで止められませんジャンボくじ

太田としお

宝くじ破り続けてきた一生

吉岡 修

もしも当たったら「別荘を建てて」「世界一周旅行をして」「預金の利子でゆつくりと」等と、自分のことばかり考えていては当たりません。「福祉協会に寄付をして」「失業中の友人にボンと援助」「募金箱には一万円札をさりげなく」などと、人のために使うと誓っていたら、当たるかも……。

しかし、誰かに当たっているハズなのになかなか順番が回って来ず、死ぬまで空くじを破り続けることになりそう。

灯明の影で遺産が揺れ動く

藤井 正雄

遺産分け音沙汰なしが現れる

古今堂蕉子

あの世からハラハラ見てる遺産分け

柏原 夕胡

介護では散るが遺産で集まる子

岡本 勲

介護したしないで揉める遺産分け

磯部 義雄

にわか介護でぶんどつた大遺産

清水久美子

兄弟の継ぎ目切断する遺産

坂本 蜂朗

遺産分け以来お互い水臭い

北野 哲男

宝くじよりも確実に転がり込んでくるのが遺産ですが、残念ながら独り占めは出来ず相続人の間で遺産分けをしなければなりません。これが厄介で、故人の生前に介護はおろか見舞いにも来なかつた人が相続人の中にいるとひと悶着。遺産が原因で兄弟の縁が切れることも珍しくありません。

とかく遺産が絡むとややこしくなりますので、財産など遺さず自分のために使い切ってしまうのが良さそうです。

二〇二〇年（令和二年）

十二月本社誌上句会

投句者227人

兼題「味わう」

小野 雅美 選

こっそりと横顔ばかり見ています
昨日も今日も味わう妻の捨て台詞
今日一日味わい尽くし床に就く
声欄の声を味わう家籠り
禁足解けて故郷の空気吸う墓参
ときめきをまだ味わえるわたし古希
五味五感生きてればこそ味わえる
コッテリと味つけをして撒く噂
舌先で味わっている美辞麗句
喝采を浴びて恥じらうかすみ草
幸せな国日本の四季を味わえる
錦秋を酔わせる風のリフレイン

兵庫 上田ひとみ
広島 笹重 耕三
奈良 饗庭 風鈴
大阪 藤井 則彦
島根 伊藤 寿美
奈良 山下 純子
大阪 川本 信子
和歌山 喜田 准一
大阪 田中 俊子
岡山 永見 心咲
鳥取 伊塚美枝子
大阪 石田 孝純

丹精の土を味わう指の腹
数多の苦勞忘れて母は車椅子
ロゼワイン酸っぱいだけの片思い
チョコレート愛が欲しくて買ってみる
生きている実感恋は素晴らしい
さようならと書いて深夜のレモンティー
恋全て敗れ味わうマンデリン
失恋の痛み節ぶしまで沁みる
切り抜いてためしたことの無い料理
ゆで卵つるんと命味わって
輸入だけど松茸威張る夕ご飯
薄味に旬を味わうことを知る
夫の手料理こまかいことは申すまじ
評判を味わうための長い列
記念日のビールいつもと違う味
しんみりと味わうコンビニのおでん
新走りあります貼り紙にゴクリ
いかがです味わう試食買うはめに
ご馳走を先ずはスマホに味わせる
マスクして静かに味わえと総理

兵庫 中岡千代美
大阪 森 廣子
兵庫 野口真桜子
和歌山 三枝眞智子
奈良 大内 朝子
大阪 島田 明美
岡山 藤井 智史
大阪 大浦 初音
大阪 山本加お里
岡山 大石 洋子
広島 田桑 恵子
兵庫 北野 哲男
奈良 安土 理恵
兵庫 萩原 狸月
山口 上村 夢香
大阪 鈴木いさお
大阪 中島 一彌
兵庫 藤田 雪菜
大阪 谷口 東風
大阪 井丸 昌紀

モンタンを聞いて落葉で焼くお芋

四季ごとに目から味わう京料理

左遷地の住めば都に酔う徳利

逝ってから深く味わってる苦言

ちよつとだけ不便味わうアナログ派

寂しさのなかに自由の隠し味

みかけより中味わたしの魅せどころ

誤飲して味わう都会的寒さ

三密をさけて味わう身の孤独

じつくりと苦言味わい立ち上る

妻いない気儘な旅で羽根伸ばす

味わえば人ほど美味なものはない

体験者ならの共感繋がる手

小豆ことこめでたさを味わう日

おばあさんの暮らしも捨てたものじゃない

窓明かり亡母と味わう星月夜

味わったどん底で得た宝物

味わってみようか君の甘い嘘

書き込みが随所に残る父の本

お早ようと今日を味わう朝の声

兵庫 村田 博

大阪 齋藤奈津子

大阪 山野 寿之

大阪 藤村 亜成

大阪 内藤 憲彦

京都 山田 葉子

奈良 加門 萌子

島根 石橋 芳山

大阪 松尾美智代

大阪 山岡富美子

岡山 藤澤 照代

大阪 中村 恵

大阪 大島ともこ

広島 田中 敬子

奈良 大久保真澄

京都 今井万紗子

愛知 小松くみ子

大阪 平井美智子

埼玉 久保田千代

鳥取 政岡日枝子

佳

ボロボロの愛読書です智恵子抄

三つ星から帰りお茶漬食べている

人情も共に味わうおすそ分け

庄助さんほどではないが朝の酒

板長の腕は食材探しから

人

老いらくの恋は入れ歯で噛みしめる

地

コロナには勝てぬ朝昼晩読書

天

平穏を味わいながらであるあくび

軸

眼裏で噛み分けている愛と憎

兼題「ルール」

神棚に御神酒 仏壇には御飯

理不尽といえども床の間の家訓

茶器温めて紅茶を入れるのがルール

ママのルールいつも宿題やってから

青森 稲見 則彦

大阪 西出 楓楽

大阪 源田八千代

大阪 川端 一步

大阪 両澤行兵衛

広島 田辺与志魚

青森 高瀬 霜石

大阪 原田すみ子

棄原 道夫 選

鳥取 新家 完司

大阪 田中ゆみ子

大阪 きとうこみつ

大阪 田中 俊子

暮し向き自分のルール守り抜く

早寝早起き愚直に守るわがルール

二十年朝は自家製ヨーグルト

夫には義母の悪口言いません

定年でルール変更告げる妻

じゃんけんで決める掃除も買い物も

テレビのリモコンは妻という決まり

約束を破れば肩を揉まされる

夫婦のルール守りながらの口ゲンカ

ディスタンス守って平和妻と僕

自粛から我家のカレー金曜日

三密のルールを守り気が減入る

クラス会病気の話やめましょう

友情続く貸し借りなしというルール

クラスたちゴミ出しルール監視する

太陽の呉れたルールで豆を蒔く

ときめいてしまうルールを破るとき

肩書きが時にルールを誤解する

無礼講目には見えぬがある縛り

怠けずに毎晩吞むと決めている

兵庫 山口 光久

鳥取 門村 幸子

大阪 大浦 初音

奈良 山下 純子

大阪 上出 修

兵庫 中岡千代美

大阪 初代 正彦

兵庫 米田利恵子

鳥取 政岡日枝子

兵庫 敏森 廣光

大阪 齋藤奈津子

兵庫 富永 恭子

兵庫 山田 耕治

大阪 山本希久子

兵庫 櫻井 崇史

広島 田辺与志魚

鳥取 斉尾くにこ

佐賀 仁部 四郎

兵庫 梶谷 和郎

鳥取 竹村紀の治

時としてルール違反の休肝日

ルール違反したのは君だと言うカメラ

金持ちと無一文には勝てません

規則ですからと動かぬお役人

ルールよりマナー大事という頑固

お互いの過去は問わないのがルール

薔薇の木に薔薇の花咲くのがルール

楽しさを倍にしたくてあるルール

ラッシュでは両手を挙げるのがルール

どれ一つとつても君に都合良いルール

車が来なくても信号は守る

六法にはないが最初はグーである

黙れなどとそんなルールは認めない

シートベルト規則で締める乳の上

負けるが勝ちそんなルールに惑わされ

家族皆違うルールで同居する

動物はルール守って生きている

口にチャック更衣室にもあるルール

ルール守って楽しんでます一人旅

打ってからまず一塁へ歩くこと

大阪 山野 寿之

鳥根 伊藤 寿美

大阪 今村 和男

大阪 片山かずお

大阪 中村 恵

奈良 安土 理恵

大阪 西出 楓楽

和歌山 村中 悦男

大阪 伊達 郁夫

大阪 藤村 亜成

大阪 宇都満知子

大阪 澤井 敏治

大阪 岩佐ダン吉

兵庫 生田えい子

兵庫 村田 博

鳥取 山本ふみ子

富山 伴 よしお

大阪 柿花 和夫

大阪 松尾美智代

大阪 井丸 昌紀

ルールを守りマスクする国しない国

大阪 中島 一彌

私のルールあなたに逢わぬ事

兵庫 松本ゆかり

触れぬこととしておく触れてほしいから

東京 川本真理子

順番のルール学んだ滑り台

大阪 小野 雅美

高齢化ルール違反が多すぎる

兵庫 吉村めぐみ

ゴメンネと言えば簡素になるルール

兵庫 野口真桜子

ルールにはちよつとうるさい妻でいる

大阪 太田扶美代

門限がありましたかと猫帰る

大阪 横山 里子

佳

ルールから離れたとこに赤い花

大阪 伏見 雅明

迷ったら暖色選ぶマイルール

兵庫 横田 次郎

守らねばならぬ性悪説だって

大阪 谷口 東風

顔を見てルールを変える鬼ごっこ

兵庫 能勢 利子

流星群空にもルールあるようだ

広島 小川 道子

人

ルールからちよつと外れそうな吐息

広島 笹重 耕三

地

ルールブックひしめき合っている花野

岡山 永見 心咲

天

少年のルールに帽子欠かせない

広島 岩本 笑子

軸

抽斗の隅に溜まってきたルール

兼題「ばっさり」

福士 幕情 選

出直しの一步ばっさり捨てた過去

大阪 山本希久子

枝落とし我が家の空を広くする

東京 川本真理子

ばっさと断ち切りたいが恩がある

大阪 富田 保子

ばっさと捨てた没句が光りだす

兵庫 能勢 利子

ばっさと添削された自信作

大阪 上出 修

スッパリと薬缶頭にしてはじめ

大阪 両澤行兵衛

有名人一瞬に消す週刊誌

大阪 小野 雅美

断髮式大の男の目がうるむ

兵庫 福田 好文

引いもされず鯨鰐吊し斬り

大阪 横山 里子

一言でばっさり切った腐れ縁

鳥取 田中 重忠

ばっさと切られる度に死んだふり

岡山 岡本 余光

ばっさと小遣い削る恐い妻

大阪 伊達 郁夫

刃向かえば妻にばっさり斬られそう

大阪 初代 正彦

英断をくだす勇気が欲しい今

石川 堀本のひろ

耳よりをばっさり蹴ってマイウェイ

広島 松尾 信彦

ばっさりと切り捨てられた僕の案

殿方を口で斬ってはいけません

愚痴弱音はさつと束ね火に焼べる

これ以上聞かんガチャンと電話切る

未練なくばっさり切った髪と彼

要介護ばっさり夢は捨てました

すべて捨て終活だけは急がねば

ばっさりと切った未練がまた疼く

バーコードよりスキンヘッドで決める粹

モヤモヤを川柳にして片付ける

ばっさりと胃を切り取ったステージ4

軌道修正ばっさり想い出を削る

連勝が途切れればっさり髭を剃る

ばっさりと切られ街路樹ふるえてる

植木屋のハサミの動き迷いなし

ばっさりと切るほど髪はありません

残高が見栄をばっさり切れという

鬼になり過保護の傘を閉じる母

大阪 坂 裕之

奈良 大久保眞澄

大阪 太田扶美代

大阪 鈴木 栄子

兵庫 敏森 廣光

大阪 西出 楓楽

静岡 中田 尚

大阪 中村 恵

大阪 宇都満知子

山口 坂本 加代

大阪 坂上 淳司

山口 中前 幸子

和歌山 石田 隆彦

京都 山田 葉子

大阪 片山かずお

大阪 谷口 義

大阪 山岡富美子

兵庫 生田えい子

一太刀を浴びせて議論封じ込め

ばっさりと原発廃炉ならぬのか

ベテランをばっさり切って若返り

迷いなく執着心を断ってゆく

ばっさりと削って僕が表われる

自国主義の膿バツサリと切るコロナ

コロナ禍がばっさり切った青田買い

非正規の首ばっさりと切る非情

理不尽に切られた非正規の骸

ばっさりに派遣社員の泣く不況

居酒屋のサミット人を斬りまくる

法螺吹きも騙せなかった闇魔様

パソコンのファイルも削除大掃除

AIにばっさり夢を破られる

容赦なくばっさり面子潰される

酒ダメと言われて医者をもた変える

竹を割るように解決しない基地

一刀両断まだまだ君は青臭い

大阪 村上 玄也

大阪 江島谷勝弘

大阪 鈴木いさお

大阪 阪本 秀子

広島 田辺与志魚

大阪 澤井 敏治

鳥取 奥田 由美

大阪 油谷 克己

岡山 永見 心咲

大阪 水野 黒兎

大阪 川端 一步

兵庫 野口真桜子

大阪 太田 省三

大阪 東 敬朗

大阪 樋口 眞

兵庫 堀 正和

和歌山 三宅 保州

愛媛 宮尾みのり

三つ編みをばっさり切つて嫁にいく

青森 稲見 則彦

佳

論敵をばっさり斬つて旨い酒

大阪 岩崎 公誠

しがらみをばっさり切つて始発駅

大阪 石田ひろ子

ブラゴミと同じレベルの議員たち

青森 高瀬 霜石

もうお逢いしません髪も切りました

兵庫 山田 耕治

何もかも捨てたら楽になれるのに

大阪 島田 明美

人

ばっさりと戦力外の首を斬る

徳島 小畑 定弘

地

マンション建った桜三本泣きました

兵庫 緒方美津子

天

不都合な論は無用と切り捨てる

広島 田桑 恵子

軸

コロナ禍の計報人情遮断する

兼題「沈む」

赤松 ますみ 選

ジャニーギター春を物憂くかき鳴らす

和歌山 木本 朱夏

願掛けの小銭ゆるりと池の底

島根 原 徳利

沈黙が張り詰めている被災跡

大阪 村上 玄也

鳩尾に沈めた本音から冬に

大阪 西出 楓楽

浮き沈み浮き沈みした走馬灯

大阪 山野 寿之

入水と書けば優しい桜桃忌

大阪 両澤行兵衛

沈む陽をずっと見ているベンチの背

鳥取 斉尾くにこ

鳩尾に母を沈めた沼がある

大阪 平井美智子

盃の底に沈めておく野心

宮城 木田比呂朗

陽が沈む輪廻のように月が出る

大阪 川端 一步

こころざし埋没船においたまま

大阪 山本希久子

聞き役にされてる冷めたティーバッグ

兵庫 山田 耕治

年金を眩きながらより分ける

大阪 東 敬朗

いつでも脇役オレンジのつぶつぶ

静岡 中田 尚

陽が沈むこの虚しさを癒やす酒

大阪 坂 裕之

沈んでも溶けないブラも苦しみも

大阪 田中ゆみ子

太陽が沈まなければこない朝

大阪 谷口 義

海中のブラごみクジラさえ殺す

大阪 伏見 雅明

沈むヤマト浮くゴム板が見届ける

大阪 丹後屋 肇

小走りの秋へ沈んでゆく夕日

兵庫 藤田 雪菜

過去は過去生れ変わる再生紙

大阪 榎本日の出

独りっ子喫水線の深いこと

菓子折りの底に小判という澱み

沼の深さ教えてくれた蓮の花

日御碕の夕日神に一札して沈む

半紙一枚沈む時間はありますか

どの顔もステイホームのもやし色

沈黙の音だけがする砂時計

浮き沈みあつて丈夫になる根っこ

コロナ禍を沈む夕日に祈る日日

山で朝見たお日さんが沈む海

沈む日の五線譜に書くセレナーデ

沈む夕陽に救われた事がある

水不足ダムに沈んだ村浮かぶ

冷たいね騒がしいねと海の底

深海魚の神話沈まない太陽

軍艦が沈んでいたと言う魚

どうしても心晴れぬ日のココア

山麓の野分に沈む一軒屋

考えに沈んだ痕がある日記

兵庫 北野 哲男

奈良 大久保眞澄

奈良 安土 理恵

島根 伊藤 玲峰

広島 岩本 笑子

山口 坂本 加代

岡山 永見 心咲

広島 笹重 耕三

大阪 齋藤奈津子

兵庫 櫻井 崇史

鳥取 狭武 紫陽

大阪 太田扶美代

大阪 油谷 克己

兵庫 富永 恭子

兵庫 野口真桜子

佐賀 仁部 四郎

兵庫 松本ゆかり

大阪 富田 保子

富山 伴 よしお

列島もアトランティスの後を追う

さくらちる笑みで迎えてあげましょう

沈黙へ人肌のお茶夕紅葉

誠実に生きた男の大落暉

豆腐沈む見給え水の中の白

カクテルの底にチェリーは独りぼち

沈む船励まし合った子供たち

君それは怒り沈めた甕なんだ

這い上がるためにどん底まで沈む

ビー玉をそつと沈めて夜の底

陽が沈むあとは大人のお約束

どっちみち何度も泣いて冬の中

佳

島一つ沈む謝罪会見場

戦力外通知が届くこの世から

沈んでも正気に返るレモン水

水槽で夢を満たしている金魚

ダムに沈む約束をした秋桜

大阪 藤田 武人

大阪 西村 哲夫

兵庫 稲角 優子

神奈川 加藤 佳子

熊本 杉野 羅天

兵庫 村田 博

広島 田桑 恵子

大阪 森田 旅人

大阪 鈴木 栄子

大阪 美馬りゅうこ

愛知 小松くみ子

兵庫 上田ひとみ

岡山 藤井 智史

青森 高瀬 霜石

大阪 田中 俊子

兵庫 吉村めぐみ

島根 伊藤 寿美

人

図書館の地下に深海魚が泳ぐ

奈良 居谷真理子

どのページ繰っても無駄は何もない
亡き妻に会うところまで巻き戻す
最後まで鉛筆握る趣味ひとつ

和歌山 柏原 夕胡
兵庫 山田 耕治
大阪 山本希久子

地

深海の貝は今でも泣いてるか

大阪 今村 和男

真っ直ぐに生きて満身創痍なり

和歌山 三宅 保州

天

沈澱が済むまで地底湖で眠る

広島 田辺与志魚

秋風にもっと生きたい蟬が鳴く
あの世まで抱いてゆく氣でいるごめん

大阪 太田扶美代

軸

ワイングラスの底に沈めてゆく吐息

妻という空氣の中で生きて来た
生涯を君と歩いて見る景色

兵庫 上田 和宏
大阪 原田すみ子

兼題「生涯」

小島 蘭幸 選

生涯を笑顔で包む寂聴尼
生涯の傑作それは妻である

大阪 森田 旅人
兵庫 穂谷 和郎

生涯の宝物得た五七五

大阪 谷口 東風

百歳の耳に聞こえる子守唄

奈良 饗庭 風鈴

腕に抱く孫の未来に思い馳せ

埼玉 中島 通則

流水に生きる私も梅花藻も

岡山 永見 心咲

自分史は紙一枚に箇条書

大阪 太田 省三

私のどのシーンにも君がいた

兵庫 中岡千代美

塞翁が馬と愚痴をこぼさぬ父だった

大阪 澤井 敏治

永遠の青春幕が下りるまで

大阪 石田 孝純

ロスタイムにしては長い定年後

兵庫 大坪 一徳

尚々も教育者なり九十四

和歌山 村中 悦男

親父見てセカンドライフ練り直す

岡山 折鶴 翔

生涯を野に咲く花に季が巡る

大阪 水野 黒兎

幸せだったなあと来し方振り返る

大阪 片山かずお

山里で生まれて山里で果てる

鳥取 新家 完司

金に苦勞の生涯笑みに満ちていた

大阪 吉村久仁雄

生涯の友が夫だなんてねえ

奈良 大久保眞澄

土に生き土へ還らん歟洗う

大阪 田中ゆみ子

コロナ禍を人は一生忘れない

大阪 川端 一步

自分史のあとがきだけは出来ました

お手をどうぞ生涯一度切りで良し

生涯笑わせてくれる春と住む

生涯を賭けて極めるものが欲し

あの時の大恥生涯の宝

生涯現役九十五歳の齒

生涯を誓った指輪ゆるかった

学生寮生涯一の友を得る

後はもう此の世に借りを返すだけ

鏡にうつっている生涯のわたくし

生涯を看てくれそうなうちの猫

一生の運を使って君と逢う

新コロナでは生涯を閉じたくはない

かあさんの分まで生きて生き抜いて

孫五人曾孫七人ありがとう

生涯を誓った人のラブレター

動物園生れの象は野を知らず

カピバラの生涯はぬるま湯のなか

蜉蝣が短い生涯を閉じた

島根 中筋 弘充

広島 岩本 笑子

岡山 藤井 智史

愛媛 黒田 茂代

大阪 藤村 亜成

鳥取 田中 重忠

兵庫 萩原 狸月

鳥取 副井ゆたか

大阪 田中 俊子

鳥取 政岡日枝子

大阪 柿花 和夫

大阪 島田 明美

大阪 西出 楓葉

兵庫 上田ひとみ

島根 伊藤 玲峰

兵庫 吉村めぐみ

兵庫 緒方美津子

鳥取 斉尾くにこ

大阪 鈴木いさお

旅はまだ続いてダイヤモンド婚

百歳の化粧一生涯女

雑魚のままゴールテープを切りそうだ

母を出て母に還ってゆく旅路

ところどころ忘れたけれど生きてきた

佳

アンテナを磨き続けるその日まで

趣味ひとつ私を花の生涯に

頂いた名前で生涯を送る

可も不可も賞罰も無くエピソード

ふにやふにやでばろばろ生き様を晒す

人

生涯のライバル僕の影法師

地

生涯一句ただそれだけの道なりき

天

生涯の半分はおばあさんだった

軸

父の生涯鮮やかにある一シーン

大阪 美馬りゆうこ

大阪 井丸 昌紀

大阪 小野 雅美

大阪 平井美智子

奈良 安土 理恵

青森 高瀬 霜石

大阪 山岡富美子

奈良 居谷真理子

和歌山 木本 朱夏

島根 石橋 芳山

青森 稲見 則彦

熊本 杉野 羅天

大阪 谷口 義

水也ぬ

毎月24日締切・35句以内厳守
 掲載は原稿到着順となります。
 指書で誤字のないようお願いします。
 編集部

川柳塔みちのく(青森) 稻森 則彦報

洪洪の爺様孫にはすぐ笑顔
 洪々とたべてはまったじやつぱ汁
 洪い顔一晩干してあげようか
 洪いとは気付かぬ柿も人間も
 気の済むまで泣きましたか茶を点てる
 洪を抜く焼酎ですか人の世も
 洪柿がずっと守っていた実家
 AIの進化戸惑う僕の脳
 魂の木霊だ牛と瞳が合った
 AIについて行けない頭です
 肝臓とよろしくやって酒二合
 人手不足部屋内はロボがする
 AIよ電源切るの私なの
 いつ見ても洪い演技に惚れ直す
 AIに負けぬようにと句を捻る
 失恋の歴史を刻む笑い顔

隆 樹 初 枝 則 彦 黙 人 真 由 美 柳 子 ぶ さ ぁ 澄 子 花 峯 久 美 子 孝 子 京 子 重 虎 霜 石

AIは無智な私の助け船
 化石だね携帯ガラケイランプの灯
 寄り添って温もり運ぶ介護の手
 洪抜きがいい頃合いで咲くおとこ
 ローン完済 建具が洪くなり出した
 たつぷりの湯船で洪を抜いています
 焼酎に絶対負ける洪い柿
 温度差に顔赤らめる山モミジ
 AIが素直にはじき出す余命
 AIでヒト科がヒト科造り合う
 断ち切れず洪々とまた賀状書く
 くさび打つ理屈一つが動かない

川柳塔打吹(鳥取) 斉尾くにこ報

コロナ菌混じって見えずこわいなあ
 八十の姥でも混浴おこわり
 秀才が混ざれば話進まない
 花よりも枯れた葉に混ざる安堵感
 ガラポンを混せて当たりを狙ってる
 老い言葉はちばちですと本心を
 ちらつと見るあの人だれかまた見つめ
 はちばちと下弦の月で酒を飲む
 陽が昇る落ちる残照地平線
 じゅくし柿主はおらず落ちてゆく
 棚落ちの西瓜をくれる御親切
 世の常で庶民ばかりが落ちこぼれ
 酔うほどに下ネタばかり落ちていく

洋 子 一 吞 風 来 坊 和 香 子 慕 情 美 鈴 規 子 ひとし 吹 喜 龍 馬 呑 舟 公 恵 久 米 代 節 子 三 津 子 龍 枝 恭 子 紀 子 照 彦 大 鯨 裕 子 義 人

梨落ちて後片付けの情けなさ
 ビカドンが落ちて残った人の影
 満月にみとれて歩き溝に落ち
 つまづいた石にヒントが落ちていた
 文学に溺れ落ちてる老いの坂
 峠越えしたが家計は握ってる
 リニアカー峠はみんな獣道
 峠から百万都市のネオン見る
 おそろしいものが出そうな名の峠
 峠には汗と涙が落ちている
 みんなで越えようコロナという峠
 居心地のいい峠から降りられぬ
 峠から大きな法螺を吹き鳴らす
 頂上を極めた人にある油断
 貸した顔はちばち返して下さい

岩美川柳会(鳥取)

山下

節子報

咳がつき頬張る茶漬ふきとばす
 咳すると監視カメラがそつと見る
 女系家族輪から外れた父の咳
 髪の毛はひと足先に旅立った
 散髪屋価格競争策を練る
 鍋底を生きた男のど根性
 何を言いたすか冷や冷やの咳払い
 生きている証賀状を送ってる
 賑やかに鍋が家族の和を作る
 個性ある文字が消えゆく年賀状

重 利 貴 恵 美 知 江 紀 美 恵 野 蒜 重 忠 玲 坊 芳 光 完 司 陽 之 助 石 花 菜 紀 の 治 清 重 平 一 瑤 完 司 弘 六 凱 柳 美 恵 子 た ぬ 菖 子 敏 子

今年こそ飲もうと賀状二十年

ライバルがオシヤレするから髪染める

鍋底で起死回生の機を狙う

年賀状あまだ君も生きていた

鍋底で行き場なくしている遠慮

鍋の蓋あなたが好きとハグをする

ゴッポンゴッポン普通の風邪でないみたい

母の日だ今日は父さん鍋奉行

わかやま吟社

小谷 小雪報

今日もまたアニメもどきの八十路坂

ユーモアが時に楽しい回文詩

アニメーションリアルに描く人間味

あの日の悲劇まだ背負ってる京アニメ

アニメみる夫はじめて見たわたし

すみませんアニメの凄さ知りました

アニメオタク仲間意識が燃えている

アニメなら描く世界がたとある

三日月に腰掛けているかぐや姫

マイペースこれでもいいのだレレレのレ

コロナ禍をどこでもドアに閉じ込める

何回も全没あつて今夢中

一回は話をしたい座敷童

回想に耽る私の過去未来

デバ地下の回転焼きに行列し

円熟の独楽のスピンのブレはない

回想をすれば至らぬ事ばかり

幸 安

一 粹

茶 子

雅 女

真理子

振 作

蟹 郎

節 子

准 一

寿 子

富美子

紀 子

よしこ

和 宏

晶 子

ほのか

保 州

知 香

小 雪

徑 子

明

精 子

タカ子

日出男

夕 胡

ヒロインは独り善がりでも回り出す

回転数色々あつて目が回る

同じところばかり回っている迷路

微小なコロナ巨大な五輪かきまわす

まぼろしのオリンピックにならぬよう

ウィルスと五輪開催せめぎ合い

五輪から出るヒーローも新薬も

川柳塔唐津(佐賀)

仁部 四郎報

黒い鳥騒いで悪い予感する

清濁を日替わりで呑むコップ酒

成人式制服二名その一人

生きている今日も朝昼晩美味い

和歌山三幸川柳会

西川 千鶴報

顔色を詠まなくてすむ定年後

新聞の音読脳に活を入れ

立ち読みのもちよと気になる袋綴じ

じつくりと見た事もない足の裏

へそくりは秋の夜長に数え直す

子の手紙開ける前から解つてる

じつくりと話せば解ける蟬り

飲み込んだ本音食卓丸くする

台本も手垢まみれの初舞台

熟成をじつくりと待つ反抗期

読み聞かせ嫁はおなかに語りかけ

平和な日豊んで今日が暮れなずむ

春 雄

文 代

大 輪

悦 男

佳 子

節 子

八 茶

高 明

四 郎

蜂 實

朗

敏 照

ま き

宏 枝

ひろ子

昇

一 雄

当 代

起世子

日出男

純 子

かず子

昭 枝

小 沢 淳 選

古いしきたり破れば変わり者とされ

惚けたふり寝たふりをして一世紀

家族五人バン派ゴハン派朝の皿

文句言う学者いらぬと切る総理

千円のサンマが並ぶ秋深し

気に入りの遺影未だに決まらない

長生きは幸せだろか苦だろうか

芽の出ない子供に水をやりすぎる

何も無い畑へ行つて様子みる

タテ社会横に歩いてきた疲れ

佳句地十選 (1月号から)

川 本 畔 選

外出れば少し優しい母となる

甘えるな影がわたしを叱咤する

人間の心が見えぬから迷う

相槌は上手自論持つてない

父からの電話は土の匂いする

母さんの表は賢母裏は魔女

音量でいさかい起こす老いの耳

トランプもマスクの陰で泣いている

父母よりも長生きしてる日感謝

夫婦でも少し垣根がある仲で

香 舟

石 菜

幸 子

隆 浩

あや子

修

りこ

和 織

道 春

すみえ

隆 樹

ひろ子

芳 光

美恵子

久仁雄

茶 子

世 湖

隆 昌

芳 江

一 歩

決め方の造作に本音覗かせる
 古い先を読めるメガネを探してる
 新聞のコラムで拾う今日の味
 父の激しよっぱい味が沁みている
 逆らわず継いでゆくもの耐えるもの
 さかさまも読んで本音を考える
 貧乏の味を知ってるから強い
 ニン合の酒がじつくり愚痴を聞く
 味付けてそして始まる物語
 そうだそうだと手を叩きたい投書
 読まれたらなくてのつべらぼうになる
 行間にどうも言い分あるようだ
 愛読書サザエさん」だと言っておく
 防犯カメラ立ち読み五分過ぎました
 床磨く人の心を読みながら
 迷うとき必ず読んだ座右の書
 朝刊の斜め読みこそ今日の知恵
 じっくりと観れば蟻にも自己主張
 神経を研いで校正読み合わせ
 GOTOと言いつ過ぎるのも味気ない
 手の内を読まれて次の手が打てぬ
 母の味手繰ってみれば祖母の味
 まだ知らぬ熟成肉の旨さなど

准一 菜摘 美枝子 幹子 理恵 智三 富香 和子 八重子 保州 知香 ダン吉 みつ江 あき子 明子 彦弘 悦男 眞智子 義泰 よしこ 康則 俊介 千鶴

竹原川柳会(広島)

古田比呂子報

南大阪川柳会

松岡

篤報

鼻歌が出るきつといい事あったんだ
 ハミングラララ掃除洗濯弾ませる
 孫よ曾孫よ二度と軍歌は許さない
 ビートルズを流して欲しい僕の通夜
 わらべうた流れていきます里の川
 拜まれて石ころ一つ昇華する
 朝の陽を拝んで今日を生きてゆく
 野の花を摘んで地蔵に手を合わす
 灯明のぬくみ確かな地の絆
 天空の幻想拝む霧の海
 悔いを抱く海峡ひとつ飛ぶために
 悔いの無い暮らしへガラス磨きあげ
 希望退職日々楽しく悔いはない
 あれこれと夢は夢なり悔いはせず
 悔い一つ重ねる私亡夫恋う
 乳の張り置いて来た子が責めている
 ウイズコロナこれから先はどうなるの
 真っ白なところが欲しい仏間の灯
 ふるさとが恋しくなってくる秋で
 万歩計生きる欲ありまだあるく
 繁くたび大きくなるな息子の手
 うまれかわったらわたしはつよくなる

弘子 淑子 慶子 蘭幸 節夫 比呂子 鬼焼 昭紀 敬子 節生 笑子 幸子 千代美 宣之 栄香 輝恵 歩美 厚子 貞子 現代 史子 五歳 ちか

ネクタイをゆるめて偲ぶ通夜の酒
 我が家では規制緩和は妻の手に
 酒が出て一気ゆるむ場の空気
 新型コロナウイルスをゆるめては駄目ですよ
 ふところの都合で決まる上か並
 顔をみてもから都合つきません
 ふところの都合が元氣左右する
 大声でわめいた方が勝つ現場
 駄々こねる子供も親もわめいてる
 わめいても泣いても君はもう居ない
 わめかない男信用できません
 わめくほど愛が有ったと悟る時
 芽の出頃全部カラスにほじくられ
 転ばぬ先そろそろ杖を百均で
 モンゴルもやつと下火になってきた
 努力家にそろそろ運が向く兆し
 蹟かぬように歩きは太郎冠者
 ひと休みそろそろ行こう先長い
 絶頂へそろそろ忍び寄る不気味
 初日の出カメラ構えて待つ人出
 減税のお陰毎晩本ビール
 アメリカにハリスの風が吹き始め
 青墨になまけごろを叱られる
 たびたびの換気特老騒がしい
 小春日のおしゃべりベンチ端と端
 この話したかと聞いてから喋り
 集落を絵にする軒の柿すだれ

俊雄 篤修 ルイ子 いさお 実 楓楽 柳右子 通江 敏治 昌紀 よしみ 東風 弘子 勝弘 ひさ乃 妙子 峰子 亜成 克己 博 国和 一步 柳伸 直子 シマ子 志華子

コロナ禍の弱者に厳し雇い止め
白い息吐いて切り出す貸した金

川柳ふうもん吟社(鳥取)山下

満作

鬼滅より昭和の世代にはアトム
心配をかけないために嘘をつく
生きるのも死ぬのも金の要る話
悲しいがとても気になる遺言書
本当は鬼かも知れぬ人の面
大樹にもあつた覚悟の朽ちる時
終着駅のベンチに置いてある時間
少しかけプラスになった貯金箱
借金が毎年プラス国財政
この挫折いつかプラスにしてみせる
一つでもプラスになれば喜びだ
感觸は脈がありそう眼をつける
友人の感觸氣にしやつれてる
古女房語らずわかる午後のお茶
感觸の良しき悪しきは心なり
冷やかな体温計の指示を待つ
名陶に土の感觸臍ろげに
握手した感觸敵になりそうだ
悶々の苦惱弄る仏の手
幸せはふんわり丸い肌触り
指先で確かめてみる点字本
パパ似だね言われて娘嫌な顔
嫁にこせ一人娘だ婿に來い

満作 弘委智 茶人 一粹 加代子 真理子 鐘旭 金祥 拓治 昌鼓 絃一 節子 妻子 大振 朋友 一平 螻蛄 秋月 欣之 紫陽 楓花 隆浩 蟹郎

居ないのに娘の部屋を覗いてる
好き嫌いなしの娘は伸び盛り
出戻りの姉が朝から歌ってる
妻よりも恐い娘のアドバイス
娘五人我が家に居るぞさあおいで
娘の娘に頼り切る介護
娘には知られたくない浮気ぐせ
我が強いDNAを娘がつなぐ
この美人娘時代の私です
娘に残すものはないけど笑顔置く
娘の地図に親がレールを引きたがる
初キッスの感觸は今何処

川柳茶ばしら(愛知)

関本かつ子報

桐子 善平 綴 回春子 亨 賢悟 勲章 天翔 雅苑 八千代 一瑤 凱柳

女性軍したたかなるや同窓会
名簿見ず任命除外謎を呼ぶ
六人を拒否した理由述べられず
高所得者の名簿に載ったことがない
初恋が名簿の中に隠れてた
名簿には二十と書いてあつた筈
名簿から親友ひとりまた消える
哀しみの棒線二本消す名前
信念を貫き通す強い意志
地元経済原発NOを貫けず
ママ解つてと赤ちゃんが泣き止まぬ
五十五年七三分けはかえてない
信念を貫くわたしのゆとり
貫いた真面目の果てに命断ち
不器用でお前ひと筋五十年
貫いた女の顔で生きてゆく
青雲の意志貫き船出する
この寝顔意志を貫く顔かいな
一徹を貫く父の道具箱
病む姉へ貫く嘘に痛む胸
命大事を貫く医師団の悲鳴
負けてなお直球勝負しか出来ぬ

川柳あまがさき(兵庫)大浦

初音報

久仁子 こみつ 勝弘 いさお フジ さくら 一步 理恵 正義 ちづる 美代子 宏造 扶美代 冬のト まつお 瑠美子 一文 シルク ひろこ 大子 みつこ 久仁雄

こみつ 雄次 初音

振り込め詐欺余裕あるからだまされる 柳明

趣味違い嗜好異なりでも夫婦 (人) 修平

「鬼ころし」飲んで仏の顔になる 英坊

猫だって猫の都合があるんです 和子

どの顔も私が主役おでん鍋 紀華

大鍋に未練も愚痴もぶちこんだ 厚江

水面の鯉紅葉の空で舞う 千賀子

ユニークなマスクをつけて浮かれてる 正彦

水溜り余裕で越せるはずだった 新録

五百羅漢あれこれ全部僕の顔 久仁雄

黄昏が映る右脳が動き出す 真桜子

隠したい聞いても欲しい秘密なの 美龍

三蜜を避けてそれぞれ自己主張 ヨシエ

腹が立つ俺もタマには鍋磨く 勝弘

慈善鍋があつた昭和の年の暮れ かずお

ディスタンスお鍋が冷めてしまいます 耕治

卒寿には月旅行でもしようかな 正和

いろり端民話聞いている自在鍋 (俗) 修平

四季の移ろい今年に肌で感じずに 雅美

ワクチンが早く欲しいよドラえもん 万彩

ゆつたりと暮らせコロナに論される 菊江

録画しておきたい程の夢でした 良種

写経する心の澱が消えるまで 宏造

ブラザ川柳(大阪) 穂口 正子報

慎ましく二千万貯めこの世去る 正子

出しすぎよバトより厳し妻の声 政夫

今はただ健康願う日が過ぎる 和代

うちの嫁夢でもとても望めない 靖子

花嫁を飾るブーケは誰の手に 景子

食卓に一輪挿しの味添える 悦夫

衣桁にかけた花嫁衣装秋飾る 園子

飾らずに思うがままの我が余生 克三

老いたれば老いには老いにいい速さ 一彌

いとこいの漫才丁度よいテンポ 弘光

心まで飾るとちよつと生きづらい 清乃

宝石で飾れなかった妻の指 淳司

岸和田川柳会(大阪) 石田ひろ子報

落葉舞うベンチに残すメランコリー 和子

猫とわたし紡ぐドラマの泣き笑い みつ江

黄泉の国のぞき戻つて落ちた欲 恭子

遠距離の恋が実つて今がある 珠子

黄ばんではいるが誇りのユニホーム 大輔

九条が黄信号を出す平和 常男

百合の名に合わぬ花粉の自己主張 ふさあ

茶の間からホームドラマが消えていく 日出男

大勢で舞えばこの世はバラダイス さくら

終戦を喜んだのは遠い夏 一歩

雪原にいのちの讃歌鶴の舞う いさお

見苦しい振る舞いやがてみんな去る 恵子

連ドラを見ながらそつと老いてゆく 瑠美子

津軽三味線から生まれ出るドラマ 秀夫

コロナ禍のリモートドラマサスペンス 香代

秘密めく話へ耳がにじり寄る 穂夫

計報届き遠雷聞いているひとり 美龍

道行きのドラマ決まって雪が降る 義泰

老い二人ドラマいろいろ背負つてる 清

妻の手に乗せられドラマ五十年 和美

戦争の姉の体験ドラマ聴く はこべ

年輪にドラマチックな森の過去 信二

これからがドラマ佳境になる八十路 ひろ子

ああ見えてドラマチックな人なんよ 喜代志

多数派に遠くて拍手だけ送る ダン吉

孫が来ててんでこ舞いと嬉しそう 玄也

遠いののに送ると言つて聞かぬ母 保州

来た道を凝縮すればドラマめく 律雄

泣き笑いドラマ演じて来た夫婦 航太郎

黄パプリカ添えてサラダに活入れる 信子

声援自粛黄色い拍手送ります 眞澄

おい酒よくつドラマを作ったか まさひろ

侘びしいなあちらへこちらへ舞い散らし 昌代

青春期遠い過去へと足早に 康信

川柳大阪 山崎 珠生報

ローソクの灯りのような恋終わる 志津子

日本産和のローソクが有るらしい 和

灯籠の火ゆらゆらと魂送り 朝子

風前の灯火ローソクと私 勝弘

新型コロナ戦争並みに人殺す 一歩

五〇〇歩へ景色を変えて新ルート (原) すみ子

ポロポロの新品ジーンズの苦勞

新しい靴で未来に蹴蹴く

真新しい清水の舞台から翔ぶ

初午にコロナ撲滅願掛け

神様も時に間違ふ赤い糸

信仰心鳥居を見れば拝む癖

雪の日はこもって読書ななめ読み

降りしきる雪本懐遂げた赤穂義士

川柳ささやま(兵庫) 北澤

稠民報

晩年の人生探し物多し

聴診器人の心はNOという

視聴率最高上の謝罪会見

補聴器を外すと自分とり戻す

嫁はんが本気で好きな時あった

本気ですか間食多いダイエット

歪む豆おせち外され豆菓子に

荒野にも一輪咲かすベシヤワール

年重ね手伝うことも去って行く

失敗へ今日はゆとりが欠けていた

木守柿高き梢でふるえてる

きやらぼく川柳会(鳥取)後藤

宏之報

終活のノートに見栄が入り込む

仇にした親の意見を子に送る

秋の月しぼんだ心膨らます

待つてがなかなか来ないいい知らせ

堅坊

雅美

まつお

珠生

(今)万紗子

(北)賢子

(中)峰子

福貴子

(北)哲男

稠民

善輔

剛

重男

喜弘

良子

(長)哲夫

照代

美智子

几代

観劇は元氣もらいにお洒落して

少しぐらい呆けてみるのも良いもんだ

飲み会も他人行儀の新ルール

試着室素敵ですわと褒め殺し

コロナで始まりコロナで終る年

おでかけの財布忘れてマスクあり

心にもビタミンがいるまんじゅうよ

朝やけに染まる大山燃えている

二頁で眠くなる本読んでいる

昭恵さんどうぞお好きになさいます

都合よく何で貴方が出て来るの

とんでもないやつが貰えるのが天賞

富柳会(大阪)

山野 寿之報

魂の形に概焼く炎

逝く前の母の小声を聞き逃す

天秤の始点に屯する五欲

いい鉄出来てなんでも半分こ

半分の味を知らない一人つ子

沈む日に紅葉真つ赤に燃えて秋

ひものよう妻のスモホにあやつられ

引き出しへ早乙女らしい母がいる

果籠りに三面鏡は閉じたまま

半分こ大きい方を兄はくれ

地吹雪の眼を皿の運転士

組紐のような絆の家族愛

早や師走マスクの紐に慣れた耳

治代

久直

宣子

紀の治

美穂

葉々

瑞枝

博子

美緒

千代

汪奇

恵

武人

寿之

高鷺

和子

壽峰

一文

晴美

澄子

よしみ

欣之

清

あかり

今日は何処へ行こか靴紐考える

口下手が上手に生きる白と黒

観客は一席空けて半分に

無茶苦茶なヒト科に土偶の高笑い

甦る端布の中にある記憶

オフィスラブリスク匂わせ発火中

手を繋ぎ親子の影が急ぐ路地

ほつとする我家は港脱ぐ鑑

倉吉川柳会(鳥取)

竹信 照彦報

師走の世鬼滅の刃だけ踊る

鉛色師走の月はおぼろ月

自粛した今年は師走で打ち止め

何よりも家族の健康を祈る

給付金よりも働く場所祈る

コロナ禍で逢えぬ子や孫無事祈る

生きる限り体力知力維持祈る

世界中のコロナ撲滅祈るのみ

祈るのはもう止そう無駄だろうから

くる年の健やか祈る年の暮れ

トラウマの傷に折った生きる術

ふにやふにやで融通すぎてダメな杭

喋るなど杭を打たれた毒舌家

沖繩の心に杭は打たせぬぞ

夫婦関係壊れぬように杭を打つ

コロナ禍で歩くなよと杭打たれ

煩惱に揺れる心に杭を打つ

文重

由夏

正義

常男

章子

良恵

きよみ

圭

麦青

隆昌

道春

けいこ

日出子

由紀子

風露

玲子

大鯨

智恵子

恭子

雄大

節子

美知江

凱柳

祐子

醉芙蓉

引つかかる杭の羽衣振り返る
如月はさらに厳しい空になる
美しい花にはさらに御用心
八十路過ぎ浮気心がさらに増す
総理とは嘘を重ねるドジな役
老眼にさらに最近遠い耳
日曜日さらに虫歯が疼きだす
感染があればこれよとさらに延び
唐変木杭にもなれず役立たず

城北川柳会(大阪)

近藤

マイクに拾われバレバレの囁き
行間に温もり拾うみずゝの詩
鳶でなく鷹に見えだすこの育ち
トンボりに風邪吹き抜ける自肅中
大空へマスク外して深呼吸
ユニークな顔で世の中丸う生き
核のゴミ作る原子炉もう嫌だ
すきま風ひんやりこころ突きささる
孫が描く絵とれもユニークピカンぱり
インスタ映え旨い安いは期待せず
まれに拾った恋を紡いできた絆
気付きの言葉拾い集めて一行詩
散らかしたゴミもそろそろ拾う歳
欲拾いいつしか増やす資源ゴミ
川柳人だれか10億当らんか
同情も期待もされぬから強い

野 森 完 司 石花葉 紀美恵 次男 茂夫 重忠 さちこ 照彦 正報 千恵子 野鶴 満洲夫 克己 万紗子 朝子 正彦 峰子 福貴子 榮子 賢子 満知子 捷二 弘委智 一步 郁夫

球根を埋めワクワクの春の庭
振り向けば命拾いの落下物
ユニークと言われた時もある頑固
人生は涙と笑いそれでいい
満ち足りた振りして秘めている我慢
諍いを恐れちつちやくなってきた不安
二時三時目覚めマスクを縫っている
風邪で来て咳に怯える待合室
また一つ馴染みの店の灯が消える
外食の自肅で増える酒の量
知らぬ間に何も残さずもう米寿
ごはんですよの声を待ってる家籠り
グーグルでそっと見てます元の家
先人の生き様の句にある深み
風が吹き残りましたよ大阪市
生活の知恵を足裏から拾う
赤木遺書一陣の風おこす

川柳塔さかい(大阪)

内藤

憲彦報

何もかもみんな許して十二月
冗談を言っつゆとりをもつ師走
十二月夫の電池入れかえる
来年は書こうと暮に買う日記
コロナ禍で師も走れないオンライン
年賀状書くぐらいいかな老い二人
自肅故とまどい一つも気忙しい

杵香 肇 和夫 廣光 志華子 信子 ルイ子 俊雄 星雨 博 五月 かずお 宣子 満作 勝弘 洋志 正 扶美代 唯教 ゆみ子 五月 妙子 勝弘 舞夢

着実に進む私の物忘れ
ナビ無しでゆるりと進む八十路坂
物忘れ進み自分を見失う
下がつて見ると進歩のあとがよく見える
歳月は進み私が残される
手のひらで鬼滅の刃読む時代
ロボットの進化へ人の立往生
いつの間に話が進みおいてかれ
ボーナスでエアコンテレビみな消えた
ボーナスは貰えないけどいい仕事
振り込みでへそくり作れない賞与
まるでボーナス産まれた双子です
ボーナスは無いが全く自由の身
ボーナスを上げた僕の心臓に
一年の無事神からの賞与かも
いつの間に話が進みおいてかれ
今日もひま時計ばかりが進んでる
ボケベルが進みガラケイスマホの世
十万吨進水式は華がある
一向に進まぬ拉致の救護策
八十路生き一週間の早いこと
反抗期人の進化の一步だろ
開発が進むワクチン治療待ち
反省を込めてご帰館猫足で
梯子酒今宵も無理なネオン街
発火して恋の埋み火熱帯びる

雅明 いさお 敏治 美津子 雅美 憲彦 蕉子 廣子 さくら 瑠美子 玄也 としお 堅坊 ひろ子 朝子 廣子 光雄 敬子 憲 満作 八千代 みつ江 満知子 佳子 時雄 進

廃絶にこの被爆国蝶子が抜け
傍目ほど媚びてはいない猫の恋

みつこ
志津子

あかつき川柳会(大阪) 磯島福貴子報

あとくされ無くてさっぱりする別れ
さっぱりと距離を保って老いの恋
言い勝ってさっぱり出来る訳でない
ブライドを捨てると世間広くなる

壽峰
堅坊
楓楽
忍

失敗をのりこえさっぱりと生きる
雑念を洗い流して米を研ぐ
さっぱりとして終章は風と生き

紀乃
寿子
ひろ子

九条という受皿がある安堵
高級店見事な皿にちよつぱりと
柿栗ぶどう盛って絵になる秋の皿

北朗
太郎
浩子

受け皿の医療体制灯る赤
目を皿にあまりの低さ預金利子
しあわせに見えてはいるが飾り皿

満知子
進

盛り付けを絵を描くように白い皿
受け皿になれずこめんと後継者
順調に馴染の客で続く店

保州
朝子
朝子

昨日まで順調だった泣きはくろ
順調な暮らし支える妻の汗
再診日主治医がくれた御墨付

康信
シマ子
瑠美子

割れてよいと思う皿こそ割れはせぬ
結局は何でしたんや都構想
順調に行けば百歳夢でない

もと
一志
征之

貧乏っていいな相続揉めもせず
三分粥五分粥生死超えたオベ
トリアージされそう先ずは高齢者

美晴日
欣之
古池蛙

早や師走政治の歩み遅々として
コロナ禍で儲かる人と辞める人
一年の計を果たせず年暮れる

清
裕之
常男

自粛する事をコロナに教わった
マスクしてサントクロースやって来る
コロナ後に会う約束の年賀状

川柳塔まつえ吟社(島根)相見
柳歩報

隔世の感ひしひとオンライン
はやぶさⅡ土産おろしてまた宇宙
コロナ禍に微笑みくれるシクラメン
十月十日満ちて迎える出産日

美晴日
欣之
古池蛙
清
裕之
常男
川信子
加代
五二
栄子
福貴子

川柳塔まつえ吟社(島根)相見

柳歩報

複雑な順序で悟りには遠い
故郷へいそいそ帰る時よ来て
いそいそに待ったをかける温度計

柳歩
邦代
とも子
あきら
久絵
雪代
みちを
米估
豊仙
弘充

久しぶり妻とベア組むもどかしさ
喫茶店ベアで入れば出るムード
ベアルック古びて女強くなる

私にも法螺を吹きたい時もある
閉じこもり番の良さに気がついた
私にも法螺を吹きたい時もある

うふふふ嘘のスパイス混ぜちゃった
うふふふ嘘のスパイス混ぜちゃった
うふふふ嘘のスパイス混ぜちゃった

忘れない産湯熱くて泣いたこと
忘れない産湯熱くて泣いたこと
忘れない産湯熱くて泣いたこと

卓袱台や仕事机になる炬燵
ボーナスで海外旅行夢を見る
青春の花枯れぬまま胸に咲く

卓袱台や仕事机になる炬燵
ボーナスで海外旅行夢を見る
青春の花枯れぬまま胸に咲く

真も偽も千の紅葉を楽しまん
アッしまった口がすべって苦いこと
なれてきてサンマはらわた病みつきに

苦を樂と毎日読んで暮らしてる
仰向けば苦み走った父の貌
傷口を開いて探す真の毒

ひまわりの種が太ると枯れてくる
外寒く炬燵にもぐる着替えせず
じわじわと人を膂抜けにする炬燵

枯れてゆく体に酒をたつぷりと
大家族炬燵の中は足々々
ボーナスも給与もないが恙無い

真心は裏をかかれるときもある
枯葉削心に深い傷の跡
飲み込んだ苦い言葉は忘れない

美智子
芳山
德利
瑞人
桂子
知恵子

茶子報
ゆたか
草文
鈴
孔美子
光幸
大鯨
文道
一平
すみれ
重忠
弘六
完司
盛桜
照彦
茶子
甚禄
小鹿
かおる

食卓がいつもと違うポーナス日
ハイハイと言つて真実はぐらかす
真実を正すところまるのは貴方
妖怪が総理を決める苦々し

弘子
英子
美ツ千
恒

帽子にマスク読めない顔と腹の底
唇に少し紅引く老いの恋
老夫婦二匹の猫と慎ましく
スムーズに話まとめる藤の人
飾り気は無いが優しい妻が好き
昭和の母は小銭を貯めて遺児育て
脳回路情報あふれシヨートする

光弘
正博
ゆき
千代
由夏
敬二
福子

古時計ネジさえ巻けばまだ動く
トラベルで動いて増える患者数
他動詞より自動詞増えてゆく余生
二度手間も厭いませんよ惚け予防
マスクマスクマスクマスクまた忘れ

正子
奈津子
則彦
一弥
黒兎

枯れてなお美を思ふのは人の性
百姓のポーナスなんて夢の夢
鳥の足妻と待つたポーナス日
生真面目は横断歩道はみ出さず

正昭
実満
ちかし
蟹郎

まちはがいほメール発信押したあと
古希で尚富士槍岳へ夢を追う
食べて寝て呑んで手元に常備薬
宝箱よりも大事な薬箱

孝
規之
隆彦
隆明
孝代
邦夫
靖博
和子
和代
ふみ
純風

もうずっとアップダウンのない暮し
バブル景気夢でもよろしもう一度
内部留保だけが溜まっている景気
コロナ禍がなければ景気良いハズだ
「閉店」のビラが剥がれて雨の午後(平美智子
悪病が景気も夢も打ち砕く
不景気の寒さ身に沁む師走風
コロナ禍にばちばちでん言えません
景気よい話マスクの中で消え
身の丈の暮らし景気に疎く生き
景気よく登れなくなる老いの坂
閉店のビラへマスクの目がうるむ
福笹をAmazonで売るえべっさん
好きという文字にも照れがあつた頃
あの人笑顔が好きで会いに行く
人好きになつてだんだん若がえる
好きだった海が柩に入らない
好き嫌いあつて人間らしくなる
やさしさに触れて全部が好きになる

ひとみ
公誠
ダン吉
シマ子
もと子
半六
展代
あかり
大子
甚之市
柁子
敬介
雅美
和夫
一歩
保州
壽峰

ポーナスを食べてしまったマイホーム
ポーナスの査定議員にしてほしい
枯れるまで棺が吸つた涙つぶ
真つ白いマスクの下にある本音

孝子
宏章
熊四郎
静恵

オリビックへワクチン必須アイテムだ
三回の裏に期待のワクチン打
オベ三度柳に風と生きている
国訛り混せてばあばの笑い皺
生命線いまどの辺り深い秋
主婦半世紀自分で褒めて勲章を
鈍臭く生きて来ました俺らしく

ともこ
孝
規之
隆彦
隆明
孝代
邦夫
靖博
和子
和代
ふみ
純風

川柳塔なら
大久保眞澄報

ひとみ
公誠
ダン吉
シマ子
もと子
半六
展代
あかり
大子
甚之市
柁子
敬介
雅美
和夫
一歩
保州
壽峰

世の動きスピード早く惑う老い
ピッチャーの値打ちも測るスピードガン
式挙げてみ月もせずにもう離婚
巣ごもりをする内老いが加速する
どしんどしん脳細胞の消える音
球根を植えて春待つチューリップ
千枚田耕す父の汗の跡
あふれる愛静かに見守る亡母天女
そのままを絵柄にしたい落葉道
音もなく二人の肩に枯葉降る
紅葉狩り飛んで行きたい背なの羽根
マスクする帽子眼鏡で人違い

ヒロ
淳司
幸子
正美
直樹
登美子
澄子
弘美
おくみ
洋二
三和子
由子

ぼたる川柳同好会(大阪)水野
何でやる隣の犬に嫌われる
お隣の猫と親しくお付き合
どちら迄ちよつとそこ迄近所迄
どっこいしの声が出るから動ける
人動きコロナが増える秋日和

黒兎報
春代
純子
守啓
順子
郁子

誠

長柳会(大阪) 辻村 ヒロ報

ふるさとの風が大好きそばの花
 好きなように生きよと鎖外される
 つれづれに書架を漁って雨が好き
 好きになり虜になったのはお前
 どっしりとした像倒す民の声
 貧乏神どっしりという家を継ぎ
 両袖が似合う寡黙の太鼓腹
 大物だどっしり構えブレがない
 どっしりと居座りコロナ出て行かず
 賃貸の家に居座るドイツ家具
 次世代の肩へどっしりくる介護
 どっしりとほくに居着いた血糖値
 焦点はぶれないマツコデラックス
 父の樹を支える母という大地
 古都礎石千年松支え持つ

西宮北口川柳会(兵庫) 緒方美津子報

傘下には入らず自分守り抜く
 幸せがギョッと詰まった写真立て
 悩む夜はもつと笑えと光る星
 句会再会眉はしつかり画いて出る
 今日こそは決断すると零さる
 寝込まれて分かった妻の大切さ
 臆病な自分を騙す勝負服
 この兎との幸せ求め離婚する
 諦めて幸せなんだと言いきかす

成子 富子 國治 寿之 敬子 希久子 武人 かずお 昭 千代 扶美代 順啓 尚子 かこ 比呂志 光久 敦子 雅美 哲子 千賀子 富次 俊雄 水筆 洋次郎

女優ですたまに詩人もしています
 幸せ感違う妻とのデイスタンス
 笑顔よし幸せの種運ぶ孫
 核の傘あろうとムダな核いくさ
 幸せがそこ迄来たが後戻り
 一日の重さを背負い夕日落つ
 どうどうと生き抜いて行くマイペース
 お茶漬がビフテキに勝つこともあり
 時間かけ票をむいてる母の秋
 がむしやらに働いてきて今が旬
 わが心善と悪とをかさに着て
 真つ当に生きて堂堂闊歩する
 背伸びせず今の暮らしが幸せだ
 大阪のオパチャン堂々値切りはる
 木枯しにジワリとせまる第三波
 生かされて生きてることに気づく朝
 突然の雨相合傘も跳ねている
 告白は傘のしずくを切ってから
 ときめきは生きる力の調味料
 夢を追う努力を運が追っかける
 笑う話す幸せを知る昨日今日
 騙し合う心の底は泥まみれ
 何よりの幸せ心風いである

八尾市民川柳会(大阪) 中園

荒波へ一歩踏み出すランドセル

ひとみ 昭九朗 邦男 健彦 新録 廣光 紀乃 伯備 宏造 勝弘 弘委智 良種 野鶴 野薫 あい子 盛夫 りこ 武彦 紀華 堅坊 由美 正彦 美津子 清報 壽峰

油断大敵コロナに地球のつとられ
 母さんの大根漬けは世界一
 おいしいと言ってほしいがまずい顔
 歩かなきゃ夢に向ってさあ行こう
 卓袱台が家族のドラマ覚えてる
 家族にも言えぬ二、三の隠しごと
 ガラス越し母と手合わす面会日
 見て食べて旨いと唸る妻の味
 群青の海の底まで反戦歌
 青空と一緒に食べるバーベキュー
 恋遂げて月に吠えたい身の震え
 安穩の谷へまさかの土石流

六甲川柳会(兵庫) 梶谷

和郎報

梅干しと夕陽ひそひそ話する
 ただ居るだけで微笑みとれる赤ん坊
 赤く燃え何故か静かな曼珠沙華
 海原へ真つ赤な入日また明日
 赤い糸細かくからんで二重珠
 一言が笑いの渦で和ませる
 スパコン飛沫の渦を解き明かす
 アンコール大きな渦がうねり出す
 ひまわりの迷路に子等の声の渦
 俯瞰して見れば渦中の火種見え
 さまざまな個性句会を盛り上げる
 ファッションのマスクいろいろ華やかに

涼子 華 和雲 清 信子 高鷺 卓郎 寿之 常男 あかり 耀一 欣之 公輔 廣光 正彦 洋次郎 弘 芳江 盛夫 崇史 和宏 恭子 哲男 克美

いろいろと言われて来たが俺はオレ
共選で没になった句天になる
青春はミラーボールの恋でした
今独りこれまでの事聞かないで
球界史灯す直球見事去る
コロナ禍に明かりも冴えぬルミナリエ
山裾の空家に一つ移住の灯
点火ミス彼女は違う山へ降り
赤信号灯り自肅の通天閣
万灯会無事に届けよ黄泉の国
逼迫の医療へともす灯が欲しい
まといつく亡弟なんだこの蛍
君が来るだけで丸あるくなる空気
嫁いびり今は姑がいびられる
かたくなな扉を酒がそつと開け
柚風呂で今日の愚痴みな溶けました
場当りのGOTOイトマスク代
デイスタンス前行く妻は心得得
今年こそ今年こそはとジャンボくじ
盆暮れに毎回ほしい給付金
乱反射しながら超える大晦日
望みごと叶えて欲しい変換キー
来年までにコロナ終息して欲しい
川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報
踏み出せば新たな風と鉢合わす 朝子

大地には我家絆という根っこ
雑踏の渦には遠く距離をおく
魅入られたまま一冊の朝ぼらけ
コロナ消え心底笑う明日は来る
多面体だから人間面白い
ユーモアとベールソス有って座が映える
父さんの真面目にずれるカンツォーネ
鍵いらぬ暮らしボツンと一軒家
パソコンの側に教える孫がいる
命綱つけてノルマへ体張る
半ば安心半ば困惑子の成長
安心が全てのことに勝ります
ニッポンの蛇口は飲める水が出る
一言が過ぎて渦中を抜けられず
渦を巻く疑問掬って正義感
指まわし近付き狙う鬼やんま
渦巻の猪口で新酒を試飲する
古希半ば指紋が薄くなっている
好調な時は少少引きしめる
運がよくプラマイゼロの老いの坂
四番で打点稼いだ事もある
好調のからだ熱燗欲しくなる
好調の証今宵はまだ吞める
近道だ落葉踏み踏み調子良い
喜寿過ぎて気力体力絶好調
口止めをしたのにウワサ流れてる

か こ
祥 昭
欣 之
賢 子
和 織
壽 峰
茜
かすみ
郁 夫
壽 子
弘 委
武 彦
弘 一
仁
秀 雄
彰 一
信 子
勝 弘
さち子
一 文
博 泉
一 步
博
麗
高 鷲
清

喋りたい衝動口止めされてから
信用度口止めをして確かめる
口止めをされたザクロの爆破音
おばちゃん口止めこれは難しい
お互いに固い約束持っている
口止めをされればすべて忘れ去る
嫁のこと言うなど妻に口止めす
未完の部分多い自分が面白い
川柳花の輪(大阪) 岡本 薫報
支度してだんだん気合本物に
待ってます校庭ひびく子らの声
元彼が隣になった予約席
抜かれてもあせらず歩むマイウェイ
楽しみは先がいいけど先がない
エンディングノートはまだまだ先に
念には念入れた支度にボカがあり
川柳藤井寺(大阪) 太田扶美代報
終章は成り行き任せ風まかせ
成り行きで決めた夫と五十年
アベさんがどうなるのかな見物です
手を上げるもう成り行きは気にしない
ネオン点滅道頓堀の川悲哀
様子を見ましようとい医者が首ひねる
成り行きを静観してる端の席
大子

コロナ禍にサンタ待つ庭温かい
灯台の点滅寒し冬風

我が命点滅しつつ今日も無事

命の灯点滅しても急くまいぞ

点滅のツリー淋しく立っている

幻想の漁火映える風の海

オンオフはあなたの心眼にうつる

成り行きで親に背いた金婚譚

いい人だ点滅しだす恋心

成り行きが右なら僕は左行く

慧眼の勘成り行きの先キヤッチ

成り行きに任せきっている命

成り行きに任せていたら戦の世

善悪の点滅悪が強いボク

成り行きに任す子供将来を

抵抗はしない歳にもメタボにも

大山滝句座(鳥取)

新家 完司報

玄関に遊び疲れた靴ゴロリ

両脇のガードくすぐるサ克蘭ボ

安来節も貝殻節も踊れます

左右からライスシャワーのおめでとう

乗り越しをしないときには傘忘れ

オレの部屋ゴミを捨てたら俺も消え

まだ元氣両目両足両手足

難問を抱え頭がゴツチャゴツチャ

フジ子

喜代子

正義

シルク

ゆみ子

壽峰

一文

婦美枝

まつお

久仁雄

欣之

扶美代

みつこ

シマ子

ひろ子

六子

八千代

芳山

くにこ

順子

紀の治

照彦

正人

幸子

乱雑な知識役立つ黄泉の道

人生のけじめの判が軽くなる

身体部品が対になっている

介護の手両脇にあり明日のボク

嫌なことみんな忘れて大欠伸

物忘れする度脳にすぎま風

二人暮らし両方揃い食事する

乱雑な街にはぬくい風が吹く

指一本立てて炎になる刻を待つ

光り射す善の向こうに悪がある

他人の死は何ともないと前総理

気が弛みコロナ拡大第三波

忘れられぬ軍旗燃やした敗戦日

夫介護両方の手で支えます

乱雑なピースをつつまた一つ

老衰の母の話にメモを執る

忘れんば上手な人は生き上手

乱雑な頭にシイタケが生える

豊中もくせい川柳会(大阪)初代 正彦報

公用車心地がいいと話す知事

トラベルもイトモ老は蚊帳の外

コロナに負けず陽射しいっぱい掴みたい

生きるのは泣くためやない笑うため

ぱつとなる部屋の空気を君は持つ

白無垢をあなたの色に染めました

ゆたか

麦青

富隆

雄大

風露

由紀子

けいこ

石花菜

美ツ千

小鹿

隆昌

道春

重忠

久子

俊文

コスモス

規雄

完司

多美子

歌留多

憲央

時子

多津子

健二

葬儀から帰り着替える誕生会

冬の蝶夢追いかけてひとりぼち

うちの人ぱつとしながいい亭主

コロナ禍で沸点下げたまま暮らす

帰らない覚悟が出来て貸すお金

独り居の電話へボチも耳を貸す

美人には金貸したいが誰も来ぬ

白黒をつけてすっきり胸の内

秋日和思いがけずもまるい月

冬の陽を侮るなかれ背に温い

このドラマ何回目かな冬の午後

酸い甘い知り抜いてまだ生きている

培ったガッツですぐに立ち直る

食べ頃にぱつと笑った丹波栗

人生に空白つくり悔やむ今

遺影からまだまだまだと笑われる

ぱつと見は硬いようでも根はソフト

後悔の念が染み出る白い息

ゆつくり咲いてぱつと散りたい命の穂

宝くじ当たればぱつと奢つたる

家族みな違う寒さを持ち帰る

白旗を見せない妻の無言劇

長かったり短かったりする時間

ライバルにA.V.を貸す試験前

下積みの労苦報われ花開く

ふる里の雪の白さにある温み

武彦

真理子

英三

きらり

(水)玲子

公子

堅坊

野鶴

求芽

英旺

ひとみ

肇

ふりこ

美津子

(福)正彦

見清

(初)正彦

則彦

美智代

勝弘

弘委智

(岩)玲子

敏昭

洋志

満作

黒兎

詩歌とともに 72 年！ 伝統と信頼の飯塚書店刊行の川柳書籍

最新刊好評発売中

川柳人が楽しむ 漱石俳句

いわさき楊子 著

漱石の俳句を川柳的視点で鑑賞。俳諧的考察では解き明かされない漱石の人となり、際立ち、諧謔味あふれる「エモい」漱石の世界が広がりました。漱石句 162 に著者の川柳作品 109 を収載。写真と挿画も掲載した、新しい漱石鑑賞、評論となりました。



B6 変形判並製 128 頁

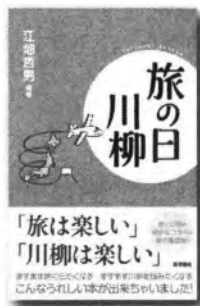
124×184mm

¥1200 円 (税別)

【全国の書店でご購入出来ます。在庫がない場合は直接小社まで】

旅の日川柳

江畑哲男 編著



オールカラー 128 頁

¥1000 円 (税別)

スポーツ川柳

編集部編 田口麦彦監修



オールカラー 128 頁

¥1000 円 (税別)

川柳にかかればスポーツもかたなしです。イラストもたくさん掲載した傑作集。

「旅の楽しさ」と「川柳の楽しさ」絶妙にコラボした傑作集が出来上がりました。

〒112-0002 東京都文京区小石川 5-16-4 飯塚書店 TEL03-3815-3805 FAX03-3815-3810

(HP) <http://izbooks.co.jp> (E-mail) iizuka@izbooks.co.jp

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
豊 中 もくせい 川 柳 会	15日(月) 13時50分締切 明日・弾む・さなり・自由吟	豊中市立中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩 5 分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川 柳 たちばな	19日(金) 13時45分締切 席題・囲む・うっかり・自由吟	立花北生涯学習プラザ 尼崎市塚口町3-39-7 TEL 06-6422-6741 〒661-0953 尼崎市東園田町 3-49-5 藤井宏造
川 柳 ねやがわ	20日を誌上句会に(20日締切) そろそろ・直線・逃げる・咲く 自由吟	〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岸 和 田 川 柳 会	20日(土) 14時 風・踏む・明るい・メッキ	岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ徒歩 5 分 〒596-0076 岸和田市野田町2-13-19 中岡香代
川 柳 塔 みちのく	20日(土) 17時締切 今・数字・甘い・らしい	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」TEL0172-32-2591 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL0172-36-8605
川 柳 藤 井 寺	21日(日) 14時締切 アピール・ふところ・席題共選	藤井寺市生涯学習センター・しゅらホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5-8-20-303 鈴木いさお
南 大 阪 川 柳 会	22日(月) 14時締切 いやいや・でたらめ・どよめく 雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 メトロ谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒569-1124 高槻市南芥川町9-28-901 松岡 篤
川 柳 塔 まつ 吟 社	26日(金)締切 2月3月誌上例会 2月:鳥・地・ひょっこり・どろどろ・軽 3月:歩く・流す・レンタル・ぼつぼつ・素	投句先 〒690-0012 松江市古志原7-19-19 中筋弘充
川 柳 塔 すみよし	27日(土) 14時締切 雑・乱れる・はらはら	住吉区役所内 住吉公民館 2F 〒580-0026 松原市天美我堂3-130-2-404 森松まつお
和 歌 山 三 幸 川 柳 会	27日(土) 13時15分締切 まだ・食べる・風呂 投句締切18日	和歌山商工会議所 4階 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの 市 民 会 川 柳 会	28日(日) 14時締切 役員・拾う・とんとん・席題	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷺」駅下車 北へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川 柳 ふうもん 吟 社	28日(日) 13時から 自由吟・知る・マスク・倍・席題	県民ふれあい会館 4F 鳥取市扇町2 1 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
川 柳 さん だ	当分の間休会します。	キッピーモール 6F (JR三田駅前) 〒669-1545 三田市狭間が丘5-10-19 谷 祐康

★上記は年初計画です。諸般の事情上、詳細は各柳社にお問い合わせください。

2 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	そろそろ・恩返し・厳しい 誌上句会・1 月末日締め切り	奈良市中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄「奈良」駅④番出口 徒歩 5 分 〒633-0341 磯城郡田原本町薬王寺150-21 中堀 優
城 北 川 柳 会	6 日(土) 14時締切 張り切る・ほんま・日本・自由吟	旭区老人福祉センター 3F メトロ谷町線「千林大宮」駅③番出口を左後側 投句先: 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
川 柳 とんだばやし 富 柳 会	6 日(土) 14時締切 異・編む	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ 200 m 〒584-0064 富田林市不動ヶ丘8-31 山野寿之
倉 吉 川 柳 会	6 日(土) 14時締切 よける・諄い・察する・席題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
西宮北口 川 柳 会	8 日(月) 14時締切 席題・注ぐ・ビタミンその後 自由吟	西宮市立中央公民館 6F 講堂 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「ブレラにのみや」 〒663-8141 西宮市高須町2-1-31-830 福田正彦
川 柳 塔 さ か い	8 日(月) 締切 選ぶ・冬・ほかから 折句:と・よ・た	投句会
ほ たる 川 柳 同 好 会	9 日(火) 13時30分締切 絵・呼ぶ・まだ	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール蛭池 蛭池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
川 柳 あまがさき	9 日(火) 14時締切 ほめる・冗談・流れる・自由吟	尼崎市女性センター・テレビエ 2 階 阪急武庫之荘駅南へ 5 分 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
六 甲 川 柳 会	10日(水) 締切 誌上句会 ストレス・投げる・やれやれ 削る・自由吟	〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4-11-11 上田和宏
あかつき 川 柳 会	12日(金) 14時締切 まだまだ・一・元気・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2F) メトロ「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒543-0013 大阪市天王寺区3-6 木村ビル2階 あかつき川柳会
川柳大阪	13日(土) 13時開場 なんで・勝・旅	メトロ・長堀鶴見緑地線・京橋駅 研修室 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
川 柳 塔 わかやま 吟 社	13日(土) 14時10分締切 兼 題=程ほど・南・オロオロ 課題吟=歩	和歌山商工会議所 4 階 和歌山市西汀丁3 6 兼 題 〒649-6253 岩出市紀泉台366 藤原ほのか 課題吟 〒592-8349 堺市西区深井森町東2-208-5 柴原道夫
川 柳 塔 打 吹	13日(土) 13時30分締切 指・望む・じっと・席題	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川 柳 会	14日(日) 14時締切 突然・ほんもの・深い・雑詠	八尾市安中町3-5-1 洪川・安中集会所 JR「八尾」駅から徒歩 5 分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之

柳界展望

協会より表彰された。

▽訂正とお詫び△

○1月号、P 49 下段 16 行
目、今年までも今日まで。
で。

★「第55回千葉川柳大会誌上大会」参加者295名。同人成績。

特選 谷口 修平

デジタルの森に隠れた
犯罪者

▽表彰△

○西出楓楽相談役は、マスコミ柳壇の指導者として十年以上にわたり川柳の向上に貢献したことに
より（一社）全日本川柳

▽削除△

○1月号、P 16 下段 14 行

目、「鷹を生む鷹に悔しい過去がある」は類似句のため削除いたします。

▽新誌友紹介△

兵庫県	原田 雅代
紹介者	藤井 宏造
吹田市	西沢 司郎
紹介者	鈴木いさお
大阪市	尾崎 文子
紹介者	川端 一歩
神戸市	みぎわはな
紹介者	古今堂蕉子
兵庫県	下雅意引六
紹介者	森山 盛桜
明石市	瀬島流れ星
宮崎市	押川 和博
宿毛市	浦田 裕充

「川柳葦群」創立 15 周年記念川柳大会

日 時 令和3年5月16日（日）午前10時30分開場
会 場 柳川市民文化会館「水都やながわ」
〒832-0058 柳川市上宮永町4-3-1
電話 0944-73-7777

会 費 2000円（昼食・発表誌呈）
課題と選者（投句拝辞）各題2句 出句締切12時 開会13時

「木雲」	佐藤 俊悟	選
「残す」	野沢 省悟	選
「肌糸草」	小島 蘭幸	選
	萩原 奈津子	選
	黒川 孤遊	選
	古谷 龍太郎	選

事前投句 4月30日締切（消印有効）出席者に限る
「雑詠」 梅崎 流青 選
投句先 〒832-0077 柳川市筑紫町7-0-26
吉開 綾子 宛
懇親会（事前申し込み）
7000円 17時から 終宴19時15分
料亭 御花（電話0944-73-2189）
主 催 「川柳葦群」

番傘川柳本社名誉主幹 磯野いさむ氏は令和2年12月8日に逝去されました。享年103。謹んでご冥福をお祈りします。

「咲くやこの花賞」 題と選者

第1回	「バランス」	森中恵美子	選	2月20日必着
第2回	「卑怯」	中野 六助	選	3月20日必着
第3回	「訛り」	笠島恵美子	選	4月20日必着
第4回	「漂う」	菅沼 匠	選	5月20日必着
第5回	「なんぼ何でも（詠み込み不可）」	前年度優勝者	選	6月20日必着
第6回	「もやもや」	西 恵美子	選	7月20日必着
第7回	「墓場まで持つてゆくもの」	井上 一箇	選	8月20日必着
第8回	「耳」	天根 夢草	選	9月20日必着
第9回	「埧塙（るつば）」	樋口由紀子	選	10月20日必着
第10回	「けち」	新家 完司	選	11月20日必着
第11回	「流」	赤松ますみ	選	12月20日必着
第12回	「台詞」	小島 蘭幸	選	1月20日必着
参加費	2000円			
問合せ	TEL・FAX 072-953-8700			

川柳「瓦版」

朝日なになわ柳壇 今年の十秀

— 令和2年12月23日 朝日新聞発表 — （太字は本社同人）

川柳塔社相談役 西出 楓楽選

最優秀句

懸命に演じた僕はエキストラ 坂上 淳司

秀句

籠る夫婦不協和音が流れ出す 穂口 正子

考えておくと断るやわらかさ 葛野 直子

指揮棒を妻にも振ってみたいけど 穂山 常男

儲けより使って価値が出るお金 大原 文夫

先生もキラキラネーム一年生 谷口 由子

わが家での眠る秘宝は百五歳 水野 黒兎

急ぐ人お先にどうぞ散歩道 合田瑞美子

六文銭以上の儲けなど要らぬ 出口セツ子

ヒロシマもナガサキもドラマではない 太田 昭

最優秀句

番傘川柳本社主幹 田中 新一選

秀句

あなたにはあなたしかない色がある 井本 健治

ゆつたりの暮らししっとり紡ぎだす 阪本 秀子

笑い飛ばした母をまねして挫けない 吉村久仁雄

少年はリング切り口はや黄ばむ 鳥居 宏

がむしやにやってミスして知恵がつく 佐藤 盛夫

575自分自身を振り出す 鈴木 栄子

長男の二字が肩から離れない 鈴木 栄子

何かあったんちゃうかと母が来る 小山恵美子

夜が明ける意義ある日をと誓う日々 樋口 真

ぶつかってはね返された父の壁 山崎 達彦

編集後記

★豪雪の今年つくらぬ雪
だるま 薫風

★新年号「句集椿守」を読む」の中で引用された句「われは雁 月の真下を渡るなり」は「月の真上」ではないかとお尋ねがありました。筆者の月波と生さんの原稿を下読みしたとき、生さんは真下で鑑賞していることに気づきました。八木千代先生に原稿をお送りして感想をお聞きしました。先生からご了解を得て返信の一部を掲載いたします。作品の背景や、一句を生む苦しみが理解できるかと思います。

のと、妄想に近い想いを抱いていた時期があります。それはそれなりに納得した作品で、その後10年あまり、それでよしと自分を甘えさせていました。ところが5年ほど前から（90歳の頃）川柳さんに叱られたのです。それからずーっとこの句に拘り苦しかったのです。どこをどう直せばよいのか、どうしても見つけれず、あの頃から迷い、核のような存在でした。ところが与生さんに添削して頂いたも同然です。「真下」と。あの頃はあれで良かった。けれど今の私は違う。絶対に「真下」です。これからは「月の真下」で通させて頂きます。安心しました。たった一字でより深くより真実を帯びてくると……。

★米子在住の八木千代先生と時々お電話でお話をする。昔から川柳に敬意を表して「川柳さん」と呼ばれる。96歳の今も厳しく自身を凝視し心を吐きつくす作句姿勢には、私もそうありたと教えられる。句集「椿守」は平成11年に葉文館から発行された。

★冬来たりなば春遠からじ、皆さまお大事にお過ごしください。

（朱夏）

△元旦に「リモート会」を家族で実施した。長男一家（東京）と次女一家（京都）と我が家（大阪）の総勢11名3元リモート

最初に選者に指名された時、先達の句や佳句を没にしないかと大変なプレッシャーでした。初心者育成の一環だと聞き、少し気が楽になりました。また選者に指名されたら断つてはいけないとも聞きました。芸道では師匠と弟子の關係があり、上下關係は絶対です。それに引き換え川柳の平等性は魅

力的で新鮮です。また「共選」も川柳の特徴だと思います。一人の選者が天に抜いた句が、別の選者が没にしている例もあります。選者の感性によって評価が分かれる例で、川柳の複雑高適さを感じます。

旅行、読書、マジック、テニス等の趣味を経験した上で、川柳に出会えたことを嬉しく思うこの頃です。（副井ゆたか）

新年会でした。孫達がはしゃぎ爆笑。母（96歳）のうれし涙など、コロナ禍の中でも楽しいひとときでした。

△パソコンに「ZOOM」をインストールするだけです。あとはメールアドレスを使って招待し合えば、全員が画面上で会話が可能です。意外と簡単に出来ました。

△だけど、何回もやる事ではないとも思いました。3家族が順番に画面に向かって話すが「べちゃく

「ちゃ喋る」感じがありませんでした。共通の話題があまり続かず、今回は少し不満が残りました。

△コロナ禍で投句句会が続く、その「べちゃくちゃ喋る」楽しみが無く、ストレスが溜まっています。真剣な中にも、お喋りが川柳句会の良い所だと改めて思いました。

△ワクチンが出来て、少し広めの会場で、安心安全な句会が、早く開けたらと願う次第です。（憲彦）

作品募集

4月号発表 (2月15日締切)

川柳塔 (8句)	小島 幸選
水煙抄 (8句)	西出 楓選
愛染帖 (2句)	新家 完司選
檸檬抄「再生」 (2句)	石橋 芳山共選
インスピレーションナビ (2句)	古今堂 蕉子選
一路集 (2句)	大西 泰世選
「調味料」	澤井 敏治選
「芸」 (3句)	田賀 八千代選
初歩教室「芸」	高瀬 霜石担当

初歩教室「芸」は5月号発表

5月号
檸檬抄「弾く」
一路集「まるい」「髪」
初歩教室「鳥」

お知らせ

本社2月旬会は誌上旬会として開催、1月31日に締切りました。発表は4月号です。
ようやくワクチンが開発されたとはいえ、感染力の強い変異種のウイルスが日本でも確認され、一部地域では再び緊急事態宣言が発令されています。
三密を避け、ソーシャルディスタンスを守り、手洗い、消毒、マスク、そして換気を意識して、ご安全にお過ごしください。

第9回春の川柳塔まつり誌上大会

詳細は川柳塔2月号表紙裏ご参照

投句締切日2月28日、発表5月号

課題「波」「飾る」「自由吟」

川柳塔柳箋

3冊 送料共 1,000円

事務所あてお申し込み下さい。

〒543-0052

大阪市天王寺区大道一丁目一四一七
花野ビル201号室

発行所

川柳塔社

電話

(〇六)六七九一三四九〇番
振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

定価 八百円(送料100円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇二一年(令和三年)二月一日発行

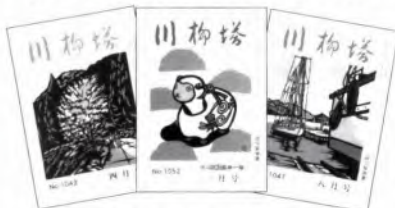
発行人 小島 和幸

編集人 木本 朱夏

印刷所 美研アート

川柳・俳句・エッセイ・小説 新聞・広告・ポスター・伝票等

あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10

TEL (06) 4800-3018

FAX (06) 4800-3028

Eメール bikenart@ea.mbn.or.jp

ホームページ <https://www.bikenart.com>

オニザキのプレミアムロースト

つぎま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、

香ばしい薫り。舌と記憶に

しつかりと残る、深いコク。

料理をより美味しくする

ゴマを作りたい、真つすぐな

想いから生まれた逸品。

それが「プレミアムロースト」。

素材本来の良さを余すこと

無く引き出した、オニザキの

自信作をお届けします。



株式会社 オニザキコーポレーションセールズ
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>